

高麗時代銅鏡及鏡 第四百七十四圖



東洋史講座
通度寺香爐

傳燈寺香爐

牡丹唐草八花鏡

雙鳳方鏡

雙龍鏡

雙飛龍八花鏡

海柏魚龍八菱鏡

樓閣人物八菱鏡

雙鳳如月八菱鏡

宮殿神仙鏡

雙禽菊花鏡

鐘形鏡

如く高麗時代は支那や日本の鏡の形式の模倣に甘じ殆ど彼等の獨創の者を作らなかつた今此等高麗鏡の形式を類別すれば(一)漢式系(二)唐式系(三)宋金元式系(四)日本系とすることが出来る。

(一)漢式鏡 高麗時代の鏡背の文様には全然漢式鏡を摸した者がある宋金時代に漢式鏡を摸するところが相當に行はれてゐた様であるから畢竟高麗は其影響を受けたのである此種の鏡には四乳方格鏡・四乳日光鏡・TLV系鏡・半圓方格系鏡・青蓋龍虎鏡などがあり何れも忠實に漢式の文様を摸し又は漢鏡を直ちに原型に用ひし者もあれども一般に銅質好からず技工は拙に文様は鮮明を缺いてゐる。

(二)唐式鏡 には瑞獸葡萄鏡・樹閣彈琴鏡・仙人舞鳳鏡・寶相花鏡などがあり其形も彼に倣ひて圓鏡もあれば八菱鏡・八花鏡もある原型の洗鍊を失ひ疎漫殆觀るに足らざる者となつた。

(三)宋金元式鏡 支那に於ても宋金元時代の鏡は手法既に退化したのであるから之を摸した高麗鏡は更に層粗拙の者となつたのは己むを得ぬ鏡の形は圓・方・四菱・六菱・八菱・五花・八花・隅切方形・葉形鏡の外柄鏡及び燧鏡と稱すべき者がある鈕には鼻鈕最も普通にして鏡背には素文・植物・動物・人物・器物及び文字等の文様をあらはしてゐる植物には牡丹・寶相花・蓮花及び各種の草花文があり動物には龍・飛龍・瑞獸・馬・鳳凰・鶴・鴛鴦・尾長鳥・孔雀・雁・鯉及び麟鳳龜龍の四瑞圖などがある人物文には許由・寧戚・舞樂・獵虎等の圖や海舶殿堂などがある器物文は稀にして唯雙劍・寶珠文を見るのみである又

往々文字銘をあらはした者がある最珍らしきは女眞文字と稱する異體の文字を作つた者で此他湖州鏡・蘇州鏡など匠家の欸識を浮彫にせる者もある然し此等は宋元よりの輸入品である又別に二十四氣鏡・八卦鏡・銅鼓文鏡・卍字文鏡などもある。

(四) 日本系鏡 は多く藤原鎌倉時代の雙禽菊花鏡・双禽瑞花鏡・双禽團菊鏡・松喰鶴鏡等を原型として鑄成せし者にして手法は頗る鈍重稚拙當時我國製出の者と比較にならぬ但し往々我より輸入せしまゝの精巧な鏡が発見せらるゝこともある。

要するに高麗鏡は主として支那鏡日本鏡を摸倣して殆ど高麗人の創作新案に成りしと認むべき者はない其上技工の洗鍊を缺き文様も亦頗る粗漫の者となつた。

高麗出土の鏡は其數甚だ多く且多種多様なれば今此を詳説するの暇はない唯注意すべき者二三を左に擧げて置く。

第一七四圖の牡丹唐草八花鏡には外區に「西京閤門祇候金演造」と陽刻してゐる西京は即ち今の平壤にして閤門祇候は高麗通禮門の官名なれば此鏡が平壤にて造られしことは明かである金鏡の様式に倣ひ手法織麗金鏡と區別すること能はざる程よく摸造されてゐる又是れと同様の形式手法を示せる鏡の内區に「西京僧精口造」の文字あり寶相花鏡の鼻鈕の下に「高麗國造」の陽刻銘あり何れも高麗鏡の正確

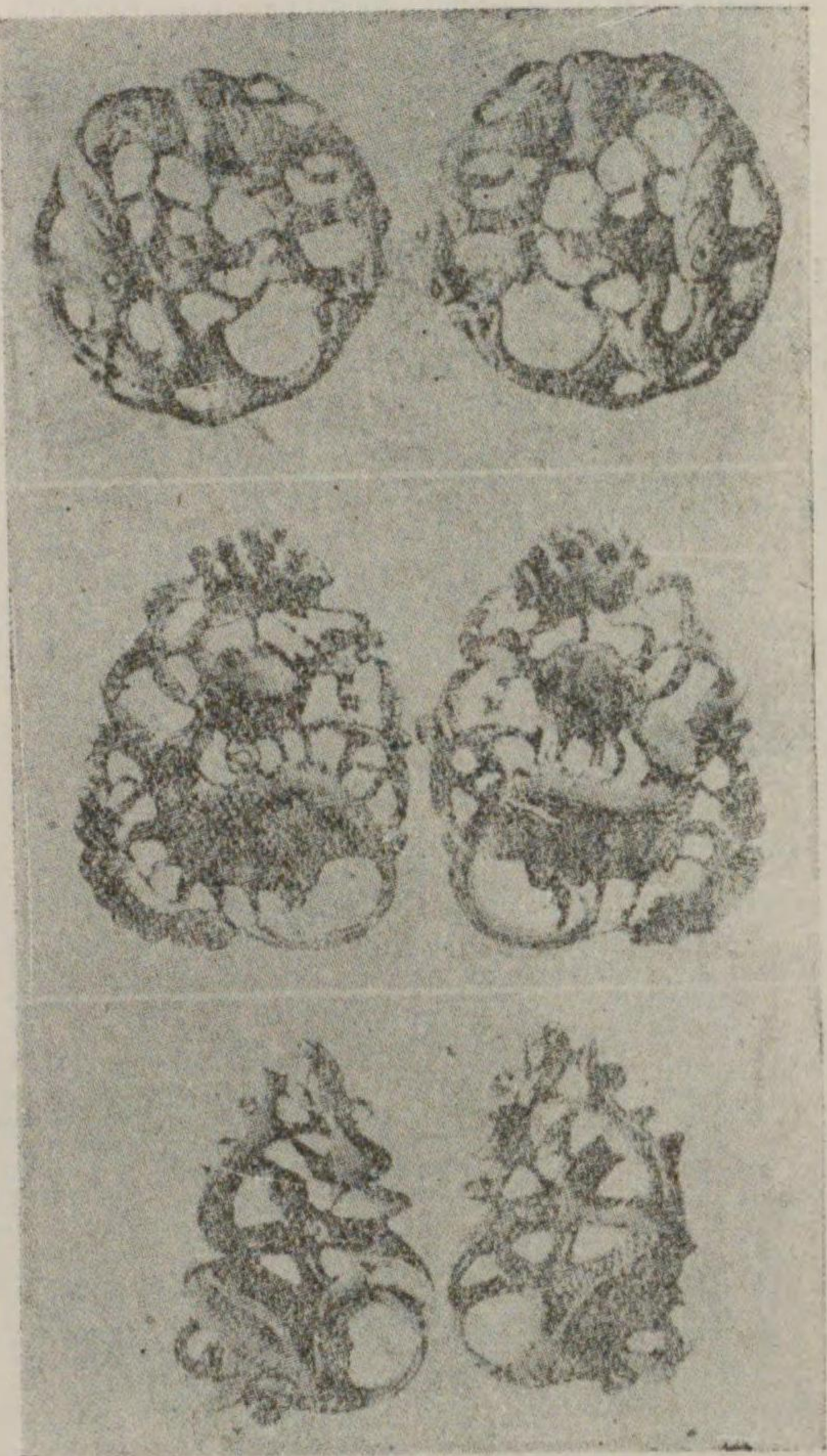
な標本となつてゐる此他雙龍文・佛閣人物文・海船蛟龍文・双鳳文等は最も好んで用ひられた高麗鏡の文様である。

銅器には此外銅鼓及び銅盤、五鈷鈴等の法具・銅壺・銅瓶・銅匕・銅鏡・銅箸等の食器がある此等には

或は文様を陽刻し或は象嵌を施してゐる又別に銀製の食器も行はれてゐた。

佩飾品には冠附屬の透彫金具があり簪・釧・指輪・帶金具・香盒・護符又は小佛像の容器などがある冠附屬の金具は鈍金製銀製または金銅製にて各一對をなし動植物其他を透彫にし

第百七十五圖 高麗時代佩飾品

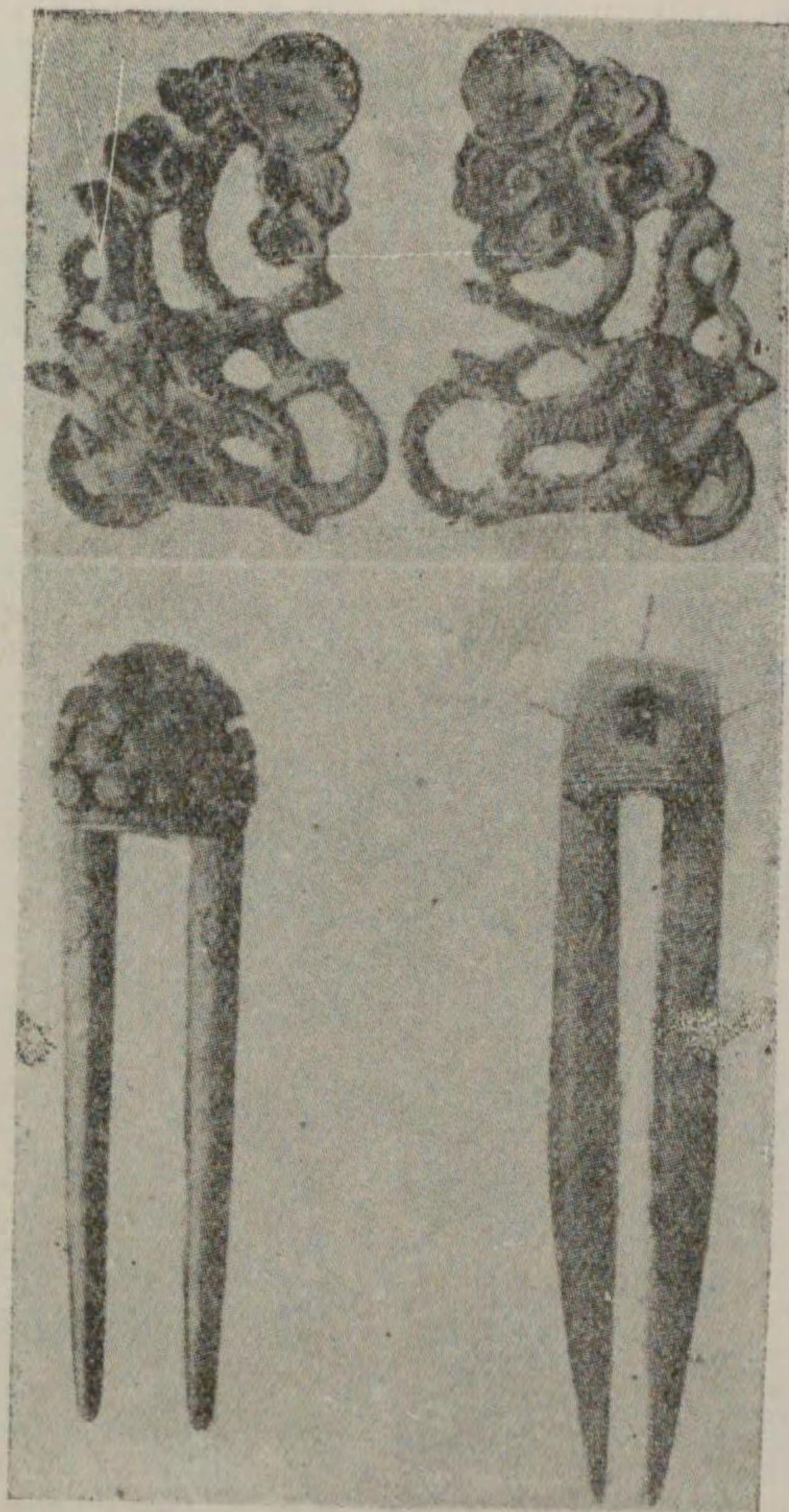


裝飾透彫金具三種

植物には蓮花・仙桃・荔枝最も普通にして動物には龍・鶴・鳧雁・鴛鴦・龜・魚・蛾などがあり又月に雲などもある其意匠の變化に富み手工の細巧優雅なること驚くばかりある此他鏡臺・針筒・鉢・鐺・耳搔・剃刀・銅印などあらゆる工藝品が墓中より發見され高麗人の生活状態を研究すべき好資料を提供してゐる是

は等の金屬製工藝品に或は鍍金或は打出し或は象嵌或は金鏤細工など種々ある技巧を弄し尤も織巧精美の特質をあらはしてゐる。

瓦。瓦は當代の初め新羅時代の手法を踏襲し頗る觀るべきものもありしが次第に退化し技工粗漫に



種二響及種一具金彫透飾裝

流れ文様の種類も少くなつた高麗王宮の遺址たる開城滿月臺より當時代を通じて多數の巴瓦唐草瓦や鷓尾の殘片が発見され又平壤長樂宮址・珠宮址・大華宮址其他各道の寺址よりも出土した巴瓦には蛇ノ目文・蓮花文最も普通にして獸面・雙鳳・梵字等を作るもあり唐草瓦には蛇ノ目文

品飾佩代時麗高 二ノ圖五十七百第

・唐草文最も多く獸面・鳳凰・梵字をあらはしてゐるものもある又唐草瓦は元の影響を受けて其下端垂れて三角状をなせるものもある平瓦の裏面巴瓦の表面には一般に織細なる幾何學的文様を印起してゐる又滿月臺より鷓尾の殘片が発見され下棟の下部に並べ置く所の雜像の斷片も出土してゐるから當時代

瓦代時麗高 圖六十七百第



朝鮮の美術工藝

には鴟尾は勿論既に雜像が用ひられてゐたことが分かる此雜像は宋の影響に歸すべきものであらう。

満月臺より又多數の長方磚が発見された皆表面に寶相花蓮花等の浮彫を有してゐる恐らくは墻壁などを飾つたのであらう忠烈王の時江華島にて琉璃瓦を焼いたことがあり又何王の時であつたか青瓷の瓦を以て屋蓋を葺いたこともあつた青瓷の發達に伴ひかゝる贅澤な瓦も作られたのである。

陶器 高麗時代工藝の精華は陶瓷器である新羅時代には既に堅緻なる陶器を出だし又往々黄緑釉を施せしものあれども猶稚拙の域を脱せぬ而るに高麗時代に入り宋窯の感化を受け異常の發達をなし青瓷・白瓷・綠瓷・天目釉等各種の優品を産出せしのみならず其創意に成れる青瓷象嵌に至りては精麗妍好世界の珍と謂つてもよい宋の宣和五年(高麗仁宗元、西紀一一二三年)高麗に使せし徐競の著高麗圖經に「陶器色之青者、麗人謂之翡色、近年己來、制作工巧、色澤尤佳」といへるを見れば仁宗の頃青瓷の發達驚くべきものがあつたのである同書又「復能作盤・碟・栝・甌・花瓶・湯瓊・竊倣定器制度」、「狻猊出香亦翡色也、一諸器惟此物最精絶、其餘則越州古秘色、汝州新窑器、大概相類」と曰つてゐる越州の古秘色は五代に起りし青瓷にして定器は北宋に盛なりし定窯の白瓷、汝州の新窑器とは北宋創設の新窯にて焼成せし青瓷である是によりて此等諸窯の青瓷白瓷は高麗陶瓷器の淵源たりしことを知ること

高麗時代陶瓷器 第七十五圖



青瓷形水注

青瓷象嵌文帶盤

青瓷刻寶花盤

青瓷透彫香爐

白瓷透彫雲龍水注

青瓷真砂入象嵌葡萄唐草水注

青瓷象嵌透彫枕

灰黄釉下繪寶花壺

灰黄釉上繪牡丹文樣壺

攝落手寶花繪壺

黑釉白華壺

練上手盤

ができる又磁州窯の手法に倣ひたるは繪高麗にして建窯の系統に屬するは天目釉である兎に角高麗の陶瓷器は大抵宋窯の餘流に歸すべき者であるが其間自ら固有の發達を遂げ特に所謂青瓷象嵌に至りてはまた支那に其形迹を發見せぬから全く高麗人の創意により獨特の發達を遂げたものに相違ない要するに當代初期には宋窯の影響により長足の進歩を遂げ中期に入りて形に於て手法に於て一層完美の域に達し朝鮮陶工の黄金時代を現出したのである而るに末期に近づくに隨ひ漸く衰頽し技工も粗となり形も色も觀るべき者少きに至つたのである。

高麗陶器は其地質釉色及び手法により大要次の如く分類することができる。

素燒 青瓷 白瓷 象嵌 繪高麗 天目釉 雜釉

又形狀と用途より來れる種別を擧ぐれば

瓶、壺、水注、杯、盃、匙、托盞、皿、香爐、洗、合子、硯滴、筆筒、書板、陶印、陶枕、油瓶、鼓胴、唾壺、虎子等

此等の器物は其形態多くは精好或は色澤の瑩潤玉の如きものがあり或は文様の豊麗花の如き者もある其優逸なる者に至りては宋元間に求むるも多く得ることは出來ぬ高麗陶器工の發展の異常であつたことは之を見てわかる。

素燒 新羅時代の繼續として高麗時代には素燒の陶器廣く行はれしも優等なる青瓷白瓷等の器物盛に製出せらるゝに及び唯下等品として用ひられたに過ぎぬ其地質は灰黒色にして堅緻なる者と稍軟弱なる者とある其形は新羅と異り他の青瓷白瓷器と同様に素文の者も打文を印せる者も又篋書の波文唐草文を有せる者もある。

青瓷 高麗時代には早く宋の越窯汝窯龍泉窯などの法を次第に傳へ急速の進歩をなし仁宗の初年宋の徐競の來りし頃には高麗圖經に載せてあるが如く青瓷の技術に於て既に發達の頂點に達したやうである是れは又總督府博物館藏仁宗の長陵出土の青瓷器の淺碧色にして美しき色澤を有せる者を見ても分かる青瓷の胎は灰白色にして上釉の色には時代の先後によりそれと相違がある仁宗陵出土の青瓷の如く淺碧なる者上品にして帶綠碧之に亞ぎ灰色黄褐色と次第に劣り又燒成時の火力の如何により器物の一方は帶綠碧にして一方は變色して黄褐灰色となつてゐる者もある又釉面に細裂文ある者と無き者とがある其表面の手法により素文陰刻及陽刻並びに彫刻の三種類に分つことができる素文の者割合に豊富で其形態は美に其釉色は鮮麗瑩潤なる者もあれば重濁粗獷なる下等品もある陰刻は多く篋彫(劃花)にして陽刻には浮彫と型押(印花)の別がある彫刻には丸彫もあれば透彫もある是等は蓮花・寶相花・蛟龍・饕餮・波濤文・水禽・仙童・鰲龜・麒麟・猿猴等の文様形狀を巧みに應用して意匠豊富手工精妍

釉色の鮮麗と相待ちて麗時此種藝術の異常の進境を語つてゐる。

白瓷 俗に白高麗と稱する者にして大體に於て宋の定窯に倣ひ器物の形態手法殆ど彼と區別し難いものもある無論古墳より出土せし者には宋より輸入されし者も混してゐる白瓷には軟質にして厚手の者と硬質にして薄手の者とあり其色は白・乳白・帶黄乳白・淡青・淡橄欖色等があり手法には素文の者と菊花・芙蓉花・蓮花・水禽・七寶文・双鳳・童子等を或は型拔(凸花)或は篋彫(劃花)にし或は透彫にせる者がある。

青瓷象嵌 是れは全く支那には發見されず蓋高麗人の創意に出でし者にして高麗青瓷の精華である胎土の表面に文様を型押(印花)となし其窪みに白色土又は眞砂を嵌入し青瓷釉を施し焼成せし者である此象嵌は何時頃より始まりしか不明である徐兢の高麗圖經は一言も之れに觸れてゐないから其頃にはまだ起らなかつたか假令既に起つてゐたとするも彼の注意を惹くまでに發達はしてゐなかつたであらう思ふに新羅時代に陶器の表面に諸種の花形を印して裝飾せし者が高麗に入りて忽ち形迹を沒せしも後に至り別に此型押の凹みに黑白土を填裝して一種の文様をあらはすことを工夫し中期頃に大に發展し高宗元宗の頃に發達の頂點に達したものの様に思はれる一時高宗元宗時代の都たりし江華島から最も精美なる青瓷象嵌器を發見するを以ても推知さるゝ。

象嵌文様を應用せし陶瓷器には盃・皿・杯・托盞・瓶・壺・水注・合子・油瓶・唾壺・陶枕等があり其文様は柳蘆水禽・牡丹・菊・石榴・葡萄・雲鶴最も普通にして其他蓮・寶相花・梅・竹・双鸞・双雁・双魚・蟠龍・童子・雨點・七寶等屢に用ひられ其華麗典雅なる文様は色澤の滋潤形態の完好と相待ちて特有の異彩を放つてゐる。

繪高麗 宋元の磁州窯などの影響を受け發生したものであるが亦固有の特質をあらはし稍彼と異なる手法を示せる者が多い此繪高麗には下繪・上繪・搔落手の別がある下繪とは素地の上に鐵釉を以て黒色又は黒褐色の文様を大膽に描き其上に青瓷の上釉を施せし者にして多くは其上釉は灰黄色を呈してゐる上繪とは青瓷の釉藥を施せし者の上に更に黒釉を以て文様を作るか又は黒釉を施せし者の上に白釉を以て文様を作るのである又搔落手と稱するは甚稀にして素地の上に白土を塗り其上に鐵釉を施し草花文を陰刻し間地の鐵釉を削り去りて白土層に達せしめ然る後焼成せしを云ふのである其手法全く支那磁州窯の者と符合してゐるから從來朝鮮出土の者は彼の輸入品であるかも知れぬ。

天目釉 主として宋元の建窯の影響を受けし者にして出土品の中には彼よりの輸入品と考ふべき者もある胎質厚手にして灰白色を帯び其上に黒色又は黒褐色の釉藥を施せし者なれども又種々の變態窯變がある此天目釉には禾天目・建盞・玳皮盞・油滴天目・斑天目・花天目等の種類があり殆ど宋元窯その

まゝの手法を示してゐる。

雜窯 以上の外黄緑釉・緑釉・柿釉があり又練上手と稱して白土と黒土を練り合せて器物を作り鶉羽の如き木理の如き斑文を巧みにあらはせし者がある是れ亦宋窯の影響に出でし者である。

以上説きしが如く高麗時代には一面には宋元の影響を受け一面には固有の創意により異常の發展を遂げ以て陶器工の黄金時代を作り出だせし者にして他の藝術が常に宋元の下風に立ち其摸倣に甘んせし間に立ちて青瓷象嵌の如き彼に無き所の者を工夫し富麗鮮美古今に比類なく終に我國の八代焼萩焼其他に影響を及ぼすに至れるは興味ある事柄である。

八 朝鮮時代

朝鮮時代とは太祖李成桂の建國より日韓併合に至るまで五百十七年間を指すのである。此間を大體に於て左の二期に分かつことができる。

前期 太祖元年—宣祖三十一年(西紀一三九三—一五九八)

後期 宣祖三十二年—日韓併合 (西紀一五九九—一九一〇)

即ち前期は太祖の建國より壬辰役(文祿役)の終結まで後期はそれより日韓併合までをいふのである。

る。

朝鮮の建國は明の創業に近く之れに後るゝこと僅かに二十五年である。太祖は高麗を滅ぼし都を漢陽即ち今の京城に定め都城を築き宮闕を起し宗廟社稷を建て文廟及び成均館を設け前朝蒙古の餘習を除去し紀綱を振作し開國の宏謨を確立した。

高麗末宋儒性理の學一時に勃興し太祖を扶けて國家の建造に參せし者は皆鴻儒碩學の徒であつた。太祖は前朝佛教の弊害に鑑み之を排斥すると共に大に儒教を奨勵せしより儒教は佛教に代りて終始當代文化の中樞となつた。特に太祖、太宗、世宗を始めとして世祖、成宗相繼ぎて大に力を教化に盡し典章文物燦然として具はり諸般の藝術亦之れに伴ひて大なる發達を遂げ當代の文化は成宗朝に於て最高潮に達した。而も爛熟の極衰頹の兆早く茲に萌し次ぎの燕山君以後は紀綱次第に弛廢し宣祖朝に至りて李朝後期の禍根をなせし朋黨の争の起りしのみならず所謂壬辰の亂突發し前後六年間八道の山河干戈の巷となり都邑廟祀の兵燹にかゝるもの多く新羅高麗以來建設し來つた有形の文物の多くは烏有に歸し半島の文化に大なる瘡痕を負はしむるに至つた。

壬辰役後は文化の回復時代であらねばならぬ。而るに庸暗の主光海君宣祖に繼ぎて國弊益繁く加ふるに仁祖の時愛親覺羅氏滿洲に起りて半島に侵入すること前後兩回朝鮮は力及ばずして終に城下の盟

をなし長く清朝の正朔を奉ることゝなつた。壬辰の瘡痍未だ回復せざるに方り更に此打撃を受け國家の疲弊益加はり加ふるに朋黨比周の禍益甚しく唯政權の爭奪を事として復誠心國家を憂ふる者稀に肅宗の時其極に達して紀綱益紊亂國勢いよく陵夷するに至つた。而も英祖正祖相次いで立ち黨弊を緩和して銳意國政の改善に盡力せしより一時復興の時代を現出し平和的事業は相當に行はれ藝術界も多少の生意を回復した。正祖以後は不幸幼冲の君主相次ぎて外戚跋扈の勢を馴致し紀綱の廢弛と共に文化も逡巡し終に李太王の即位に至つたのである。

要するに前期は高麗時代を繼承して一面には明の感化を受け一面には國家の隆運に乗じて相應に固有の發展を遂げたのである。後期は力及ばずして陽に清の正朔を奉せしも陰に夷狄として彼を卑むの傾向ありしより彼の文化の影響を受くること割合に少く爲めに固有の趣味手法を發揮することが出来た。而も當時の士人は政争に没頭して他を顧るの違なく儒教は其形式に捉はれて煩瑣なる儀禮の末に拘泥し趣味枯渴して純眞の情操を缺き其藝術は支那の影響より獨立して特殊の發達をなせしは多とすべきも却つて輕浮頹唐の弊を將來せしは遺憾である。

建築

木造建築は高麗時代の者は僅かに三棟に過ぎざりしが當代に入りて始めて遺物豊富となつた。しかも前期に屬する者は甚だ少く大部分は後期に屬するものゝみである。今其遺存せる建築を種類により大別すれば

- 一、城郭
- 二、宮闕
- 三、客舎
- 四、廟祀
- 五、佛寺
- 六、書院
- 七、住宅
- 八、陵墓
- 九、浮屠及び碑

城郭

京城を初めとして各道の都邑には必ず其周圍に石築若くは土築の城壁を設け處々に城門を開いてゐる。所謂都城邑城である。又險要の地には別に山城を築きて萬一に備へてゐる。元來朝鮮は常に外國の侵入に苦んだから到る處の都邑は城郭を堅固にし不虞の變に備へ特に要衝の地には一層防備を嚴重にしたのである。京城、平壤の城郭は其大規模の者にして水原城郭は斬新にして最も完備せるものである。

城郭の形式は大邱慶州等の如く平地にある者は支那式に其周圍を城壁を以て圍み四面に城門を開いたのであるが其多數は京城平壤等の如き所謂平山城であつて一方平地なる市街を包み城壁を其背面な

る山頂にまで及ぼしてゐる。是れは朝鮮特有の形式にして支那には發見することが出来ぬ。又山城は北漢山城南漢山城の如く廣大なる谷を包圍して周圍の山の稜線に城壁を築いたのである。是れ亦古來朝鮮固有の形式である。

城郭建築の中藝術的方面より見て最も重要なものは城門にして其堂々たる風姿實に賞讃に値する者は少くはない。又城中の高處展望に便なる所には往々樓を築いてゐるが此樓にも建築的價値の頗る優れた者がある。城郭建築の中最も重要な者を列記すれば

京城城郭	南大門	東大門	開城城郭	南大門	平壤城郭	大通門	水原城郭	浮碧樓	長安門
世宗 三〇	李太王 六	太祖 三	成宗 四	宣祖 一〇	光海 五	正祖 二〇	同	同	同
明正統 一三	清同治 八	明洪武 二七	明成化 九	明萬曆 四	明萬曆 四〇	清嘉慶 四	同	同	同
文安 五	明治 二	應永 元	文明 五	天正 四	慶長 一七	寛政 八	同	同	同
一四四八	一八六九	一三九四	一四七三	一五七六	一六一二	一七九六	同	同	同

京城城郭	南大門	東大門	開城城郭	南大門	平壤城郭	大通門	水原城郭	浮碧樓	長安門
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

京城城郭

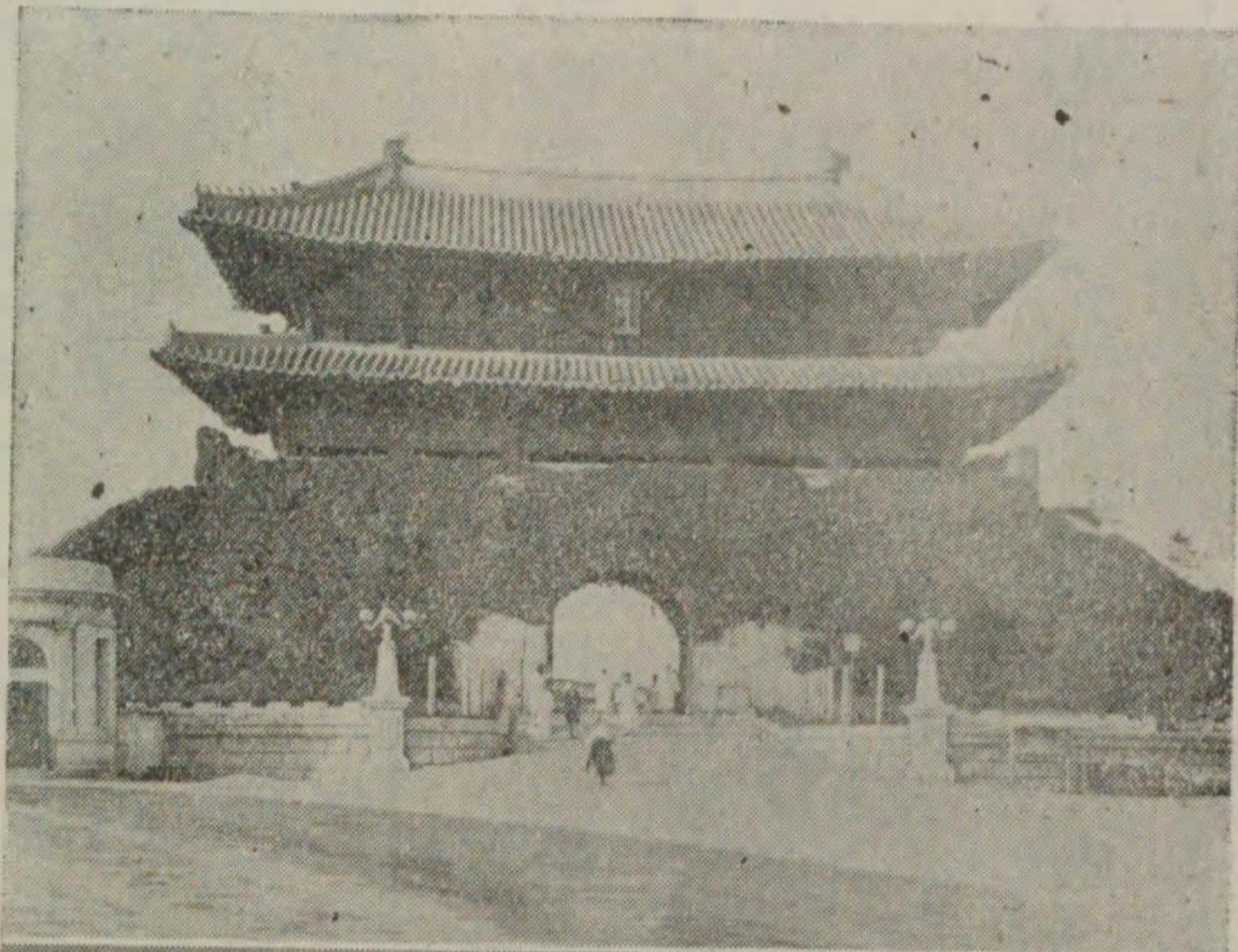
京城は北は白岳に據り連山其周圍を環擁して天成の城郭をなし唯西南及び東方の一部を缺いてゐる。石築の城壁此山巔を縫ひ峯を超へ谷に跨り長蛇の如く四面を包圍して大小八門を開いてゐる。其中崇禮(俗南)、興仁(俗東)二門最も大にして上に重層樓を起してゐる。其他は單層樓の小門である。

崇禮門

世宗三十年の築造に成り下層は花崗石を以て作り中央に虹門を開き其上に五間二面の重層樓が儼然として立つてゐる。權衡莊重にして堅實の風を帯び尤も城門にふさはしい外觀を呈してゐる。其柱は膨みを有し其斗拱は三手先の詰組より成り高麗末なる釋王寺應眞殿に類せる手法を示してゐる。軒亦二重垂木にして屋根は四注瓦を以て葺き大棟の兩端に鸞頭を上げ隅下棟の上には雜像を配し

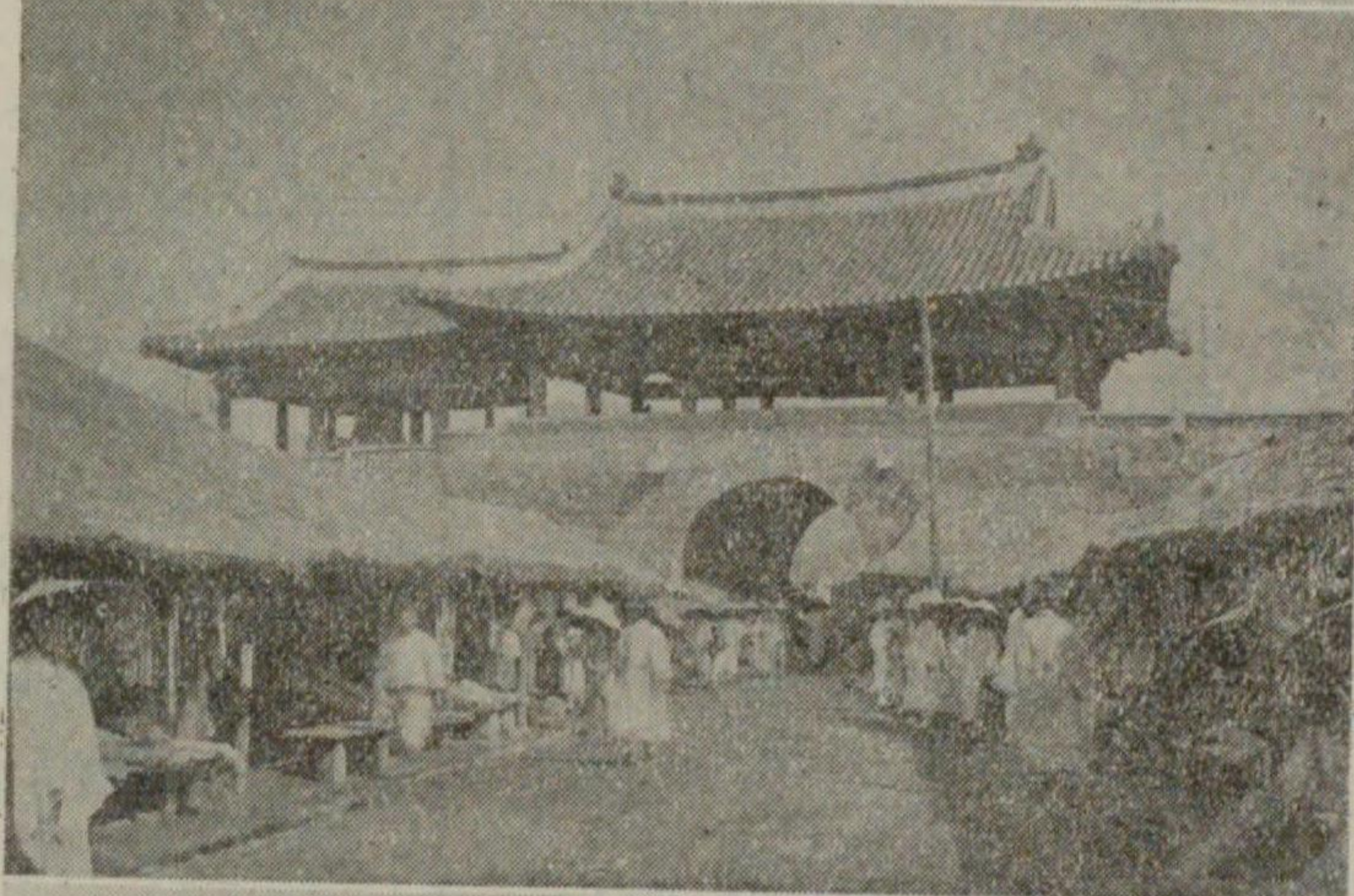
以て外觀の莊嚴を助けてゐる。蓋李朝初期に於ける最も優秀な建築の一である。

第百七十八圖



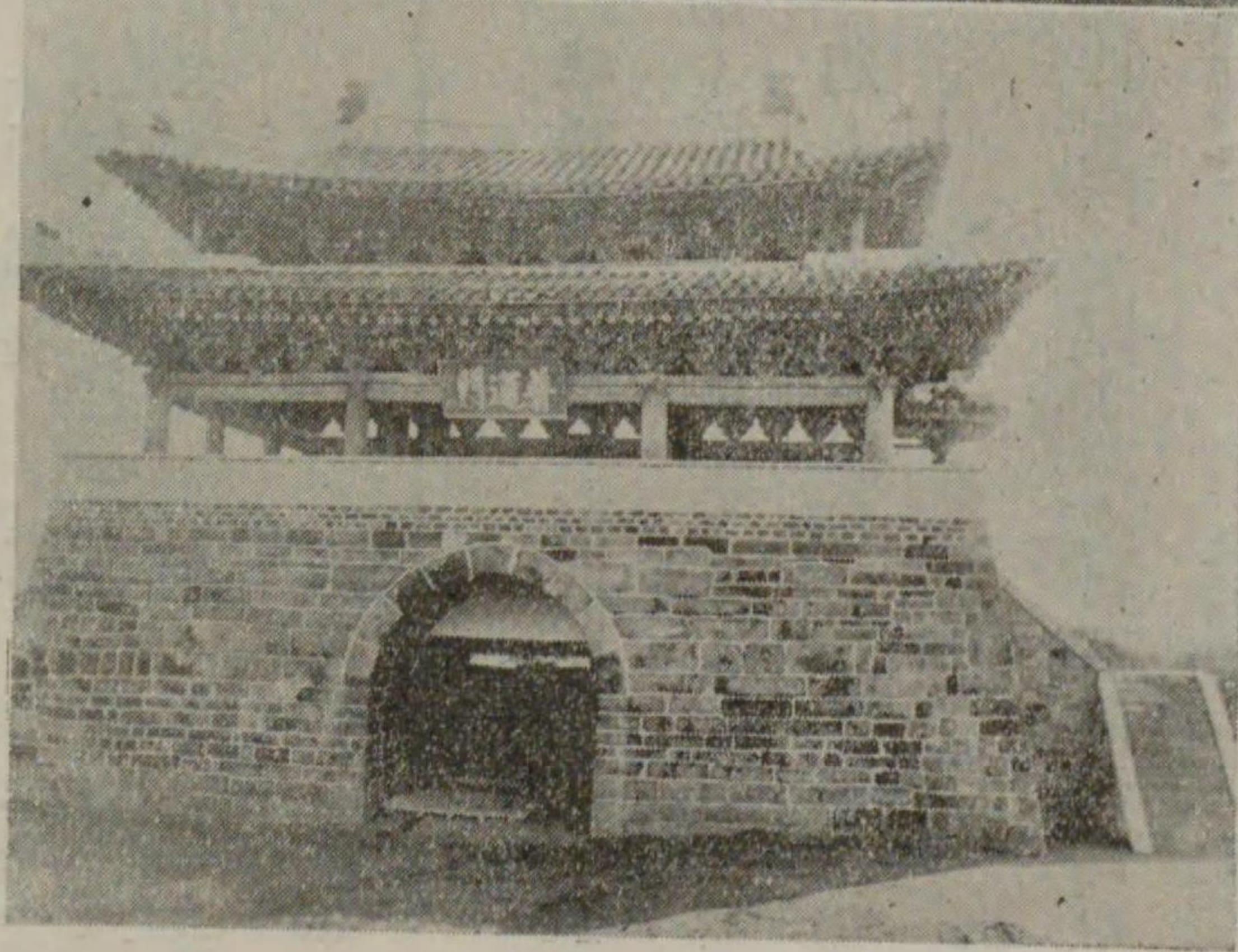
京城南大門

第百七十九圖



京城南大門

第百八十圖



平壤普通門

興仁門

李太王六年大院君攝政の時新たに再興せし者規模の大南大門に似たれども其細部は李朝末

織巧類唐の風を帯びてゐる。而も其前面に半圓狀の甕城即ち樹形を有せるは彼に無き所である。

開城々々郭

開城内城は高麗末恭讓王の時始めて築かれ朝鮮太祖の時に至り完成した。其南大門は太

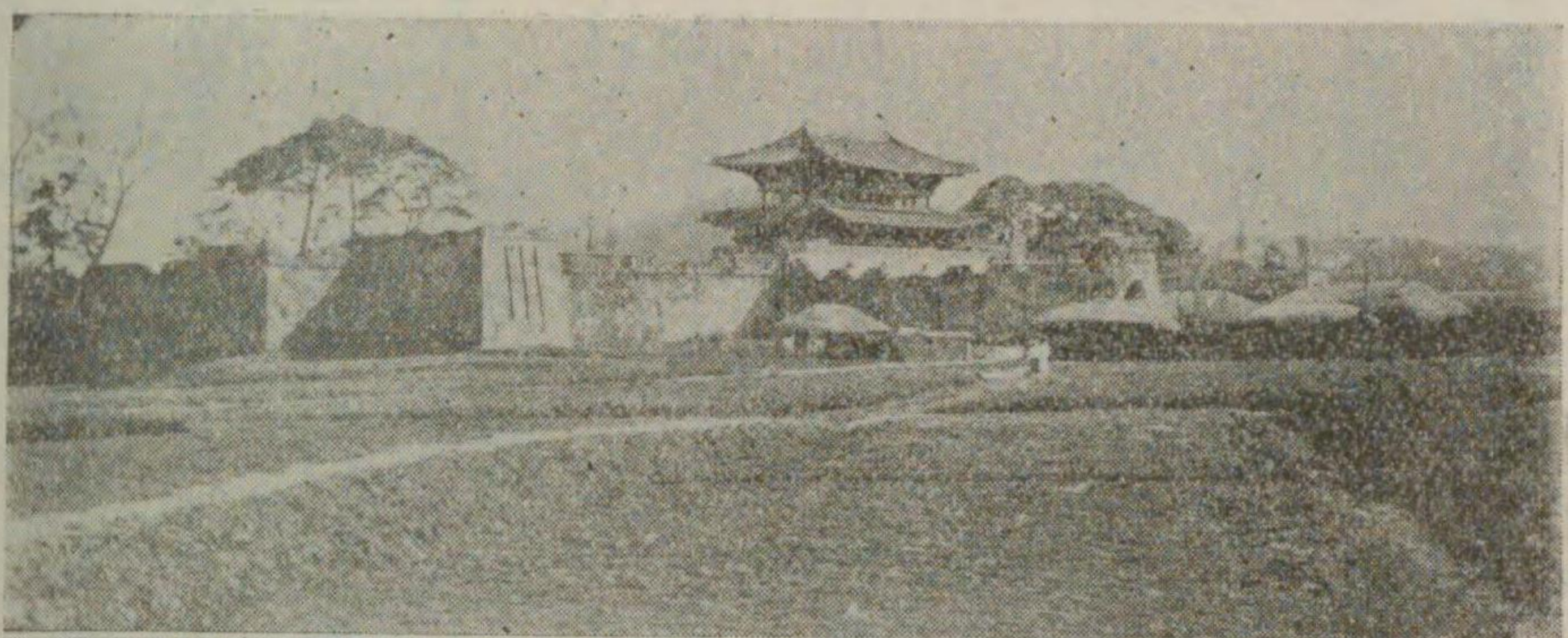
祖二年の築造にして實に李朝初頭の優作である。初層は石築にして虹門を開き上に單層樓を起してゐる。樓は三間二面にして入母屋造の屋蓋を冠してゐる。斗拱は出組にして雄勁なる尾垂木(牛舌)拳鼻を有し内部は二重虹梁を架せる化粧屋根裏をあらはしてゐる。此門規模敢て大ならざれども形態沈重にして手法勁健高麗時代様式の蹤跡をよく示すもので建築史上頗る重要な位置を占むべき者である。

平壤城郭

平壤城は元高句麗の築きし所東南大同江に臨み西北錦繡山蒼光山に據りて蜿蜒たる城壁

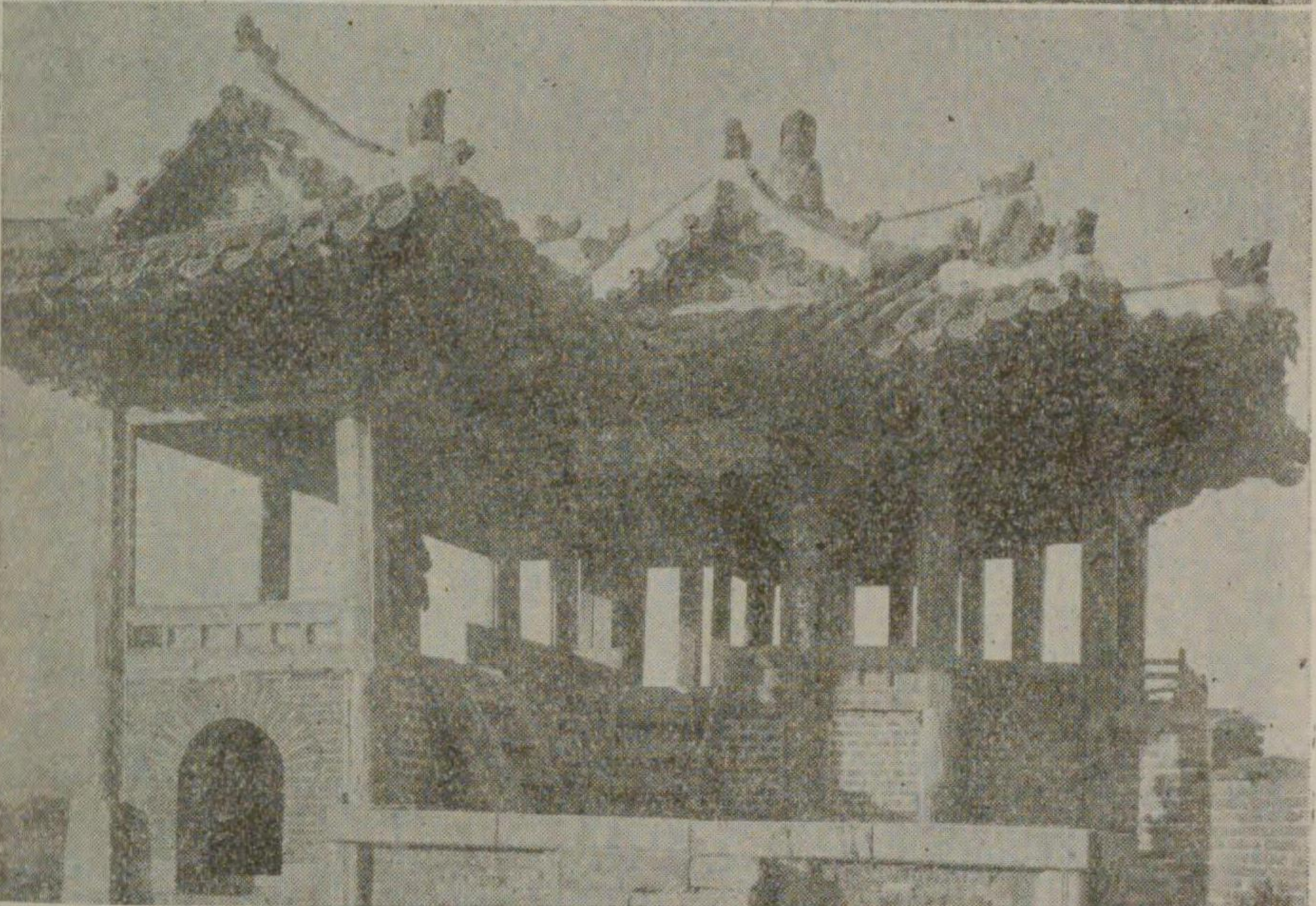
を繞らし周圍に諸城門を設けしものであつたが高麗時代に規模を縮小し更に朝鮮太宗の六年に改築したのが即ち今の内城である。外城は高句麗時代のまゝの土壁で唯形迹を遺せるのみである。内城の周圍に長慶・普通・含毬・七星・大同・正陽等の諸門を開いてゐたが其中最重要な普通・大同の二門である。共に下層石築虹門を穿ち上に重層樓を起してゐる。普通門は成宗四年の再興莊重なる形態雄健なる手法朝鮮城門中の白眉である。大同門は宣祖の十年に成りし者規模前者と伯仲の間にあれども技工の點に於ては彼に一籌を輸してゐる。共に壬辰丙子の亂にも日清役にも災にかゝらなかつたのは僥倖と謂はねばならぬ。牡丹臺の下永明寺の傍に浮碧樓がある。大同江に俯し大平原に臨み展望廣濶戦時

第百八十一圖



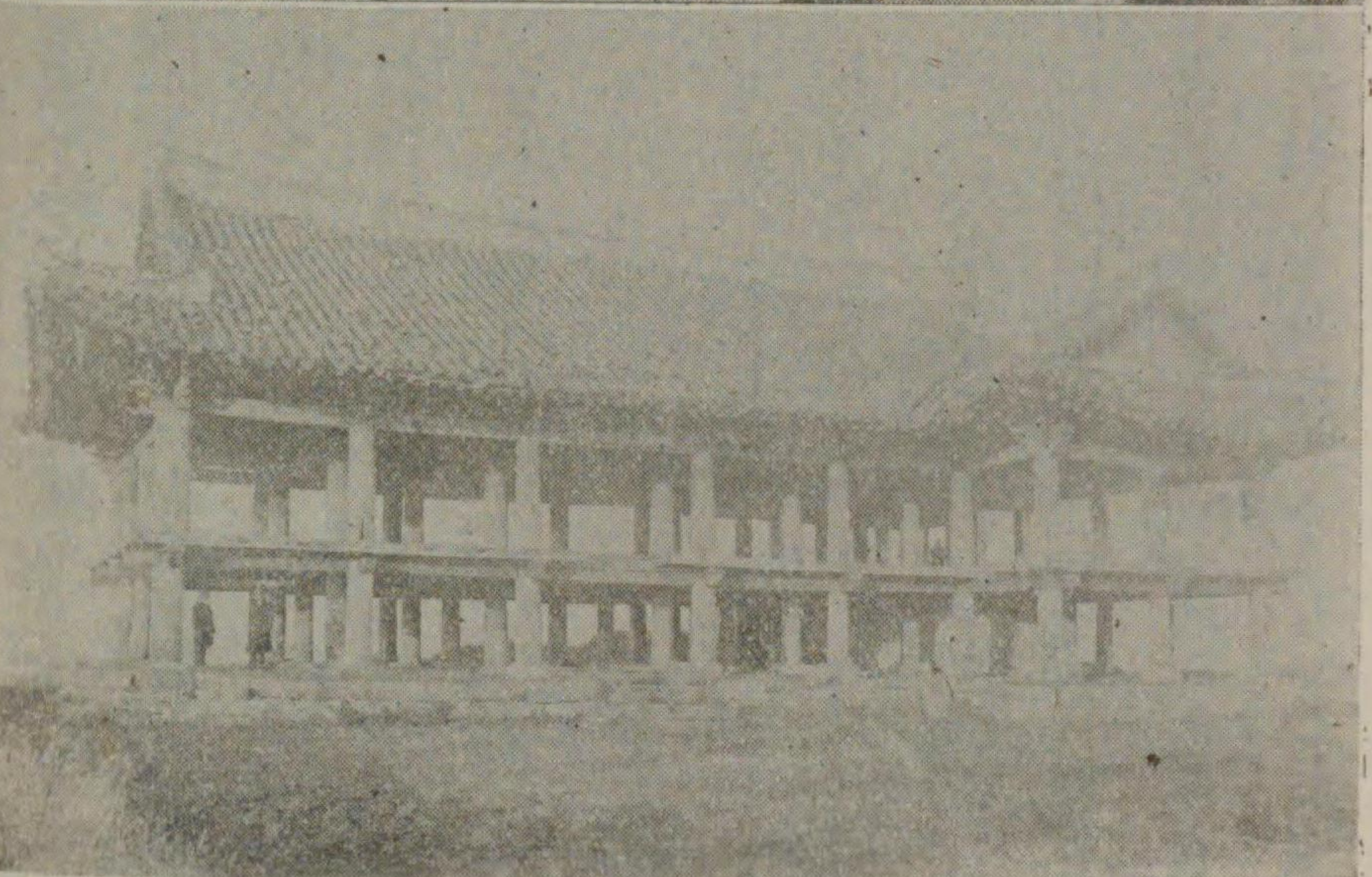
水原長安門

第百八十二圖



水原訪花隨柳亭

第百八十三圖



安州百祥樓

樞要の建物である。光海君五年の再建、温雅の形式を有つてゐる。

水原城郭 水原城は正祖十八年起工二十年落成せし者にして蓋朝鮮に於ける最發達せる形式を有せる城郭である。石築の城壁平地より背面の八達山上を包圍して北に長安門南に八達門を開き東西に蒼龍・華西の二小門を設け更に暗門・水門・敵臺・弩臺・空心墩・烽墩・雉城・砲樓・舖樓・將臺・角樓・舖舍等を隨所に築き城内に行宮・社稷壇・文廟・神祠などを建て、ゝゐる。其制度は從來の者に比すれば別に新機軸を出せしものにして支那の城郭より脱化して其施設更に一頭地を抜けるものである。長安門・八達門共に上に重層樓を起し前に甕城を具へてゐる。又水門上に架せる華虹門及び其傍なる訪花隨柳亭は形態奇巧を極め四圍の勝景と相待ちて最も豊かなる情趣を露はしてゐる。

以上擧ぐる所の外寧邊の南門・安州の清南樓・義州の南門の如き何れも前後期を代表せる優作である。

城郭中展望最も廣敞なる形勝の處には往々樓を築いてゐることは既に前に説いた。此樓は戰時主將の據て以て一軍を指揮せんが爲めに設けられしものにして眺矚尤も佳なるを以て平日は官吏游賞の區となつてゐた。中には構造形式共に觀るに足るべきものがある。晋州の蠹石樓、安州の百祥樓は其最も代表的のものである。

景福宮 景福宮は太祖の三年に創めて營建せしものにして壬辰役の時亂民の放火の爲め烏有に歸し其儘荒廢してゐたのを李太王卽位の始め大院君大英斷を以て舊礎に就き昔時の制度に準ひ輪奐たる大宮闕を再興し爾後三十餘年間の王宮となつてゐたが李太王の慶運宮に移られてより次第に荒壞するに至つた。近年總督府廳舎の其前面に建てらるゝに及び其一部を撤去し又國王王妃常住の殿たりし康寧・交泰二殿及び附屬の殿舎が昌德宮に遷さるゝに及び益々規模の縮小を見た。今遺存せる正殿其他の堂宇は總督府の管掌に歸してゐる。

景福宮は後に峩々たる白岳を負ひ前は廣衢に臨みて光化門を開き門前石彫の獅子兩軀相對立し更に大路の左右に六曹の官舎參差趣きをなし高峰傑門と對照して宏壯森嚴なる宮闕の外觀を飾つてゐた。光化門の左右には石築の高牆東西に走り宮闕の周圍を圍繞して東西面に建春・迎秋の二門北面に神武門を開き隅々に角樓を起してゐた。

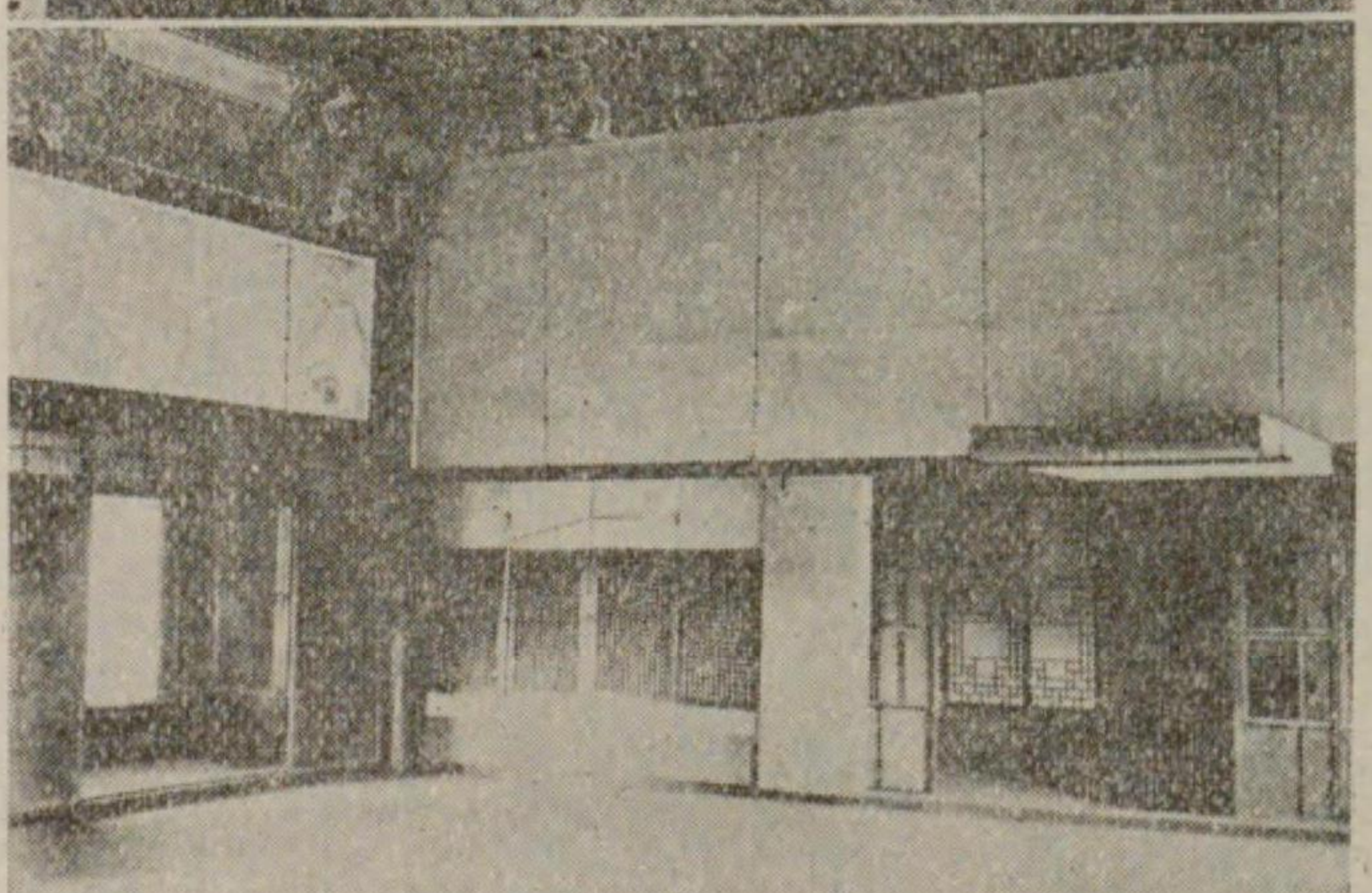
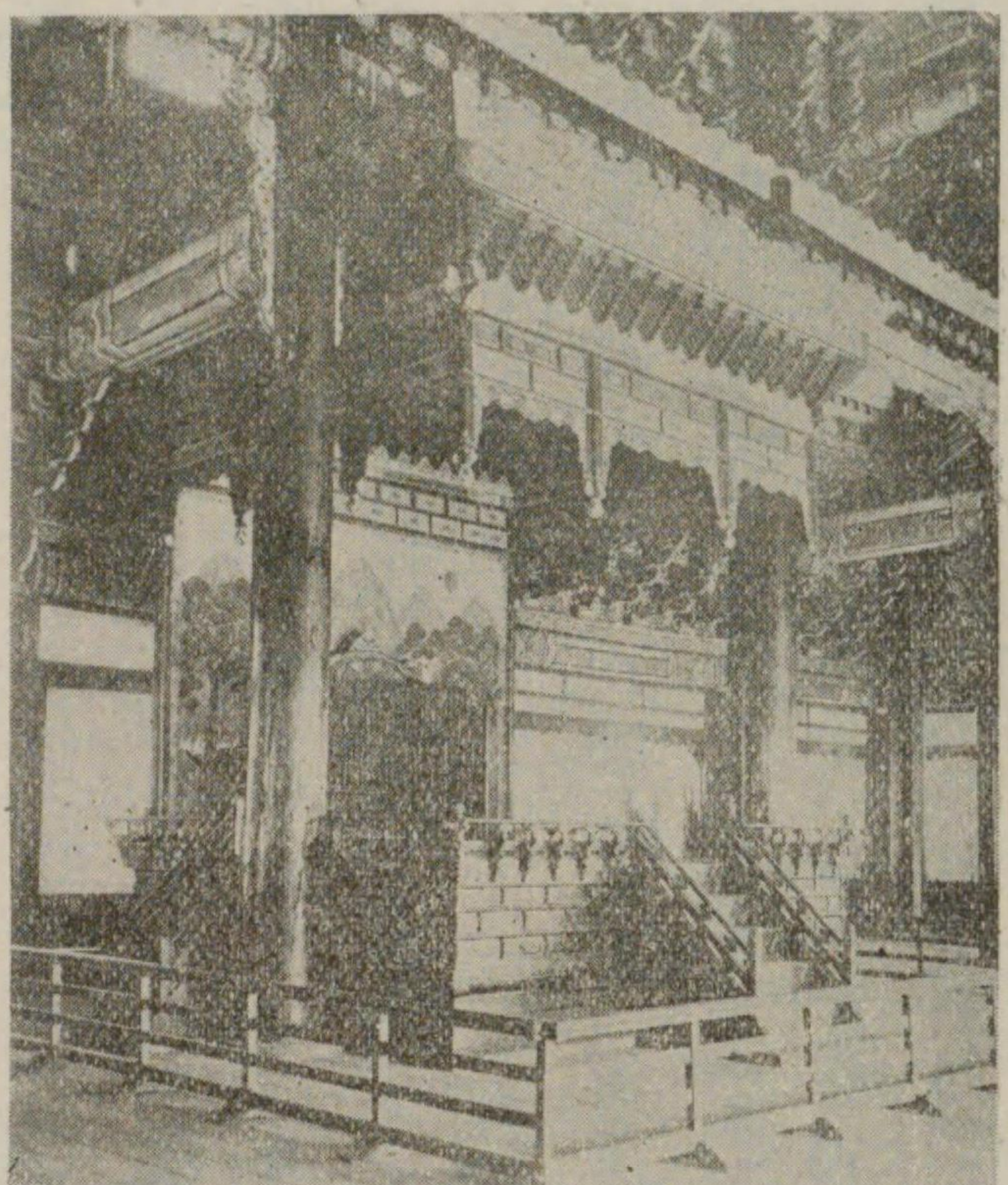
光化門を入れば單層の興禮門が立つてゐた。次に錦川橋と稱する壯麗なる石橋御溝に架し以て重層の勤政門に通じてゐた。勤政門内には宏麗なる勤政殿が二成の壇上に聳えてゐる。其後なる思政門を過ぐれば正面に思政殿、東西に萬春千秋の二殿が南面して立つてゐる。共に單層殿にして思政殿は國王毎朝事を視らるゝ處である。次ぎ響五門の内には康寧殿・交泰殿を中心として多數の堂宇が配置さ

れてゐた。康寧殿は國王常住の殿、交泰殿は王妃常住の殿で他の諸堂宇は之れに附屬してゐたのである。交泰殿の後方は御苑にして老松鬱蒼として泉池・亭榭・別宮隨處に趣を添へてゐた。勤政殿の西方

第百八十七圖

第百八十八圖

第百八十九圖



勤政殿寶室

康寧殿

同内部

に議政府があり康寧殿の西方に慶會樓がある。樓は國王が群臣に宴を賜ふ所である。

光化門 三闕重層の堂々たる大建築、流石は王宮の正門たるに相當し權衡莊重にして雄大なる構築
 繊細なる手法上下相映發して快き對照を示してゐる。

勤政殿 二成石築の基壇の上に立てる重層の大建築にして基壇の四面には奇巧なる石勾欄を繞らし
 双鳳・雲文を陽刻せる石陛を正面に設け更に其前庭には左右に白大理石の位標を立てて以て文武兩班の
 位次を定めてゐる。

勤政殿は五間五面重層入母屋造の大建築にして王宮の正殿である。奇巧を弄せる三手先の斗拱を以
 て軒を承け屋蓋には鸞頭雜像等を上げて一段の風趣を増さしめ内部は兩層を通じて格天井を高く架し
 繊麗なる組物を以て之を承け中央に一段高く寶座を構え上に繊細なる手法より成れる天蓋を懸吊し内
 外共に彩色を以て草花の文様を畫き絢爛富麗の氣象をあらはしてゐる。

要するに此殿は重層の基壇上に立ちて形態森嚴規模宏壯加ふるに内外裝飾の華麗を以てし以て李朝
 末期の様式を遺憾なく發揮してゐる。特に吾人の最も歎賞に堪へざるは主として其大體の恰好と裝飾
 の調子のよく整ふたる點である。而も其細部を諦視すれば技工粗漫にして手法纖弱近世建築の通弊を
 暴露してゐる。

勤政殿は國家の正朝にして其制度は支那の宮闕に準據したものであるが**康寧殿**・**交泰殿**の一郭は國

王王妃常住の殿舎にして特に朝鮮固有の特質を具へてゐる。兩殿共に中央に廣間を置き左右に多くの
 溫突室を區劃せるは全く支那に見ざる所にして朝鮮に於て特に發達完成された宮殿建築の特色であ
 る。此兩殿先年昌德宮内に遷されて最も代表的なる朝鮮式宮殿をこゝに失つたのは惜むべきである。

右の外景福宮内に多くの門廡殿堂があるが煩はしければすべて之を略し唯一つ慶會樓につきて述ぶ
 ることとする。

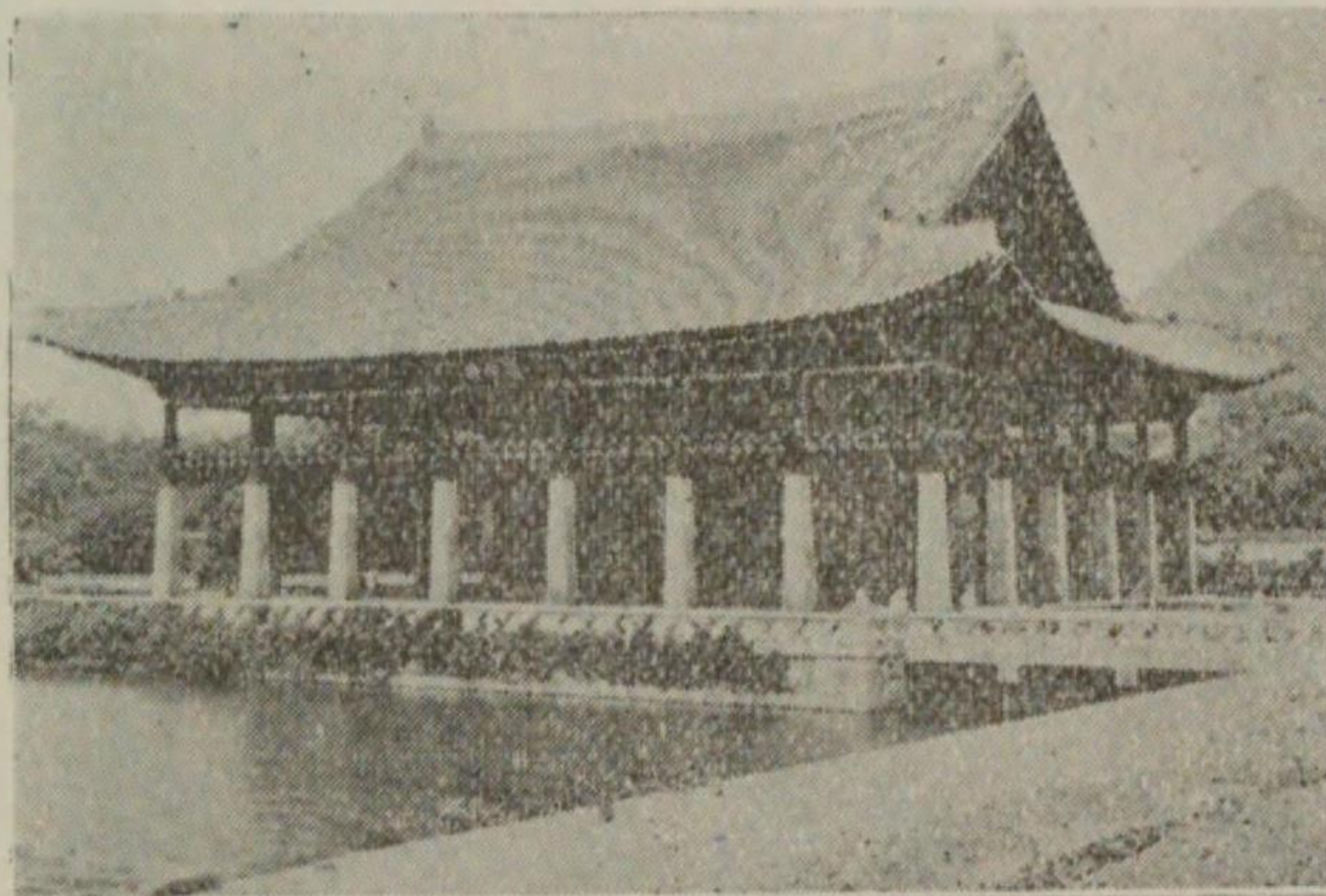
慶會樓は太宗の時創築せしを大院君の再興せし者四面繞らすに蓮池を以てし石橋三を東方に架して
 ゐる。樓は規模の壯大勤政殿に亞ぎ下層は悉く開放し方三尺大の石柱四十八本を立て、上層を支へ上
 層内は廣潤にして百官讌集の處となし大なる入母屋造の屋蓋を冠してゐる。上層低きに失し形態美を
 以て目すべからざれども大石柱を列植せる堂々たる手法は驚嘆に値するものがある。

昌德宮 太祖朝創建せられし別宮にして規模の大景福宮に亞いでゐる。壬辰の役罹災後光海君の元
 年に重建し其後の王宮として用ひられたが純祖の三年其正殿たる仁政殿が焼けて翌年再興された。即
 ち今の建物である。其他の殿宇或は再建され或は新たに經營されて宮城内に多くの建物を保存してゐ
 るが其中最も重要なものは仁政殿の一郭である。昌德宮は李太王の初年景福宮に遷られてより其儘次第
 に荒廢したが李王即位の後再王宮として用ひられ内外の施設大に變更を見た。余は此には主として其

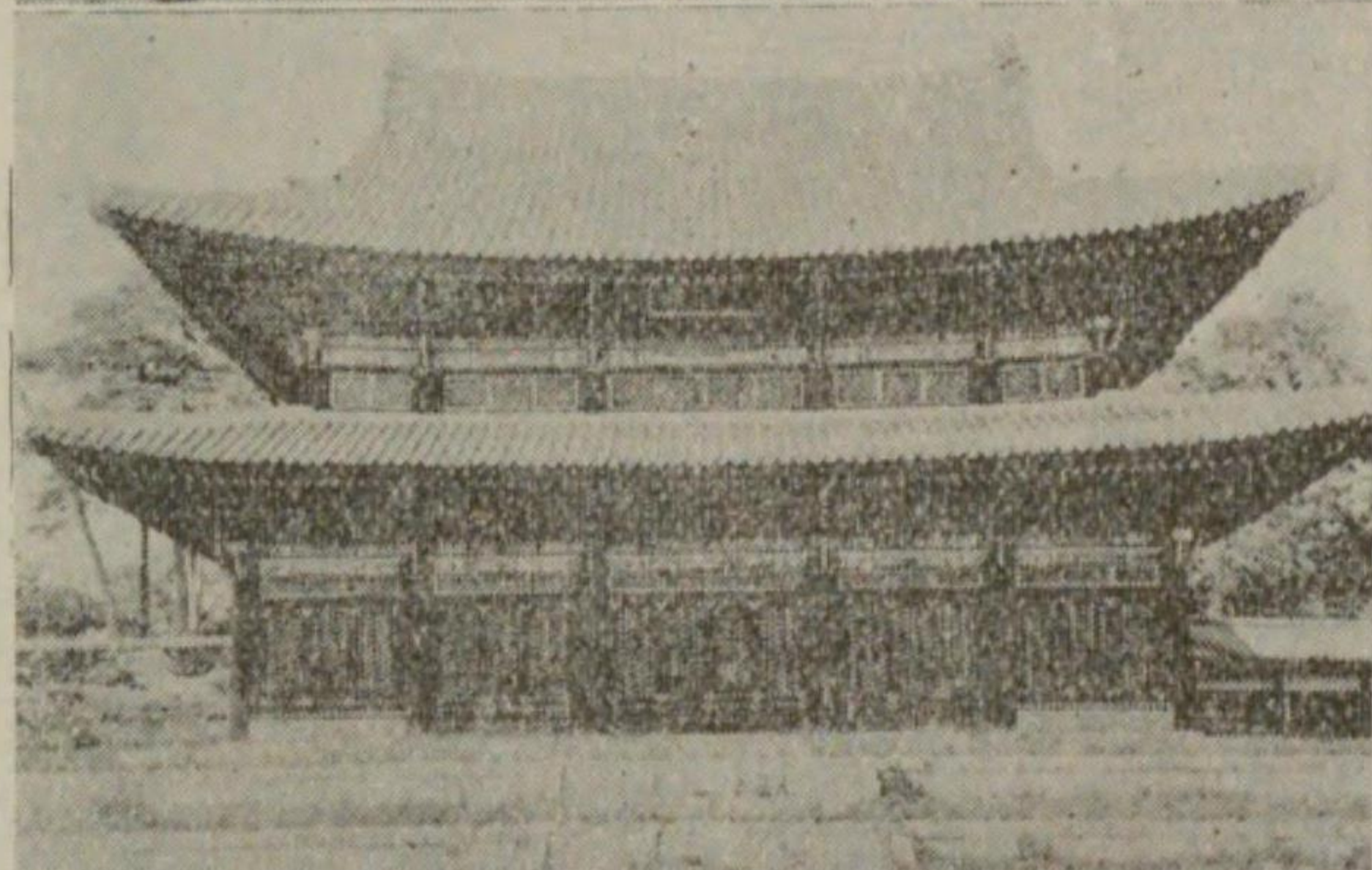
以前に於ける宮闕の状態を説かんと欲するのである。

敦化門 王宮の南正門にして規模壯大なる五間の樓門である。權衡莊重にして手法亦雄健、建立の

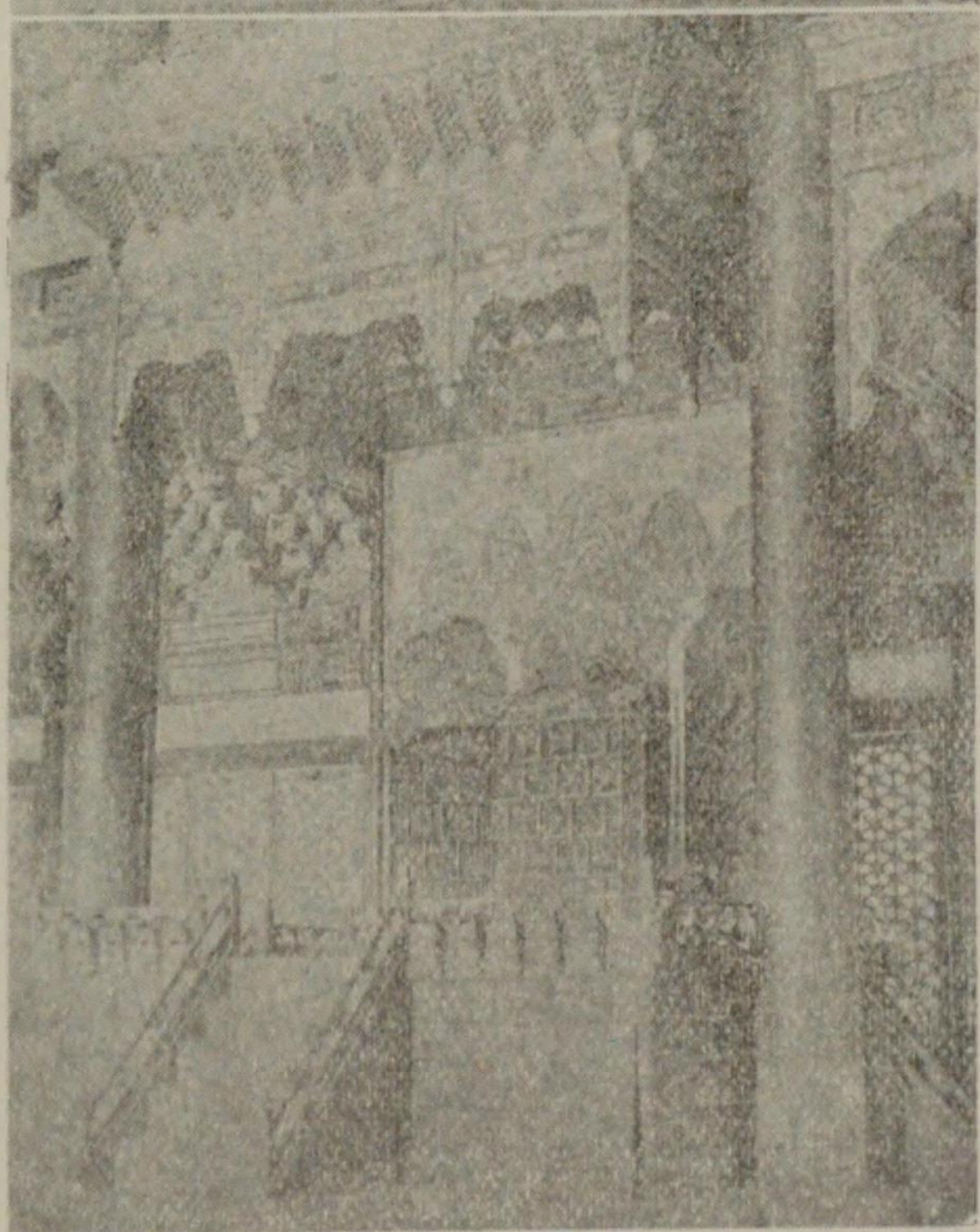
第百九十圖



第百九十一圖



第百九十二圖



慶福宮慶會樓

昌德宮仁政殿

同 内部

年代明かならざれども約四百餘年前の者であらう。即ち壬辰役及び其後の災禍を免かれたのである。敦化門を入りて右折すれば御溝がある。其上に架せる石橋を渡りて進めば進善門と稱する單層門が

ある。其内は仁政殿前の外庭で其北に仁政門が立つてゐる。仁政門を過ぐれば廡廊を以て繞らされたる廣き内庭の正面に重層の仁政殿が二成の壇上に聳えてゐる。壇には雲鳳を浮彫にせる石階二處が設けられ其左右に文武兩班の位標が立つてゐる。

仁政殿 五間四面重層にして入母屋造の屋蓋を有し其斗拱は巧麗なる三手先詰組より成り以て二重垂木の軒を支へてゐる。内部は高く格天井を架し中央に寶座を構え纖美なる寶蓋を懸け華麗なる彩繪彫飾を内外に施してゐる。其構造様式裝飾共に李期後期を代表して後の勤政殿の模範となつたのである。

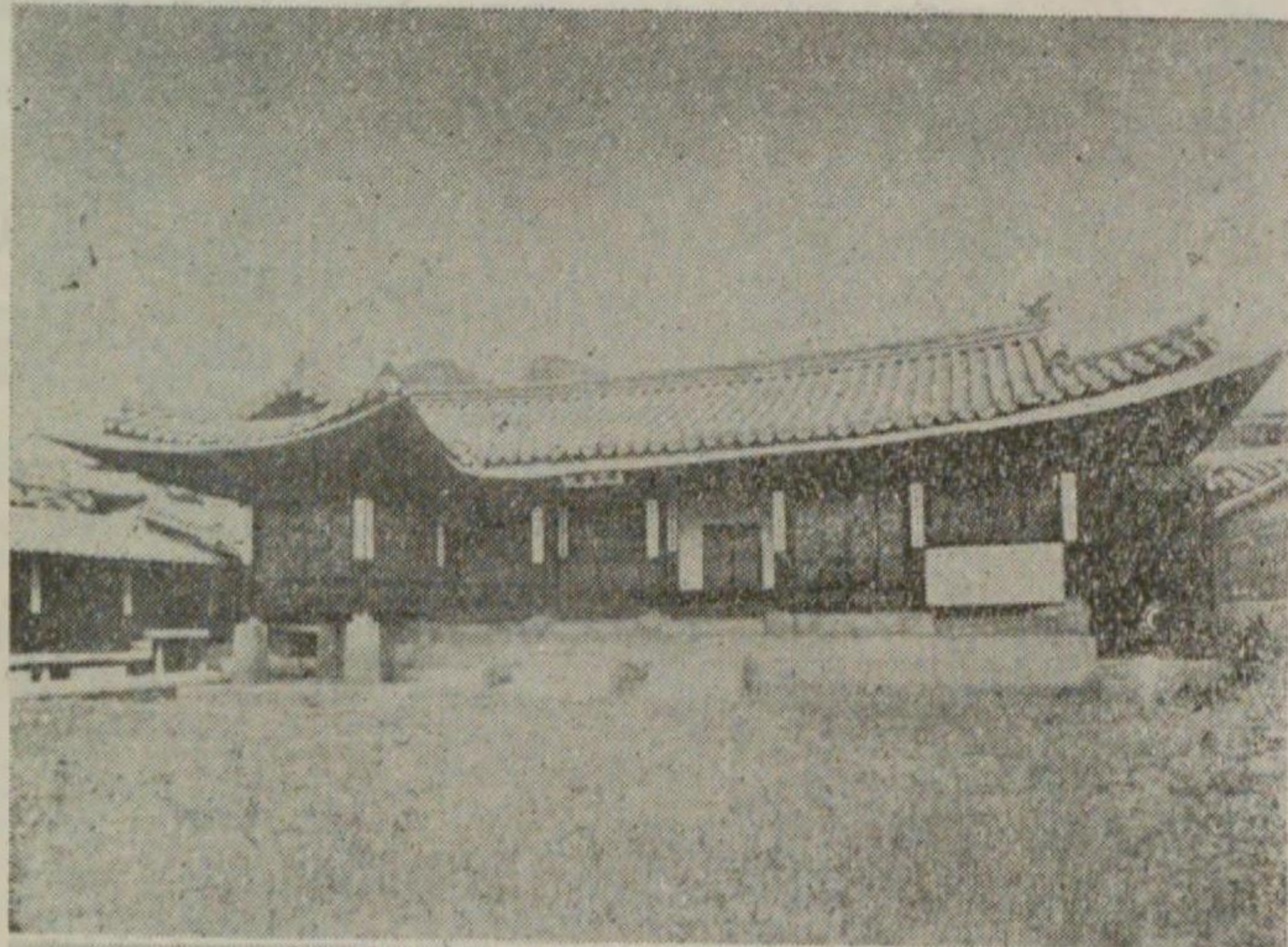
仁政殿の東北宣政門内に宣政殿がある。古の便殿にして昔くに碧料瓦を以てしてゐる。其東方に熙政殿大造殿の一廊があつた。即ち國王王妃の常住殿であつたのであるが近年災に罹り其跡に景福宮の康寧殿・交泰殿の建物を移し建てた。其北方は秘苑にして苑内廣濶、丘陵起伏、池沼隨處に開け、老樹蔭森、大小の樓閣亭榭往々散點、塵外の仙境を開いてゐる。

仁政殿の一廊の東方に稍離れて樂善齋の一廊がある。憲宗十三年の建築にして李朝末期に於ける朝鮮式宮殿の好典型である。

昌慶宮 昌慶宮は成宗の十四年建つる所、昌德宮の東方にありて東面してゐる。其正門弘化門正殿

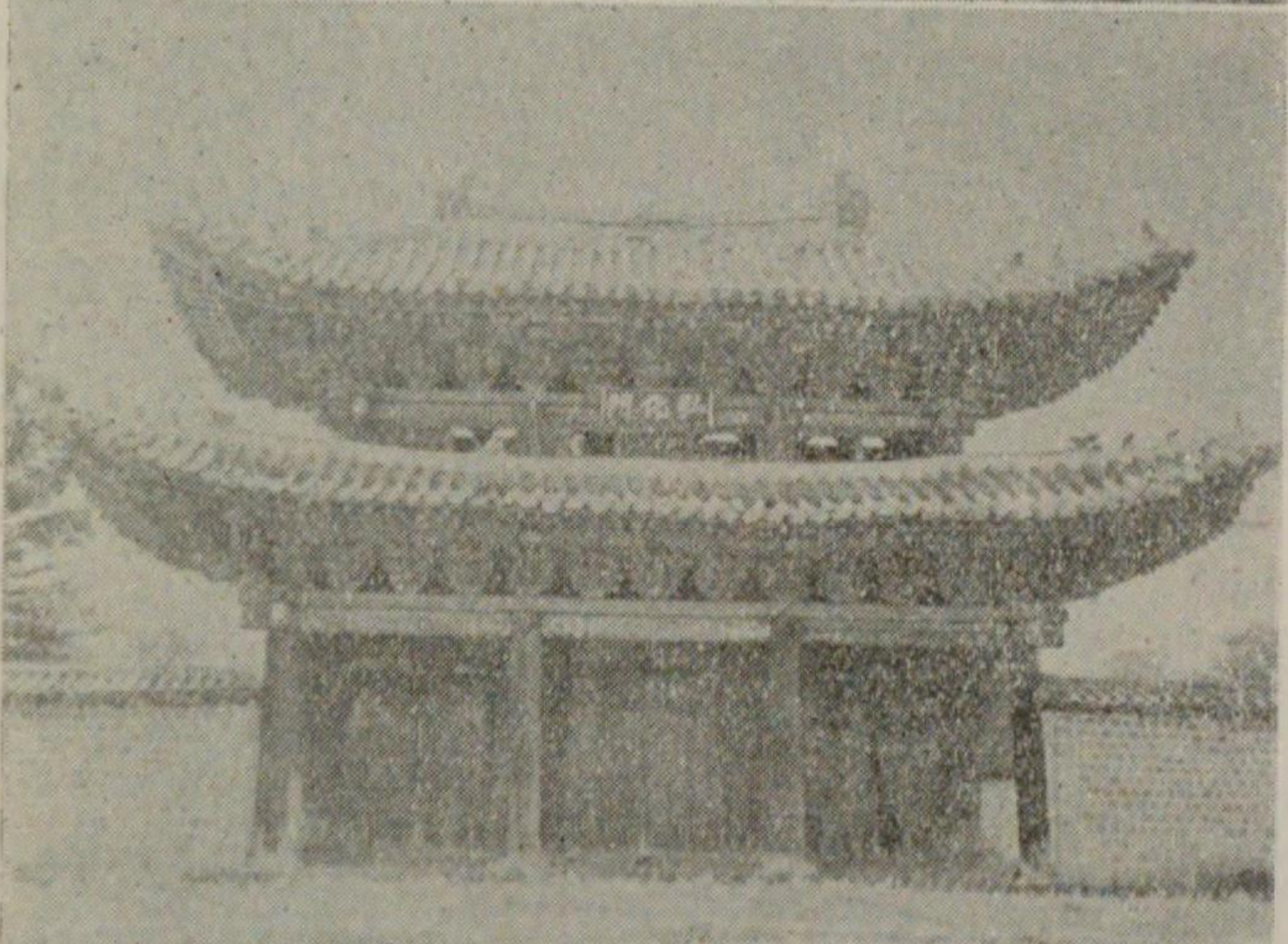
明政殿及び明政門並びに廡廊は千辰役の災にかゝらる當初のまゝ遺つてゐる。其後方にある文政殿・歡慶殿・景春殿・通明殿等の堂宇は何れも純祖朝の再建である。此昌慶宮の一廓は今李王家博物館に應

第百九十三圖



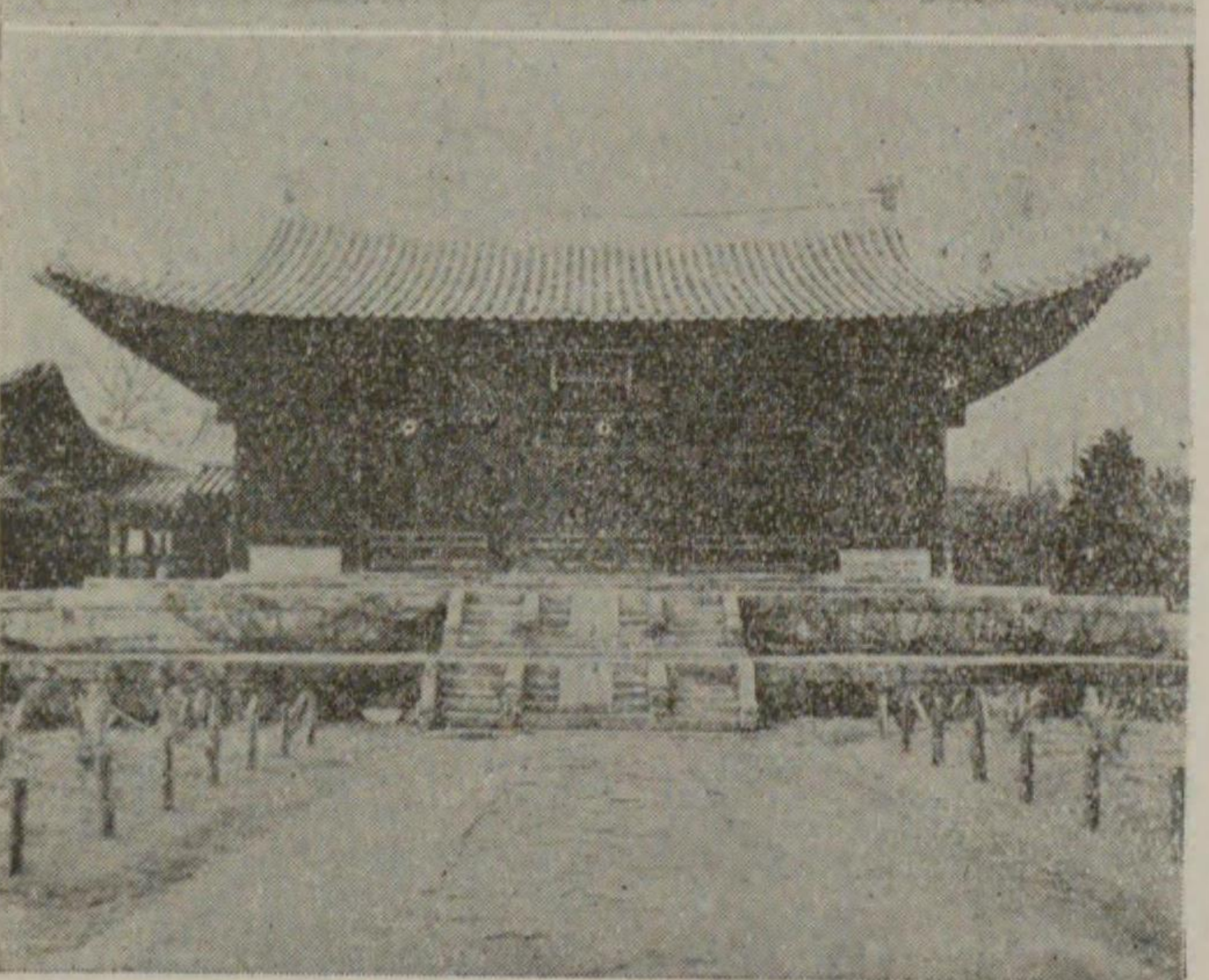
昌德宮樂善齋

第百九十四圖



昌慶宮弘化門

第百九十五圖



同明政殿

用されてゐる。

弘化門は三間三戸の樓門明政門は三間三戸の單層門にして共に李朝初期の様式を示してゐる。特に明政殿は五間三面單層屋根入母屋造の建物にして規模大ならざれども形態よく整ひ其斗拱は三手先にして手法雄勁に内部は格天井を作り寶座寶蓋を設け内外共に彩繪を施してゐる。實に李朝初期の代表的宮殿建築にして仁政殿・勤政殿の先驅をなせし者、貴重の遺構といはねばならぬ。

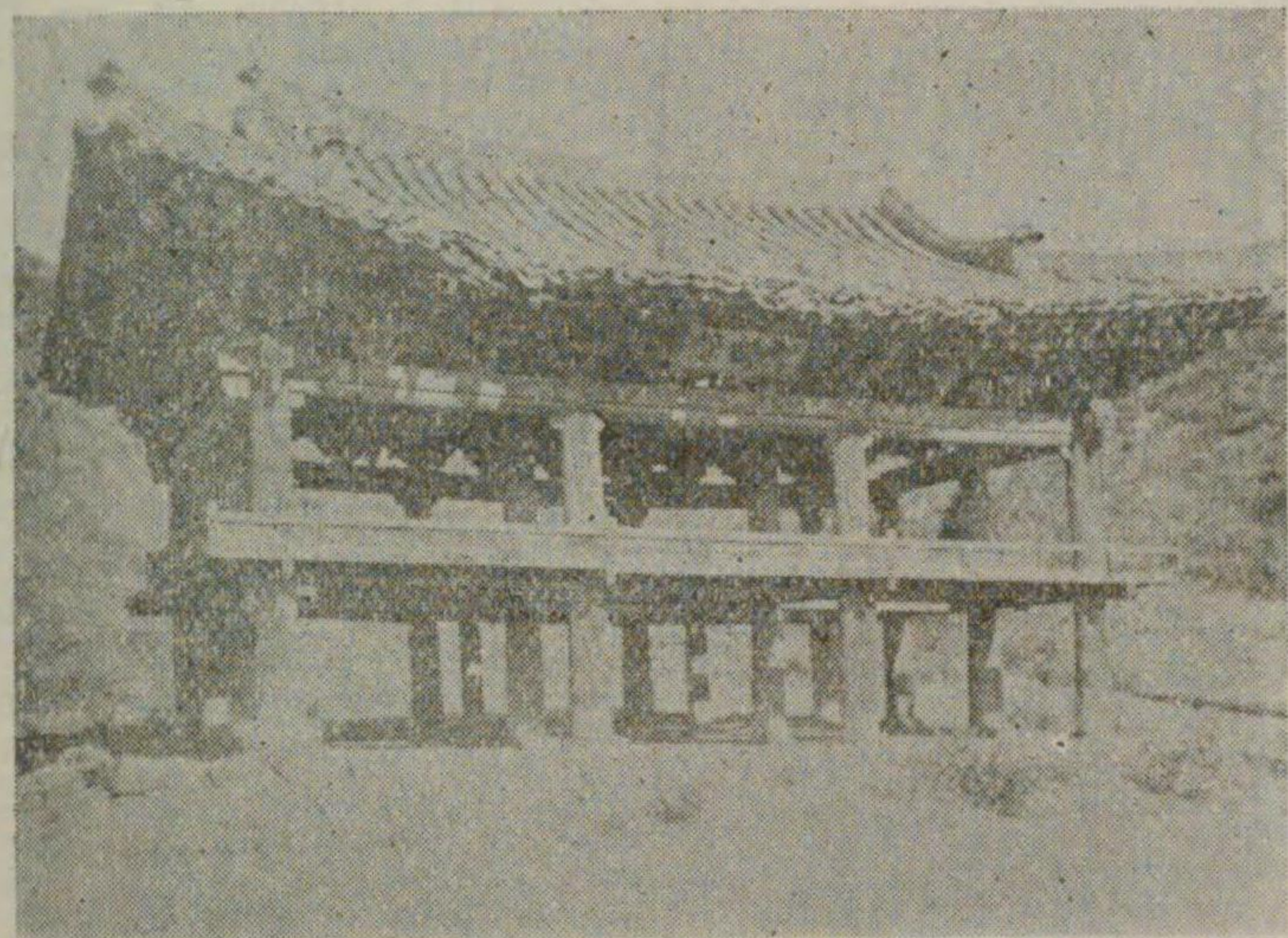
他の宮殿は年代も新しく手法も纖弱となり復観るべきものなき故茲には略すこととする。慶熙宮・慶運宮の現存の建造物は何れも李朝後期に屬し其規模構造遠く前記三宮闕に及ばないから記述の煩を避くることとする。

客 舍

各道の州郡には必ず客舎の設けがある。國王の殿牌を正堂に安置し朔望には大小の官吏此處に集りて闕に向ひて稽首し以て式を擧ぐるの處である。又朝廷より派遣せられたる使臣の宿泊所にも供せられた。隨て其規模制度一般に宏壯往々前期に屬する建物を保存してゐる。客舎の最も普通なるは全敷地の中心に正堂ありて左右に長き翼室を設け前面に中門・外門を立て廡廊其他の建物之に附屬してゐる。正堂及び左右翼の屋根は何れも切妻造にして正堂の棟は特に一段高くして以て威容を示してゐる。

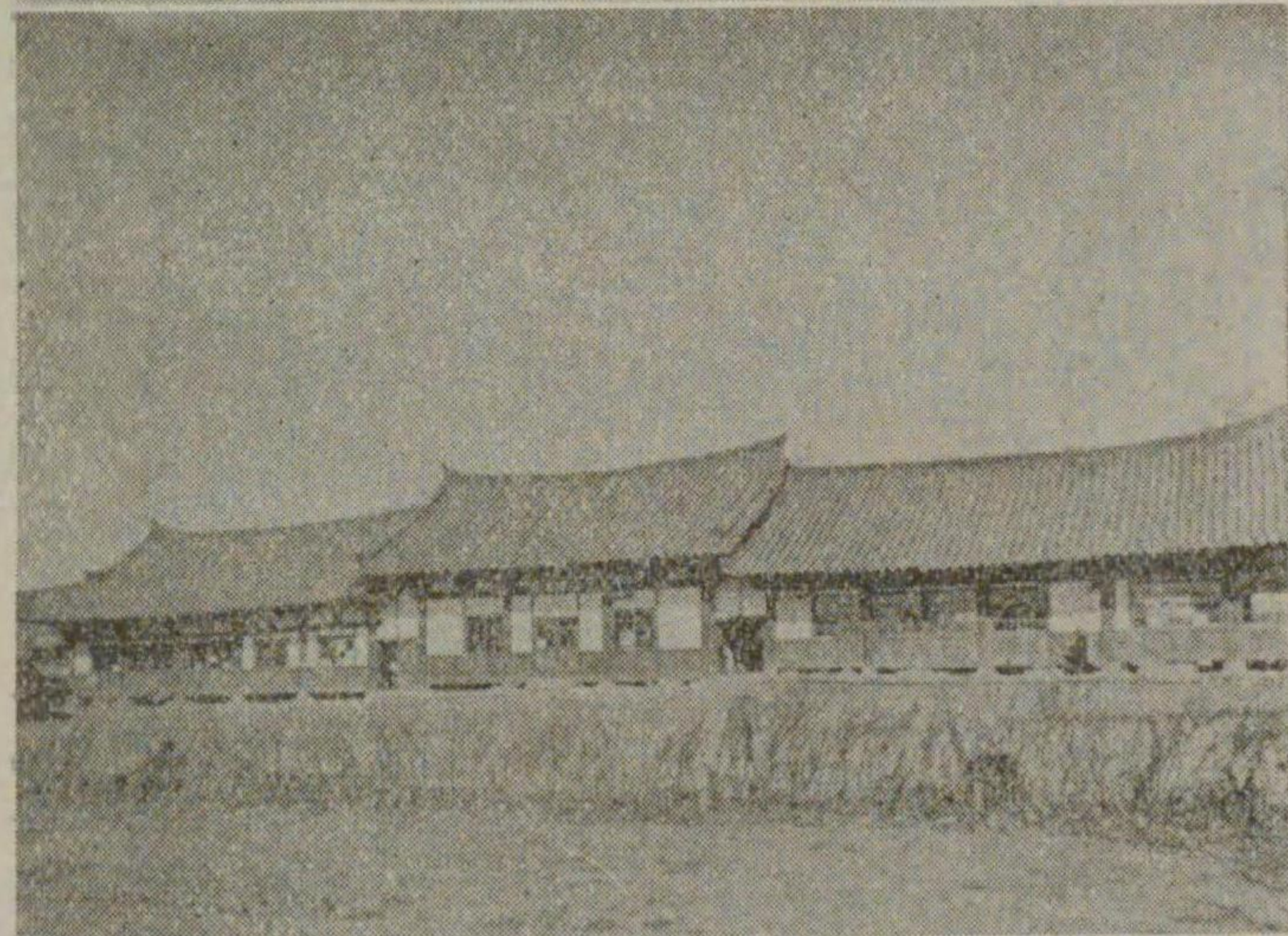
正堂の内部の床は瓦又は石を敷いてゐるが左右翼は内に温突室を設け以て使臣の宿泊に便してゐる。今遺存せる客舎の建物中重要な者を挙げれば左の如くである。

第百九十六圖



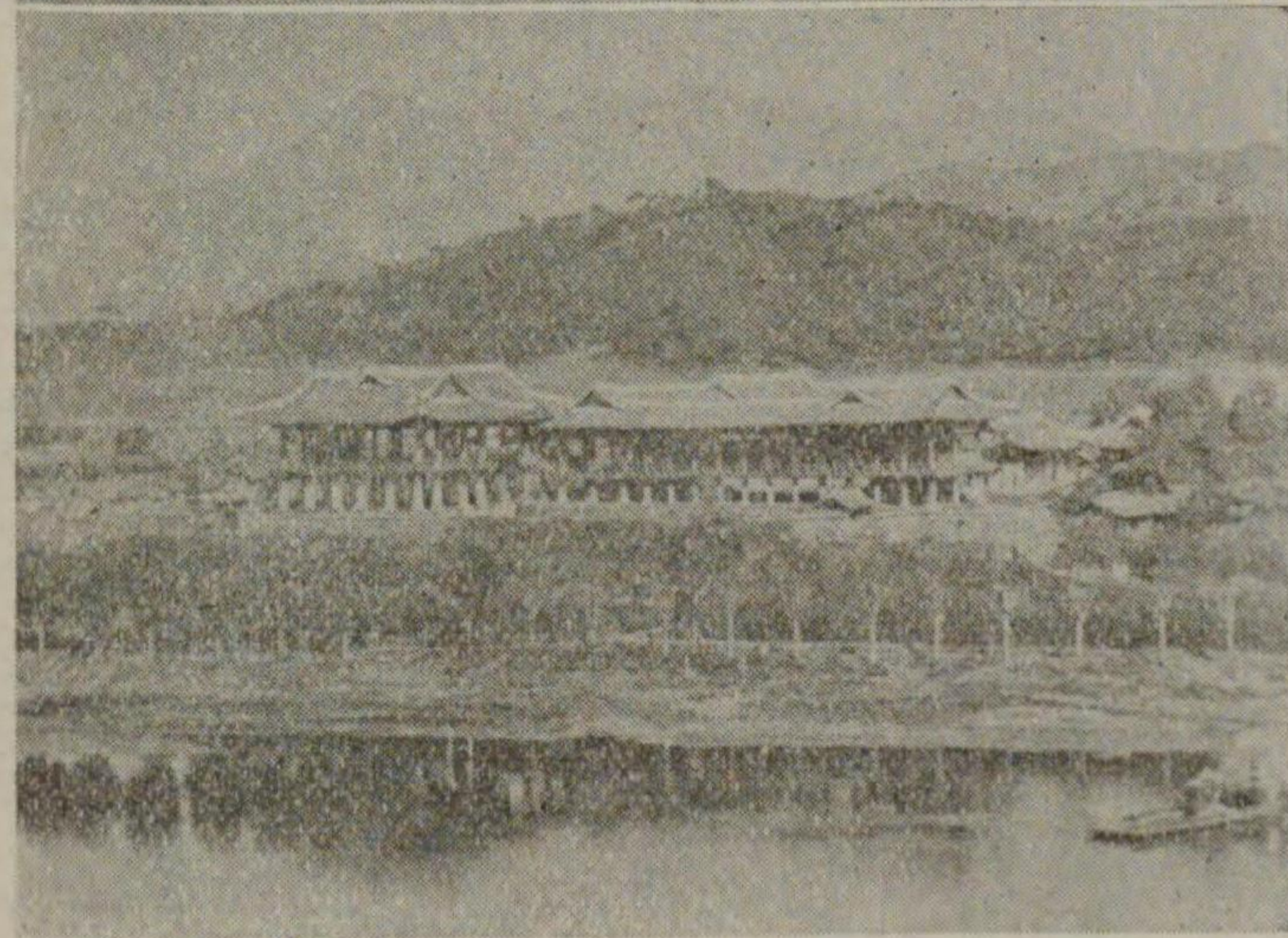
安送駕亂樓

第百九十七圖



慶州東京館

第百九十八圖



成川東明館

安邊	高靈	江陵	慶州	同川	成川
客舎駕鶴樓	伽倻館	客舎大門及中門	東京館中堂	東京館左右翼	東明館
成宗	成宗	初期	正祖	宣祖	後期
一七	二四	一四	一四	一四	一四
明成化	明弘治	清乾隆	清乾隆	清乾隆	清乾隆
二二	六	五五	五五	五五	五五
文應	明應	寬政	寬政	寬政	寬政
一八	二	二	二	二	二
一四八六	一四九三	一七九〇	一七九〇	一七九〇	一七九〇

高靈の伽倻館は初期を代表し慶州の東京館の中堂左右翼及び成川の東明館は何れも後期を代表せる好例にして安邊客舎の駕鶴樓は初期の佳作、成川東明館の降仙樓は後期に於ける尤も顯著なる標本である。又江陵客舎の大門及び中門は共に初期に屬し尤も雄健なる繪様線形を有してゐる。

史庫

歴代の王室及び朝廷の實録を安全に保存せんが爲め李朝に於ては所謂史庫を諸道の深山中に配置し衛兵を置きて之が守護に當らしめた。其用意到れり盡せりである。不幸にして其一二が焼夷せらるゝことがあるも他の史庫にある同一の記録は無事に保存せられるわけである。史庫の位置は時々變更ありしも近年までは宮内府の外左の個處に置かれてあつた。

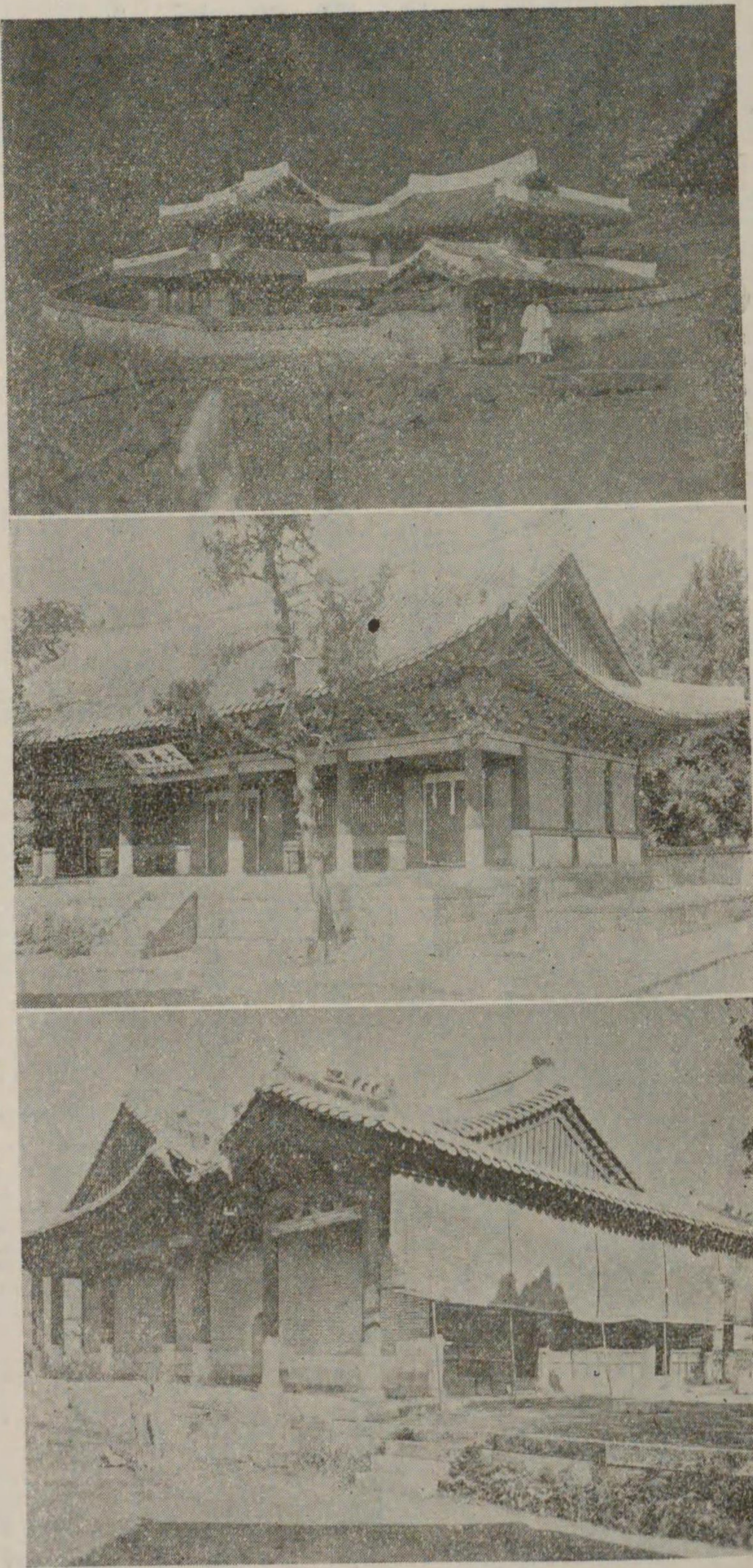
江華島史庫
 春陽太白山史庫
 江陵五臺山史庫
 茂朱赤裳山史庫

右の中最も見るべきは太白山と五臺山の史庫で共に宣祖三十九年（明萬曆三四・慶長一一、西紀一六〇六）の經營に成つた者である。其王室の實録を藏するを璿源閣と稱し朝廷の實録を藏するを史閣と稱し棟を異にして前後に立てゝある。共に方三間重層の建築にして中に實録を函に藏め更に之を櫃に容れて保存してゐる。構造簡樸にして建築的には格別の價値なきも實録閣の標本として興感を惹くものがある。

廟 祀

廟祀の最も重要なものは文廟にして此他箕子・東明王・金首露王・溫祚王・赫居世王等各朝の始祖を祀れる者、並びに國家の爲めに匪躬の節を盡せし忠臣義士等を祀れる者もある。又特に關羽を祀れる所謂關王廟なるものもある。

文廟 儒教の興隆に伴ひ京城を始めとして各道の州郡には必ず學校を設け此に孔子を祀る所の廟を
 第九十九圖 第二一〇圖 第二一一圖



太白山史庫

京城文廟大成殿

京城東廟

立てゝゐる。即ち所謂文廟である。此文廟は京城に在る者最も壯大にして他の州郡にある者はそれぐ

規模大小を異にしてゐる。而も一般に曰へば先づ前面なる外門及び中門を入れれば左右に東廡西廡對立し内に七十二子又は其地方の鴻儒即ち所謂郷賢の木位を安置してゐる。大成殿は一段高く正面に立ち内に孔子並びに四配の木位を安置してゐる別に孔子の父を祀る啓聖祠・尊經閣の附屬してゐることもある。大成殿は正面三間乃至五間、側面二間乃至四間を普通とし單層にして前面一間通りを開放して拜所とせるもある。屋根は切妻造又は入母屋造で斗栱は極めて簡單なる者より二手先に至り内部床を板張りとなし天井を化粧屋根裏としてゐる。裝飾は甚だ簡素にして内外彩色を施せるもあれども一般に唯木材を赤く塗れるのみである。學校は廟の前面に別に一廊をなせるもの最も多く稀に廟側廟後に設けられしものもある。今遺存せる中最も重要なものを擧ぐれば

京城	大邱	慶州	開城	慶州	安東
文廟大成殿	文廟大成殿	文廟大成殿	文廟大成殿	文廟大成殿	文廟大成殿
宣祖	宣祖	宣祖	宣祖	宣祖	宣祖
三四	三九	三四	三五	三七	初
明萬曆	明萬曆	明萬曆	明萬曆	明萬曆	明萬曆
二八	三三	二八	二九	四二	慶
慶	慶	慶	慶	慶	慶
長	長	長	長	長	長
一五	一〇	一五	一六	一九	一九
一六〇〇	一六〇五	一六〇〇	一六〇一	一六一四	一六一四

右の中安東の大成殿が初期に屬する外何れも壬辰災後の再建に成りし者にして京城の文廟最も宏麗

である。大成殿を始めとして東西廡・南門すべて萬曆二十八年の再建に屬し特に大成殿は五間四面單層入母屋造の建物にして前面一間を開放し高き石壇上に立ち様式簡樸なれども結構壯大實に朝鮮諸廟殿中の雄である。

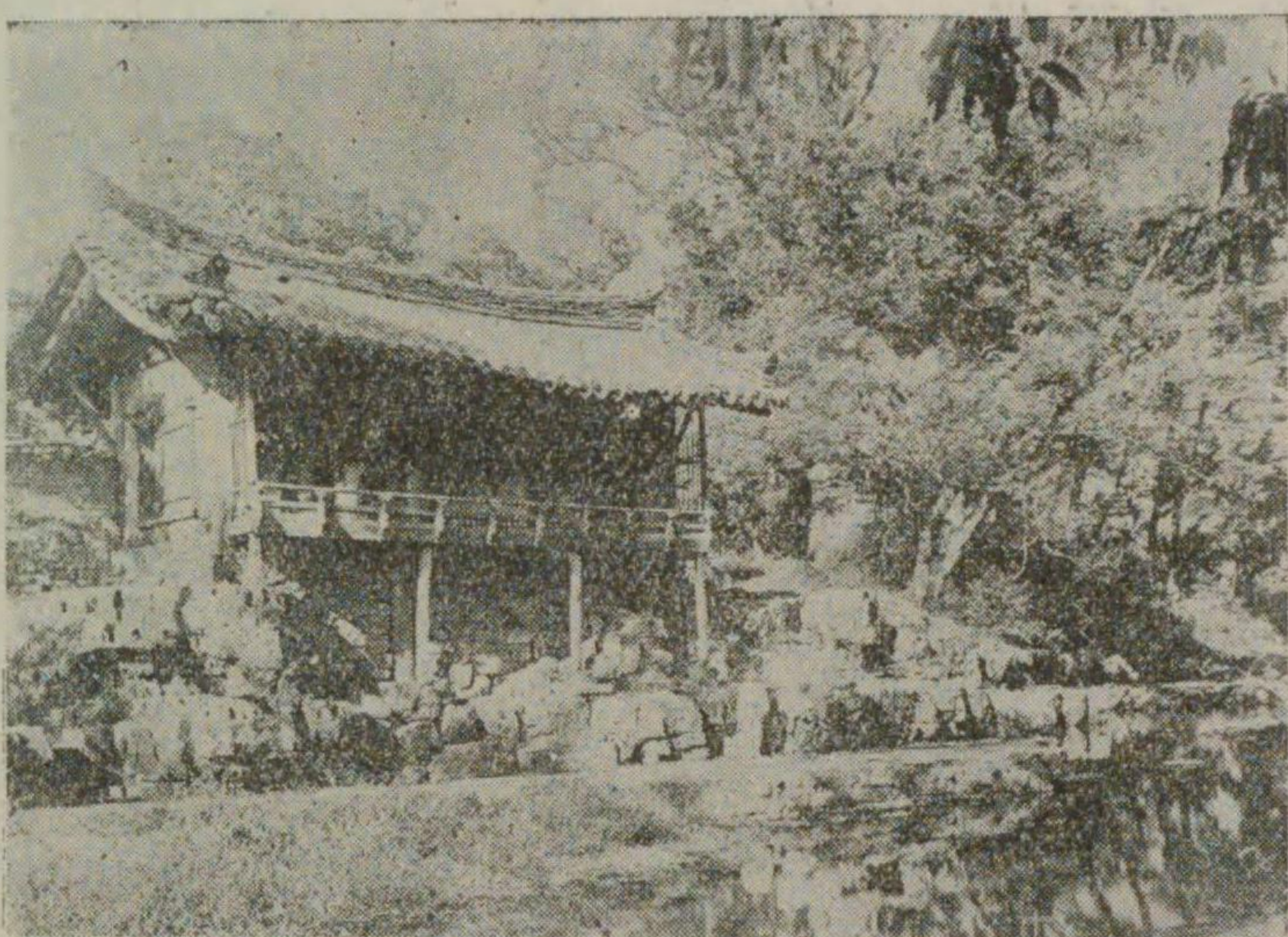
其他の諸廟を概説すれば平壤の崇仁殿は世宗十年（明宣德三、正長元、西紀一四二八）の經營にして箕子を祀り李朝初期の様式を示してゐる。慶州の崇德殿は宣祖朝の再建にして赫居世王及敬順王を祀つてゐる。安東の大師廟の正殿は光海君五年（明萬曆四一、慶長一八、西紀一六一三）の建立である。其構造様式は共に李朝後期を代表してゐる。

關王廟 壬辰の役明の將士は關羽を崇信し其威靈に頼りて日本軍を撃退せんとして處々に其廟を建てた。これが關王廟の始めである。又近年創立されたものもある。今此等を列擧すれば

南原	星州	安東	京城	同	同	開城
關王廟(明都督劉綎創建)	關王廟(明將茅國器創建)	關王廟(明眞定營都司薛承臣創建)	東廟(奉勅明萬世德創建)	南廟(明都督陳璘創建)	北廟(李太王創建)	關王廟(清商等創建)
肅宗	宣祖	後期	光武	李太王	同	同
四二	三一	五	二〇	三一	清光緒	清光緒
五五	二六	二七	九	二〇	明治	明治
元	三	三四	一六	二七	一八八三	一八九四
一七一六	一五九八	同	同	同	同	同

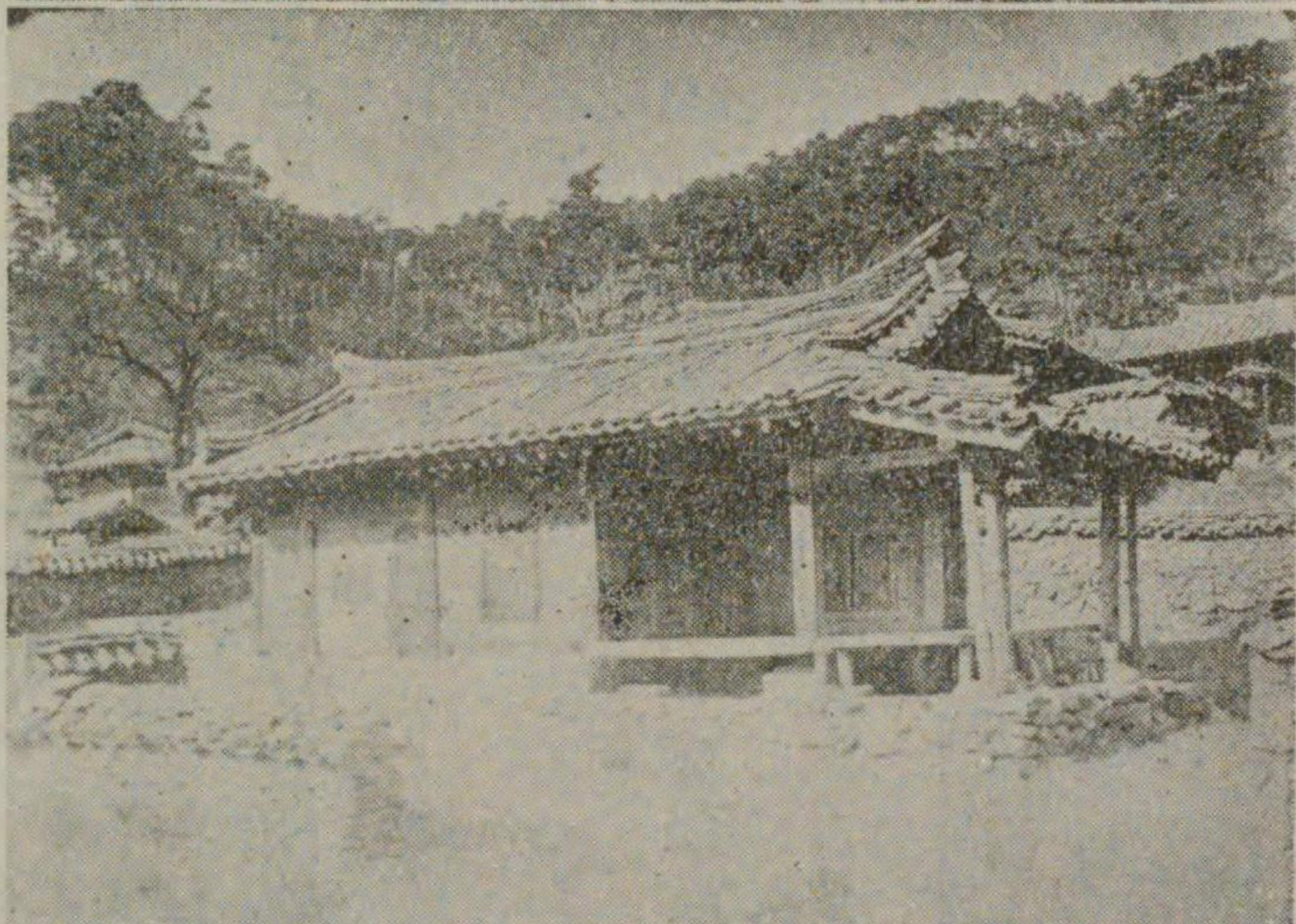
右の中星州及び安東の關王廟は創建のまゝであるが共に規模極めて小である。其他の者は後の再建

第二百二圖



玉山書院

第二百三圖



陶山書院

第二百四圖



紹修書院

若は近年の創立で建築上あまり價值はない。唯京城の東廟・南廟・北廟の平面が支那的に本殿の前面に

禮堂を連結してゐるのは彼の制度を摸した結果に出でしものと思ふ。

書院

書院は朝野の名儒の居處若くは其往來せし地に廟を立て、之を祀り併せて子弟教養の處となせしものにして丹城の道川書院(太宗元年建)始めて史上に見え明宗の五年安東の紹修書院に額を賜ひしより所謂賜額書院なるもの起り特に之を尊重した。是より諸道競うて書院を建て幾百の多きに至つた。書院には多く學者の居住せし建物を其まゝ保存し且其著書筆蹟及び日常愛玩せし器物を大切に貯藏せるを以て當時の住宅建築工藝品の貴重な參考資料となつてゐる。書院内には別に廟を立て、其學者を祀り又講堂及び學生の宿泊所を設け以て子弟教養の處としてゐる。其重なる者を擧ぐれば

慶州	玉山書院(獨樂堂養真菴(李珥隱棲の處))	中宗 二七	明嘉靖 一一	天文 元	一五三二
同州	玉山書院	宣祖 五	明隆慶 六	元龜 三	一五七二
榮州	紹修書院講堂 文成公廟	中宗 三七	明嘉靖 二一	天文 一一	一五四一
禮安	陶山書院(李滉棲遲の地)	宣祖 七	明萬曆 二	天正 二	一五七四
開城	崧陽書院(鄭夢周故宅)	宣祖 六	明萬曆 元	天正 元	一五七三

右の内玉山書院・紹修書院・陶山書院・崧陽書院何れも初期の創立に成れる代表的書院にして其中に

ある李珣・李滉兩鴻儒の居室の如きは李朝初期に於ける住宅建築の一斑を知るべき貴重の遺物である。

佛 寺

高麗時代には佛教は外面隆盛の極に達せしが如きも精神的には却て腐敗墮落し李朝の太祖・太宗其弊に鑑み特に壓抑の方針を取り歷朝ついで益其法を嚴にしたから京城・開城を始めとして州郡の都邑に在りし寺刹は悉く廢滅に歸し僅に僻遠なる山谷の間に在りし者のみ全く活社會より孤立して其命脈を維持することを得た。加之壬辰役には半島南部の伽藍は多く兵燹に罹り羅麗兩朝以來の有形の文物多くは灰燼に歸した。當時西山・松雲兩大師を始め僧徒の國事に盡瘁せしもの多く多少其存在の意義を世間に認められた。而も上下疲弊の際假令其後再興されし佛寺も復當初の盛觀を復するに至らず中には其儘再興を見ず荒廢の悲運に遭ひしものも少くはなかつた。それでも李朝五百年間國家の壓迫と社會の酷遇とに堪えしものの中には往々廣き山林土地を有し自力を以て多數の建物を保持し數百の僧侶を蓄へし大伽藍もあつた。佛教的藝術は此等の伽藍や僧侶の手によりて僅かに保存され衰へたりと雖も猶李朝藝術界に重要な地歩を占めてゐたのである。
今現存せる重なる伽藍を擧ぐれば梁山の通度寺・東萊の梵魚寺・金堤の金山寺・海南の大興寺・靈巖

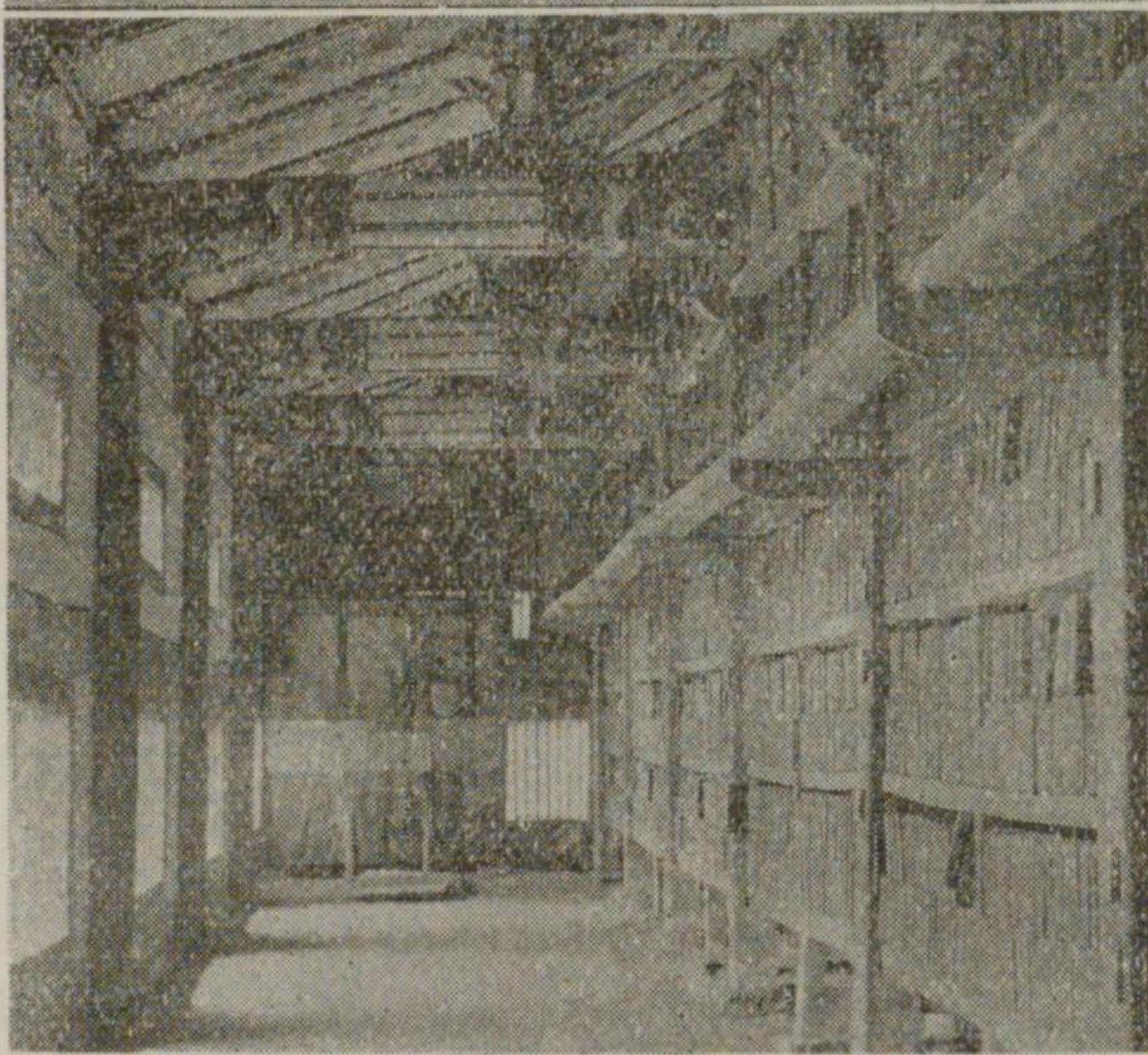
の道岬寺・順天の松廣寺・安邊の釋王寺・杆城の乾鳳寺・襄陽の洛山寺・醴泉の龍門寺の外俗離山法住寺・智異山華嚴寺・及び双溪寺・伽倻山海印寺・妙香山普賢寺・金剛山楡岾寺・及び長安寺・八公山桐華寺・五

第二百五圖



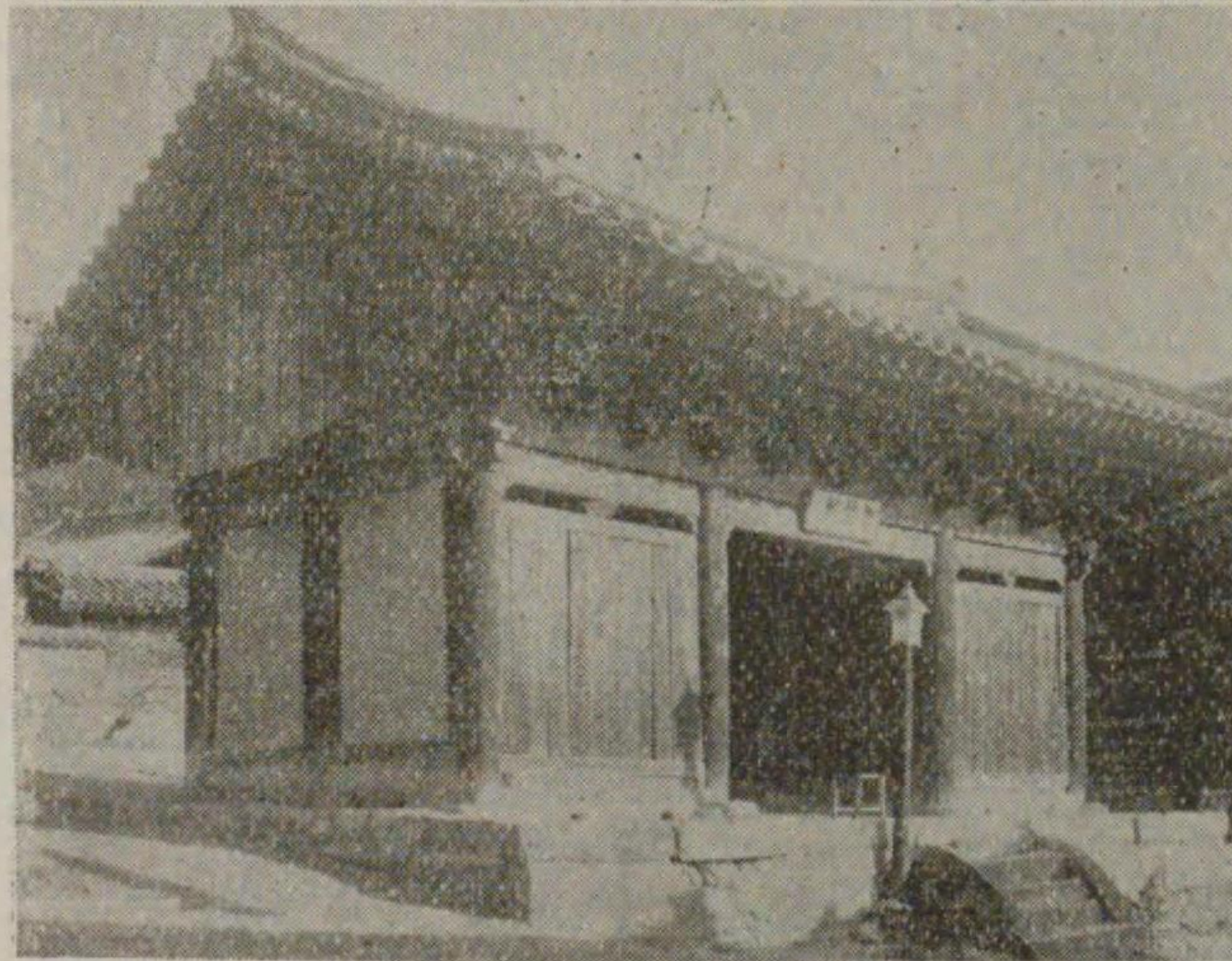
金山寺大藏殿

第二百六圖



海印寺藏經版庫

第二百七圖



釋王寺獲持門

臺山月精寺等が最も著名である。此等の寺刹の中には多數の重要な佛殿・門廡・僧房等を有し其年代

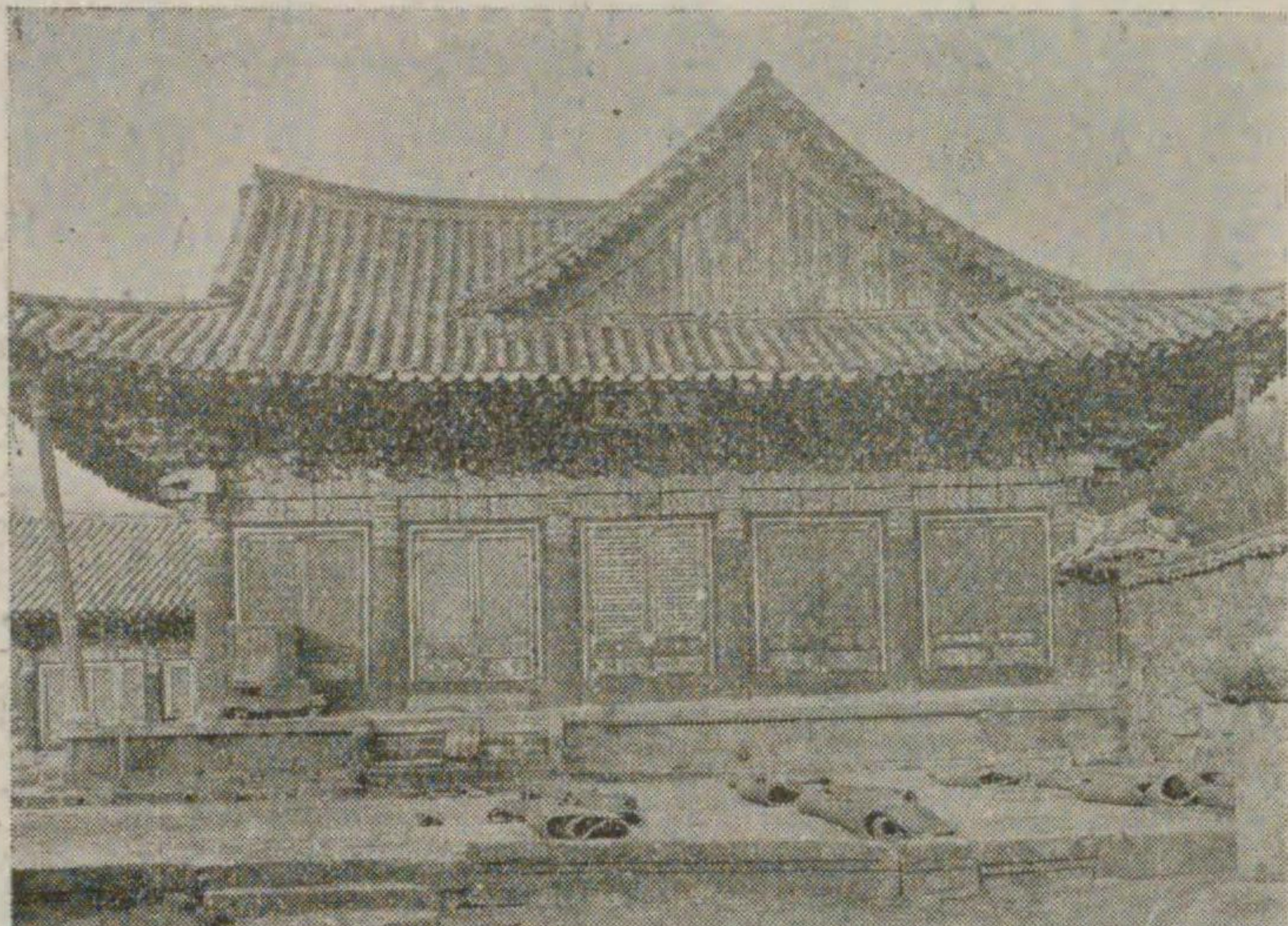
は稀に初期に上れる者あれども寧ろ其殆ど全部は後期に屬する者のみである。今一々此等建造物の説明を試むる暇なきを以て此には先佛寺の大體の規模配置を説き佛殿其他の建物の特質を論じ終りに重要な建造物の名稱年代を表示し概略の説明をなすことに止めたいと思ふ。

配置 伽藍は常に山谷の間形勝の地を卜して此に經營せられ其大小により建物の數、種類に自ら異同あれども其小なる者は境域の中心に本尊を安置する所の大雄殿若しくは極樂殿等を置き其前東西に僧房を立て前面斷崖の上に高く樓を構へ更に其前に門を開いてゐる。其大なる者には本堂たる大雄殿の外極樂殿・彌勒殿・觀音殿・冥府殿・羅漢殿・山神閣・鐘閣等を隨處に立て多數の僧房を其附近に設け大雄殿の前面に樓を構え其下に天王門・一柱門等の門を開いてゐる。此等の諸建物の配置の方法は新羅時代には唐制を輸入して頗る森嚴なる者ありしが高麗を経て李朝に入るに及び次第に朝鮮化せられ堂宇僧房の配置必ずしも均勢ならず極めて自由不規則にして必要の建物を便宜の處に置くこと内地の諸伽藍の制度に似てゐる。

伽藍の中心をなせる大雄殿若しくは極樂殿は規模の大小により異同あれども五間四面、五間三面なる者最も普通にして大なるは七間四面、七間三面に至り小なるは三間二面に過ぎざる者もある。其他の佛殿・觀音殿・羅漢殿は三間二面なるもの寧ろ普通にして大なるは稀に五間四面に達することもある。

佛殿は單層の者最も普通にして稀には二層三層に及べる者もある。其屋蓋は入母屋造若しくは寄棟造普通にして又切妻造もある。一般に瓦を以て之を葺いてゐる。

第二百八圖



通度寺大雄殿

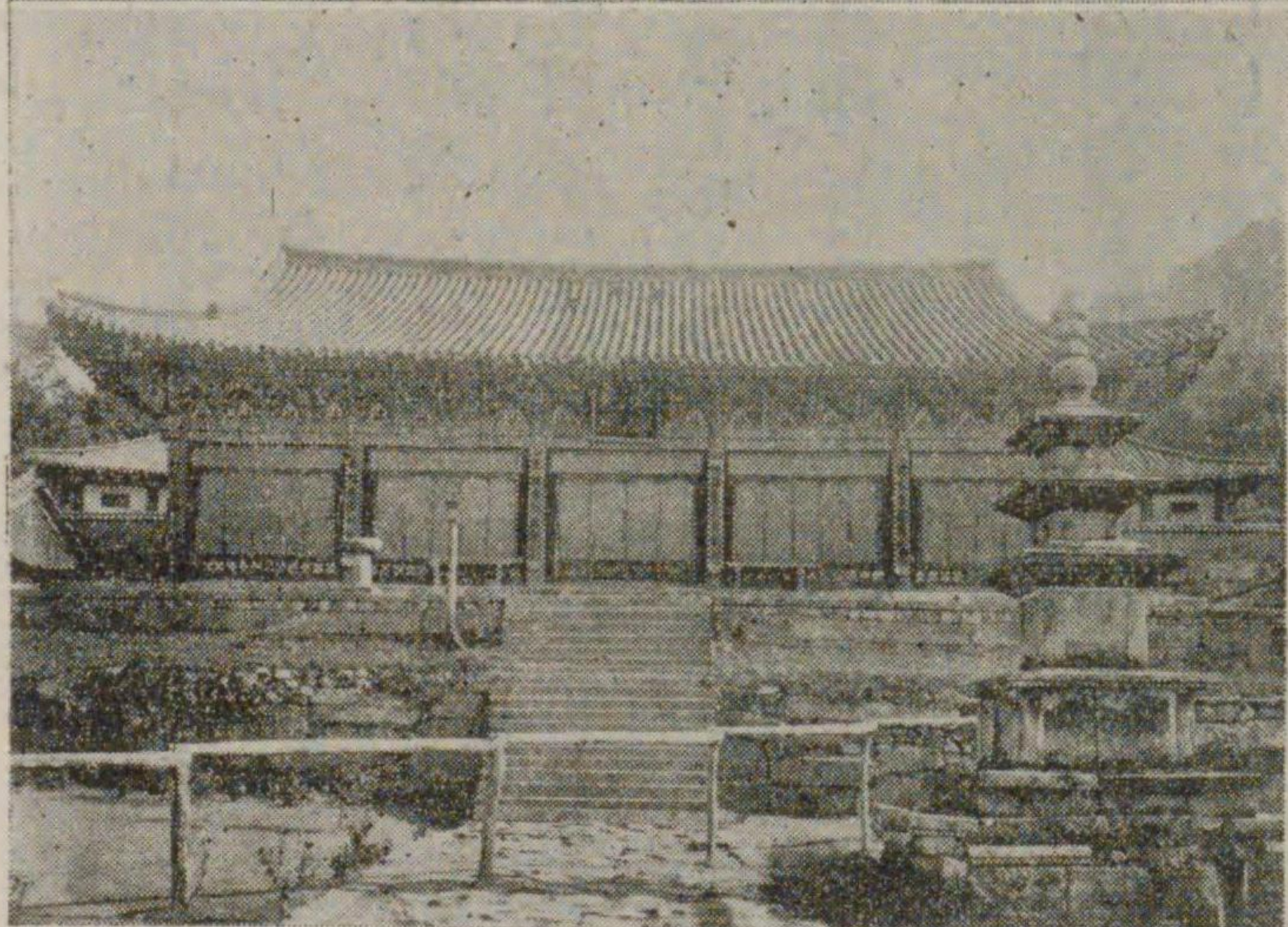
朝鮮の美術工藝

第二百九圖



華嚴寺覺皇殿

第二百十圖



海印寺大寂光殿

二二九

建物は必ず高き石壇上に立ち礎石は多く其上を方形又は圓形に造り出し柱は割合太くして多少の膨みを有し其直径は上部に向て次第に減殺されてゐる。斗拱は大斗肘木より三斗・出組・二手先・三手先に至り軒は必ず二重椽となつてゐる。内部の床は其坐禮の習慣に適せしめんが爲板張となつてゐる。其中央正面には佛壇を設け其後に本尊を安置し左右に兩菩薩を配してゐる。天井は重要なは多く格天井となし他は化粧屋根裏をあらはし本尊脇侍佛の上には常に纖巧華美なる天蓋を懸吊してゐる。

裝飾は其簡なるは内外共に木材を辨柄塗にせるのみなれども其重要なは柱斗拱軒廻りより内部の天蓋・天井に至るまで彩色を以て模様を描き最も濃麗なる特質を發揮してゐる。

本尊の後壁には多く佛・菩薩等の像を畫ける大幅を掲げ内外の壁面には往々佛・菩薩・天部等の像を寫してゐる。

門には所謂一柱門・四脚門・八脚門あれど日本内地の佛寺に於けるが如き樓門は全く見ることが出来ぬ。樓は多く懸崖に臨み前後を開放して參拜者の休憩眺矚に便ならしめ床を板張となし天井を屋根裏となし内に重修記若くは題詩等の扁額を多く掲げてゐる。實に此樓は朝鮮固有の者にして内地にも支那にも見ることができぬ。鼓樓は梵魚寺にある唯一の實例にして形態手法共に稍佳なれども鐘閣は何れの寺刹にある者も皆簡疎に過ぎて殆ど觀るに足らぬ。

僧房は構造稍簡にして斗拱は多く大斗添桁か三斗組に過ぎず、普通住宅の如く温突床を有し天井を紙張としてゐる。

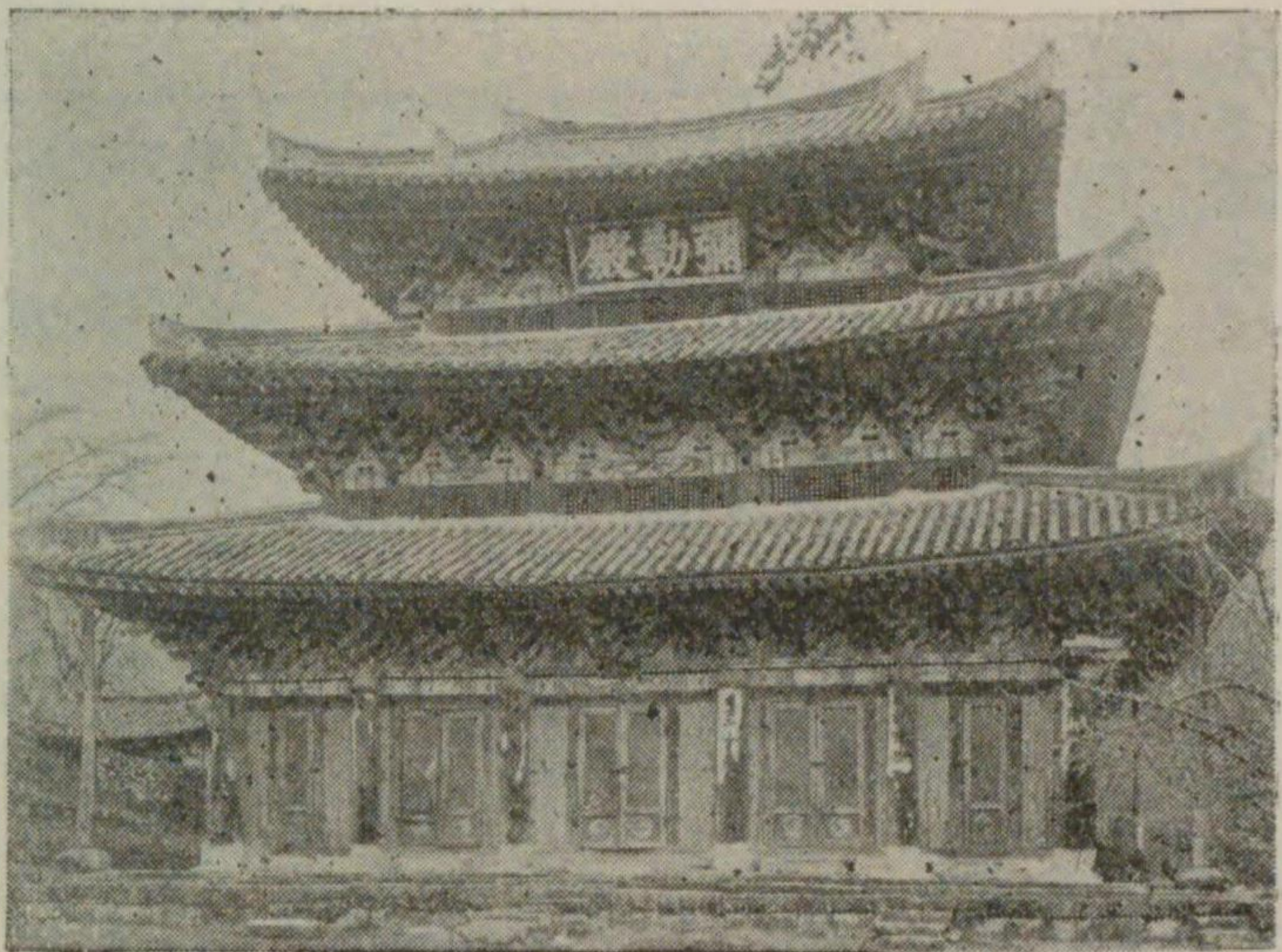
今現存伽藍の建造物中最も重要な者を前期・後期に分ちて左に表示することとする。

朝鮮時代初期

安邊	釋王寺護持門	太祖	元	明洪武	二五	元中	九	一三九二
慶州	神勒寺祖師堂	睿宗	元?	明成化	五	文明	元	一四六九
陝川	海印寺藏經版庫	成宗	一九	明弘治	五	長享	二	一四八八
高敞	鐵堂寺大雄殿	中宗	二五	明嘉靖	九	亨祿	三	一五三〇
同	同 藥師殿	同		同		同		同
黃州	成佛寺極樂殿							
同	同 應真殿							
春川	清平寺極樂殿							
靈巖	道岬寺解脫門							
江華	淨水寺法堂							
昌寧	觀龍寺藥師堂							
康寧	無爲寺極樂殿							
順天	松廣寺國師殿							
同	同 祖師殿							
同	同 龍華堂							

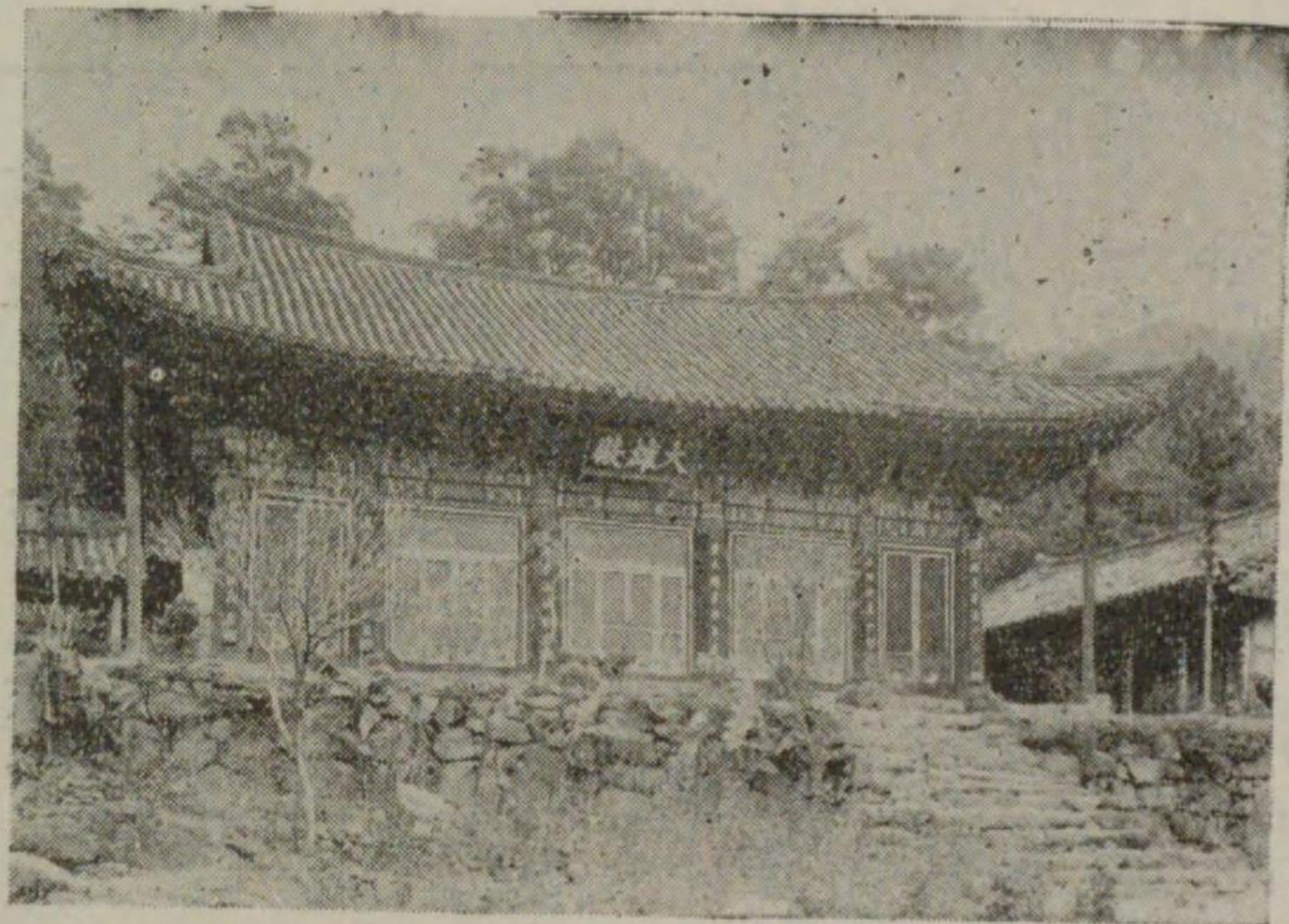
初期の建築の遺存せるもの少きも後期の者には規模壯大にして優秀なるものが多数にある。今其重

第二百十一圖



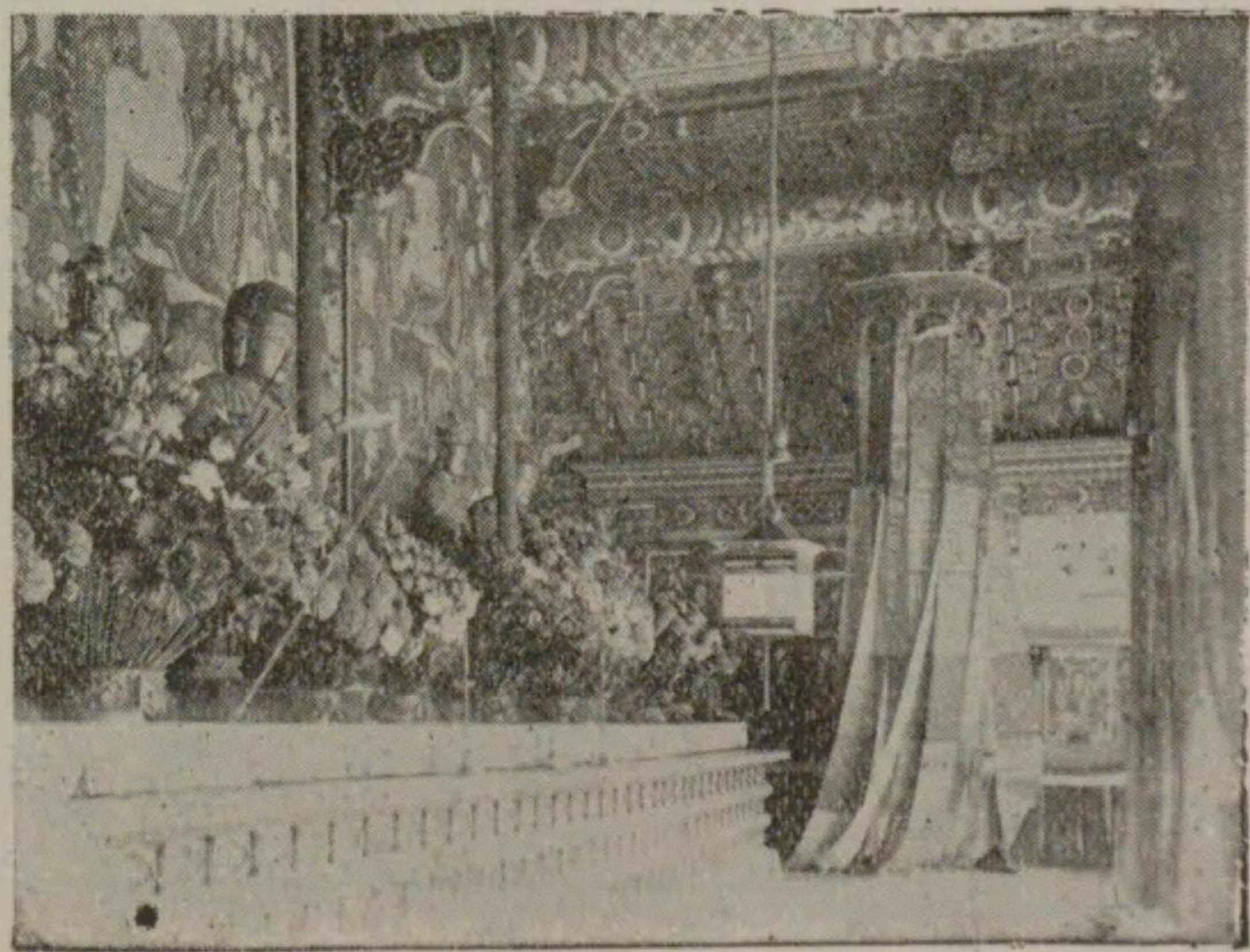
金山寺彌勒殿

第二百十二圖



双溪寺大雄殿

第二百十三圖



同内部

もなる者を説かんに傳燈寺大雄殿・双溪寺大雄殿・華嚴寺大雄殿・桐華寺大雄殿・釋王寺大雄殿・普

賢寺大雄殿及び海印寺大寂光殿は何れも代表的單層佛殿である。又華嚴寺覺皇殿・長安寺大雄殿及び四聖殿・法住寺大雄殿・無量寺極樂殿は何れも重層の佛殿にして金山寺彌勒殿は比類稀なる三層の大佛殿である。通度寺大雄殿の屋蓋が丁字形の棟を有せるは他に見ざる所、爲めに形態常套を脱し奇抜の外觀を示すことを得た。又俗離山法住寺の捌相殿と稱するは全く五層の塔婆にして初層方五間、次第に上層に向ひて著く其大きさを遞減せるを以て頗る安定の觀を呈してゐる。之を内地の塔婆に比すれば彼よりは各層減殺の度多きを以て彼の如く奇峭ならず寧ろ莊重の風を示ししゐるが其相輪は著しく矮小に失してゐる。要するに現今朝鮮に遺存せる唯一の木塔にして支那に於ても此種の者は全く消滅してゐるから古代木塔の遺制を知り併せて内地の塔婆との關係を研究するのの上に於て最も貴重の標本である。

石塔婆

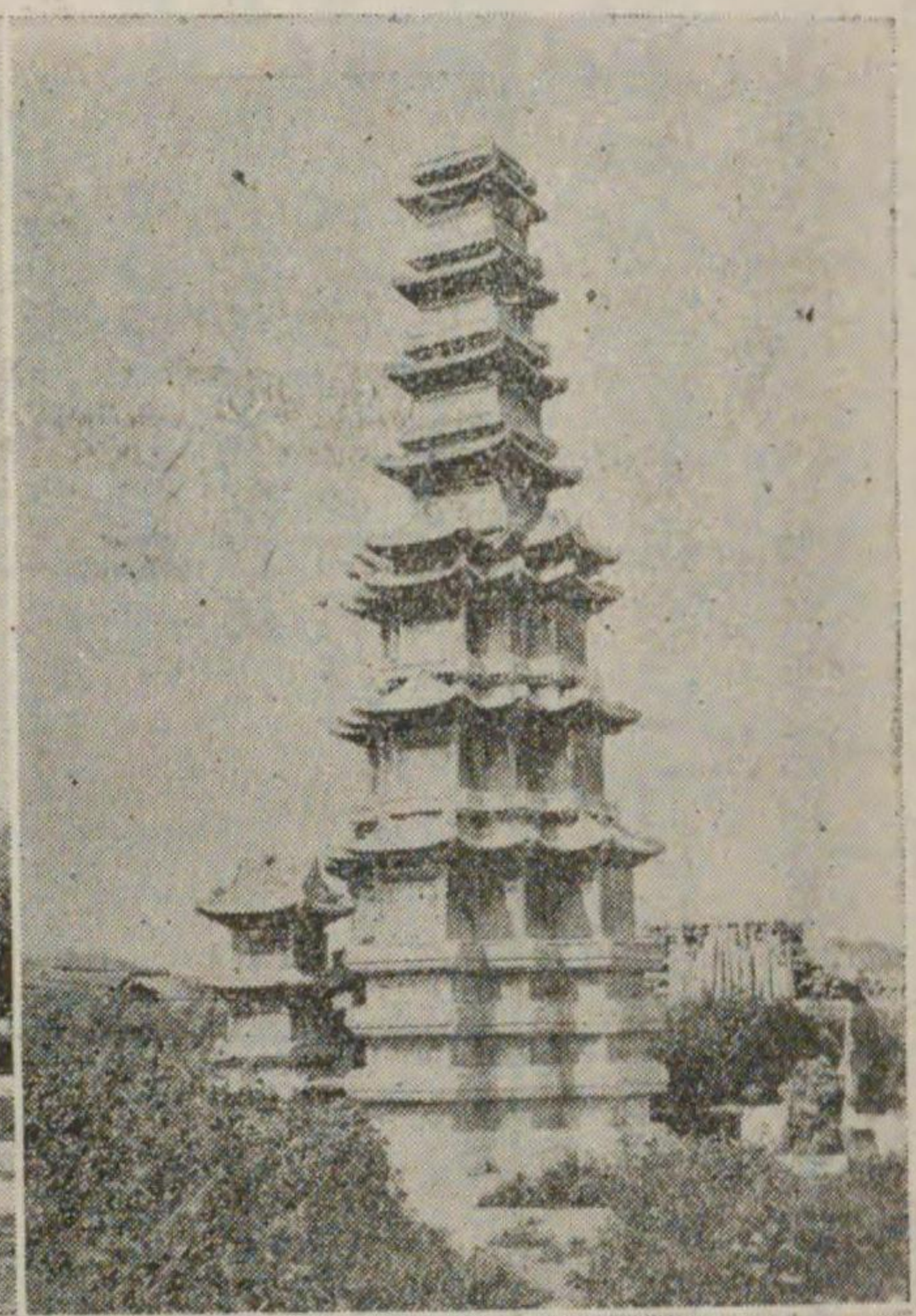
李朝に於ては佛教衰頹の結果世祖朝の頃を除きては石塔婆の建立は殆ど絶無である。假令稀に再建さるゝことありとも手法粗拙觀るに足るべきものはない。今其の重要なる者を擧ぐれば

京城	廢圓覺寺大理石多層塔	世祖	一二	明成化	三	應仁	元	一四六七
襄陽	洛山寺七重石塔	世祖	一三	明成化	四	應仁	二	一四六八
驪州	神勒寺七重石塔	成宗	三?	明成化	八	文明	四	一四七二

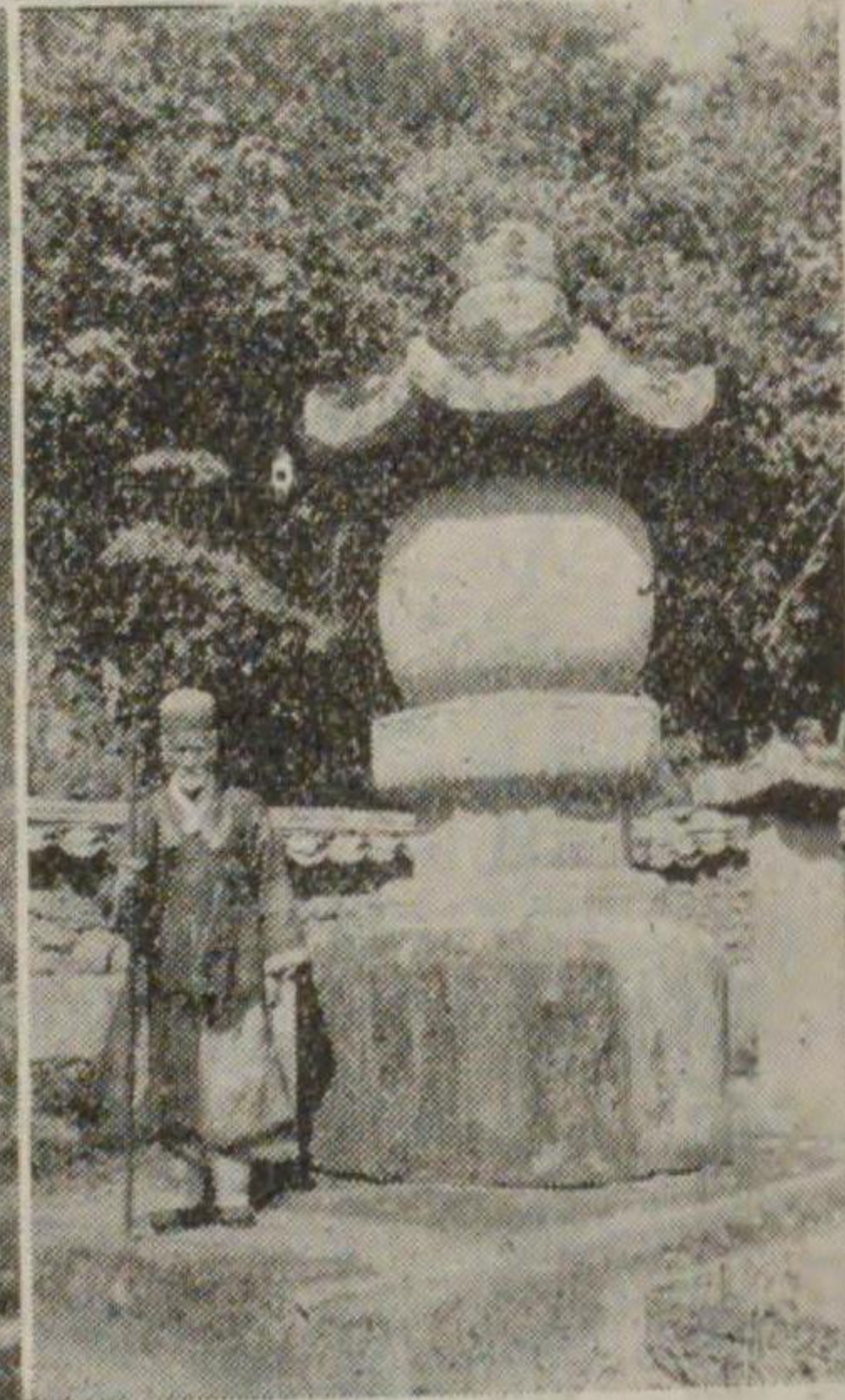
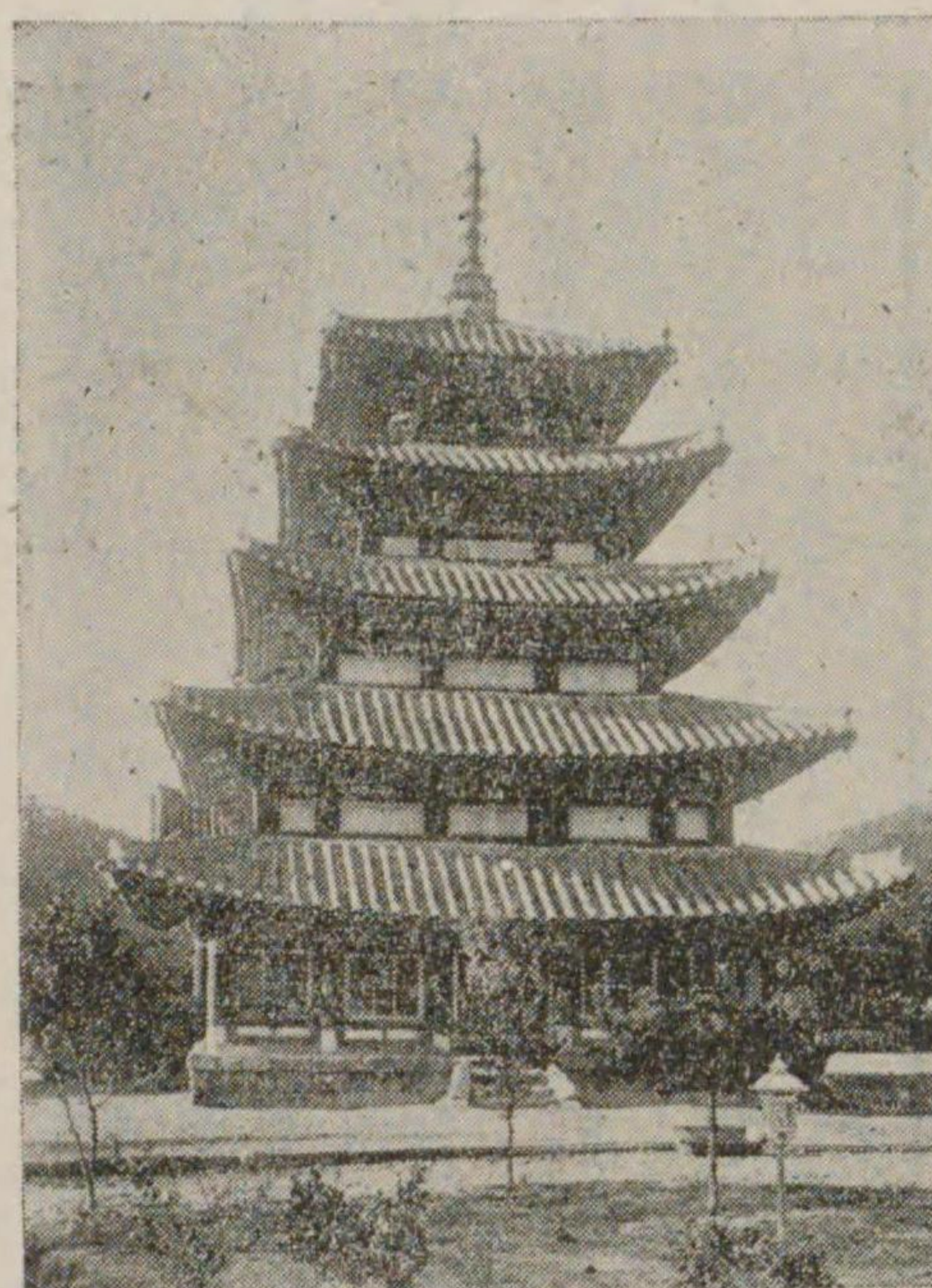
京城廢圓覺寺の大理石多層塔は今バゴダ公園内に立つてゐる。世祖十二年の建築にして高麗末に成れる敬天寺多層塔を摸せしもの、全部白大理石より成り三層の斗出星形の基壇の上に十層の塔身を起し各層の塔身に十二會相を刻み塔身より基壇に至るまで隙間もなく佛・菩薩・天部・人物・草花等の文様を浮彫とせるは彼に符合せるも其細部は多少の相違を示してゐる。全體の權衡善美の極に達し意匠の豊富、手法の精練、李朝此種最優の標本たるのみならず之を同時代の明の技工に比するも毫も遜色無く却て之を凌駕せんとしてゐる。假令摸造にもせよかくまで優越せる手法を示せるは當時藝術界の進歩決して悔るべからざるものありしを思はしめる。

洛山寺七重石塔は頗る高險の權衡をあらはしてゐるが形態相當に見るべく特に金銅製の相輪は當時の様式を示せる好標本である。神勒寺七重石塔は前者に反し頗る莊重の風を帯び全部白大理石より成り二重の基壇に施されたる蟠龍仰蓮覆蓮等の浮彫は甚だ見事にして手法廢圓覺寺多層塔に一致してゐる。

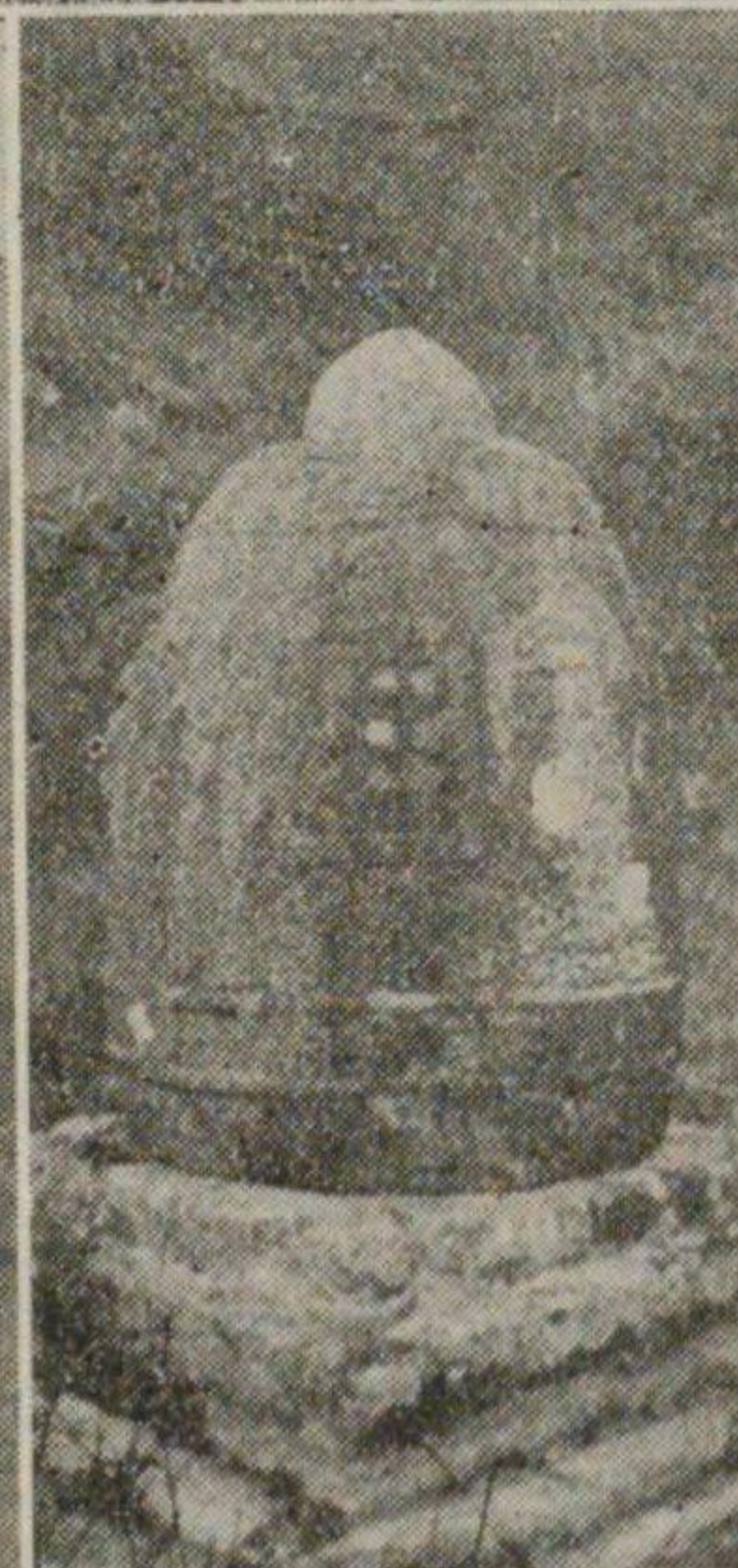
圖四十百二第 塔層多寺覺圓



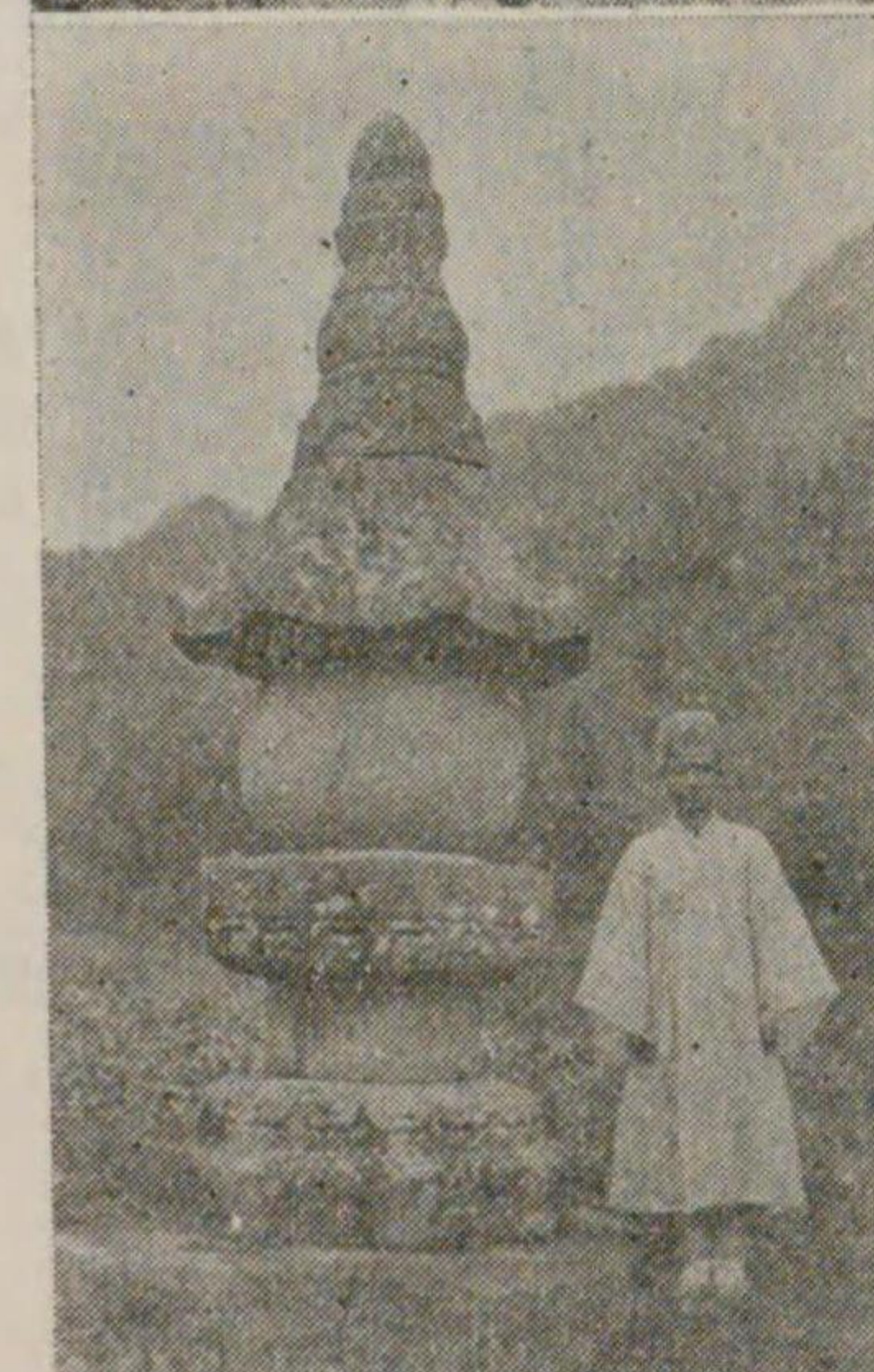
圖五十百二第 殿相捌寺住法



圖六十百二第 塔堂竟無寺安長



圖七十百二第 塔殿碧寺嚴華



圖八十百二第 塔藏利舍尊世寺住法

浮屠

浮屠は麗時の隆盛に反し規模に於ても技工に於ても観るべきものは少い。其様式は石燈様・方塔様・石鐘様の範疇を出でず石燈様は基壇及び蓋を八角形にして塔身を球状となせる者普通にして方塔様は基壇上に二層の方塔を起し頂に相輪を上げてゐる。石鐘様は極めて簡単な手法より成れるものと梵鐘に倣ひて四面に乳廓を作り上に寶珠様を載せたるものがある。此等の中稍観るべきは左の數者である。

陝川	海印寺弘濟菴松雲墓塔	光海	四	明萬曆	四〇	慶長	一七	一六一二
求禮	華嚴寺碧巖墓塔	顯宗	四	清康熙	二	寛文	三	一六六三
淮陽	長安寺無竟堂靈運塔	後期						
報恩	法住寺世尊舍利藏塔	後期						
淮陽	金剛山白華菴楓潭墓塔	後期						

●海印寺弘濟菴松雲墓塔は普通の簡單なる石鐘にして基石の上面に平らに蓮座を刻してゐる。●華嚴寺碧巖墓塔は梵鐘を摸せる石鐘にして四面に九乳を容れたる乳廓を作り正面には位牌狀をあらはし碧巖堂塔の四字を刻し上には寶珠を冠し基石の四隅には獸首を刻み出してゐる。●金剛山白華菴楓潭大師

の墓塔亦石鐘様なれどもかゝる乳廓はなく頂にいくつかの千鳥破風狀を作れる小屋蓋を載せ上に寶珠を冠してゐる。●長安寺無竟堂靈運塔は新羅・高麗を通じて行はれ來りし石燈様塔にして八角の基壇の上に扁球狀の塔身を載せ其上に割合に高き寶珠及八角蓋を載せてゐる。●法住寺世尊舍利藏塔亦此様式に屬してゐる。

石碑

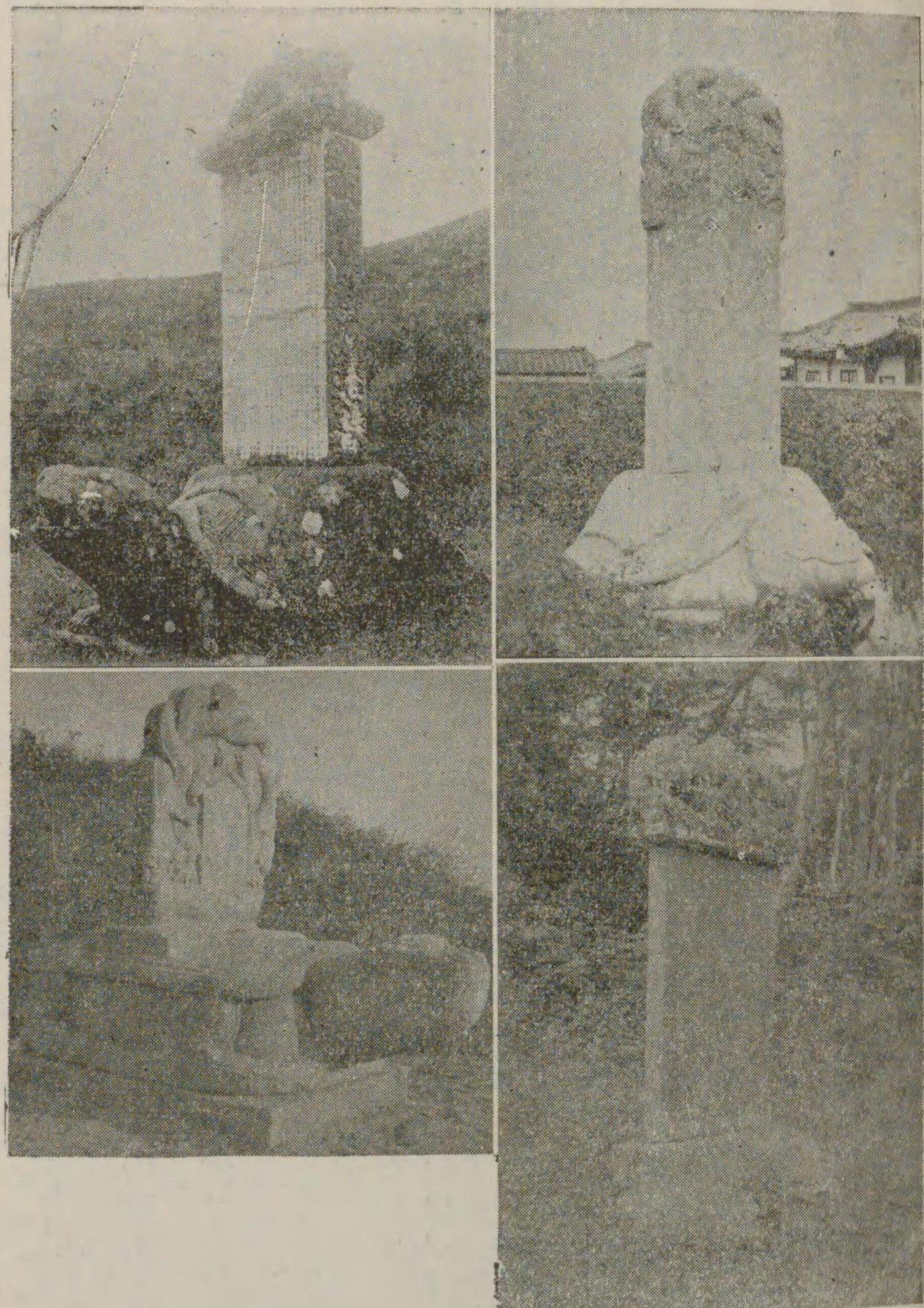
當時代に屬する石碑は極めて多く精粗巧拙一ならず。今其重なる者を次に擧げる。

開城	演福寺塔重淑碑	太祖	元	明洪武	二五	元中	九	一三九二
楊州	太祖健元陵碑	太宗	九	明永樂	七	應永	一六	一四〇九
廣州	太宗獻陵碑	世宗	六	明永樂	二二	應永	三二	一四二四
京城	大圓覺寺碑	世祖	一	明成化	三	應仁	元	一四六七
慶州	玉山書院李晦齋神道碑	宣祖	一	明萬曆	五	天正	五	一五七七
陝州	海印寺弘濟菴松雲大師石藏碑	光海	四	明萬曆	四〇	慶長	一七	一六一二
京城	文廟碑	仁祖	四	明天啓	六	寛永	三	一六二六
淮陽	金剛山白華菴西山大師碑	仁祖	一〇	明崇禎	五	寛永	九	一六三二
靈巖	道岬寺道說國師碑	仁祖	一四	明崇禎	九	寛永	一三	一六三六

廣州	大清皇帝功德碑
禮州	華嚴寺碧巖禪師碑
南海	大興寺大屯寺事蹟碑

仁祖	一七	明崇禎	一一	寬永	一六
顯宗	四	清康熙	二	寬文	三
					一六三九
					一六六三

石碑の様式は高麗時代の繼續に成れる者あれども李朝の初頭儒學の興起と支那本土に於ける蒙古族の覆滅漢民族の復興とに刺戟せられ從來高麗化する形式を棄て、直ちに唐宋時代の螭首龜趺の制に倣はんとするの傾向を生じた。其初頭に見はれたるは太祖元年權近撰文の演福寺重剎碑である。其螭首は純然たる唐式で新羅統一時代の太宗武烈王碑の者に似てゐる。又龜趺は寧ろ古拙に過ぎてゐるが是れ亦麗碑と頗る性質を異にしてゐる。太祖健元陵碑・太宗獻陵碑亦同様の螭首を有し其雄渾の氣象却て明碑を凌駕し宋元の壘を摩してゐる。京城バゴダ公園内大圓覺寺碑の螭首龜趺は唐宋碑より脱化し來りて而も固有の特色を示し技工の精練なる更に李朝碑中の白眉である。而るに碑の様式は後期に至るに隨ひ次第に廢頽の風を帶び手法も隨て粗漫となり觀るに足るべき者は少くなつた。其中に在りて稍推賞に値するは道岬寺道誥國師碑と大屯寺（大興寺）事蹟碑である。甲は蓋上に蟠龍を刻み碑側にも亦雲龍を作り雄麗なる龜趺の上に立つてゐる。技工は稍可なれども權衡は寧ろ當を失してゐる。乙は麗碑の様式を祖述せる者なれども所謂虎を描きて犬に類するものである。廣州三田渡にある大清皇



圖九十九百二第
碑寺覺圓大
圖十二百二第
碑師大雲松

圖一十二百二第
碑師國誥道
圖二十二百二第
碑剎重寺福演

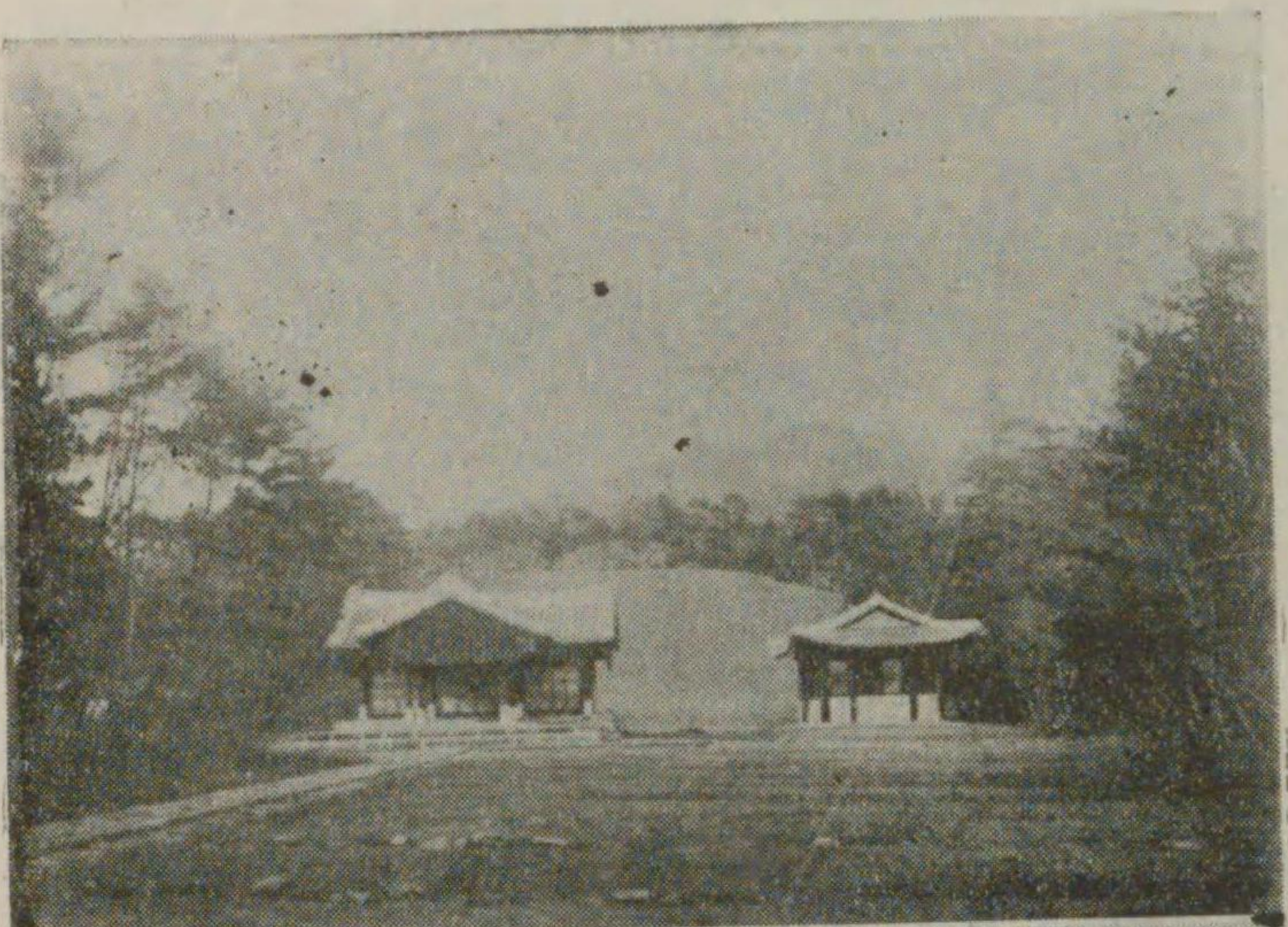
帝功徳碑は鮮碑中の大作にして亦後期の優作である。金剛山白華庵西山大師碑は一種上の開いた厚き蓋を有し其上に寶珠蓮華座を上げたるは從來多く見ざる形式である。玉山書院李晦齋神道碑、海印寺弘濟菴松雲大師碑は麗碑の制度の退化せる者で猶此種石碑の佳なるものである。要するに石碑は二百年來次第に頽廢の風を帯びて技工も粗獷となり推賞に値すべきものは少なくなつた。

陵墓

太祖の建國二年先づ咸南文川に翼祖の智陵及び妃の淑陵を咸興に度祖の義陵及び妃の純陵・桓祖の定陵及び妃の智陵・穆祖の徳陵及び妃の安陵を築いた。其制度は何れも高麗恭愍王陵を参照して適宜に計畫された者であつた。太祖以降歴代の王陵は京城を中心として楊州・廣州・驪州の地方に營まれた。此等王陵は常に後に山を負うて其中腹に墳隴を築き龍虎の勢をなせる岡峦左右を擁し南の方平原を距て、遠く安山を望み陵域の四周は老樹蔭森尤も形勝の地を占めてゐる。參道の入口には先づ紅箭門があり次に石橋を経て丁字閣に至る。丁字閣の前東西に守僕房・水刺房がある。更に東方に碑閣が立つてゐる。丁字閣の後方地漸く高く之を登れば始めて墳隴の前に達する。墳は太祖の健元陵・純祖の仁陵は別に王妃の附葬なきも太宗の獻陵は王墳王妃墳左右に並べること全く高麗恭愍王及妃の玄陵正陵と同

一である。又世宗の英陵・仁祖の長陵は王及王妃を一の墳隴内に合葬して前に石床二を置いてゐる。

第二百二十三圖



第二百二十四圖



第二百二十五圖



太宗 獻陵

同 墳

同 石物配置

然るに世祖の光陵及び成宗の宣陵は東西相並びたる兩岡上に王陵(西)王妃陵(東)を築き孝宗の寧陵は朝鮮の美術工藝

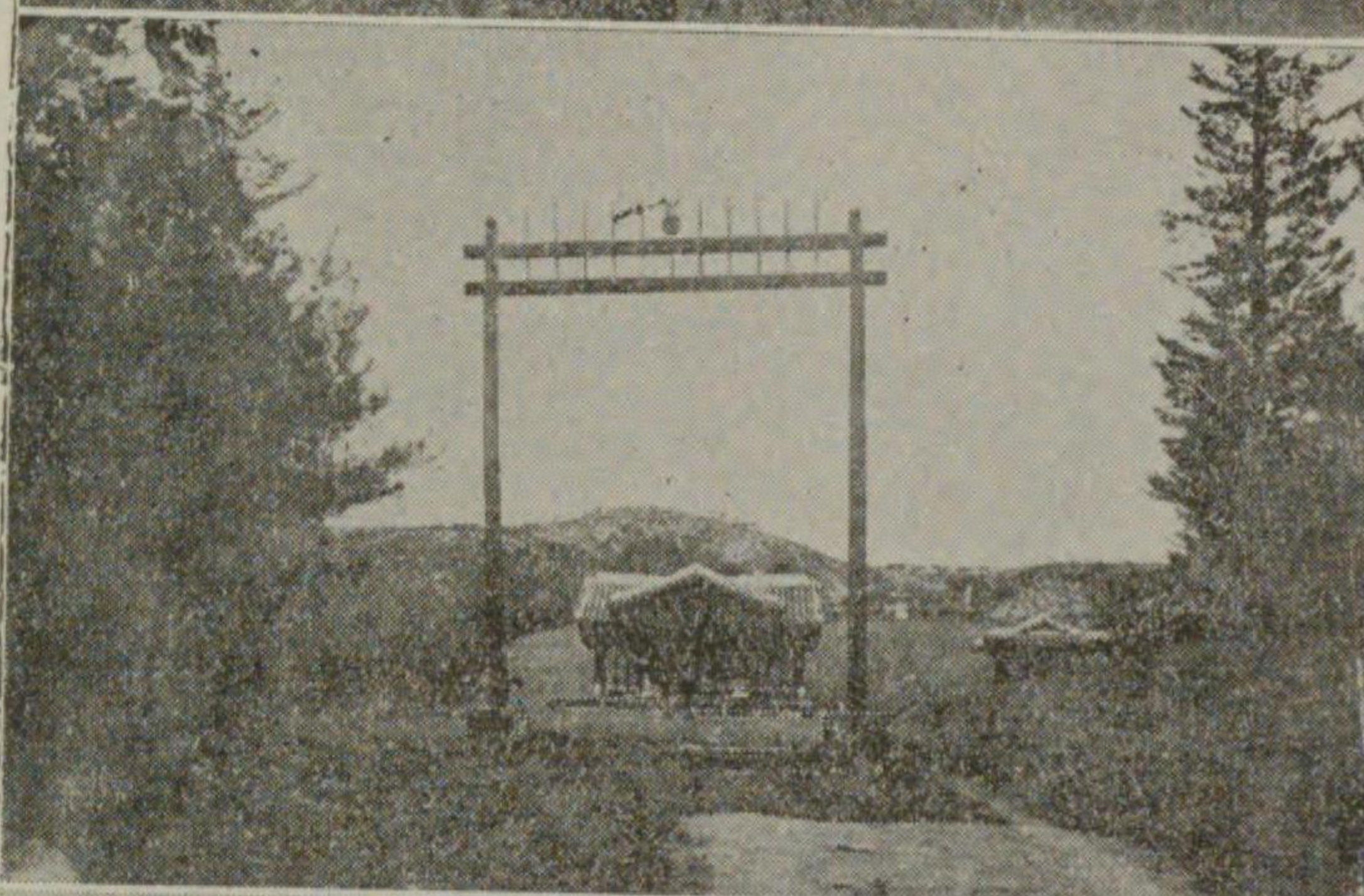
前後に連なれる兩岡上に王陵(後)王妃陵(前)を築き共に同様の象設を兩處に施してゐる。又墳隴は太

第二百二十六圖



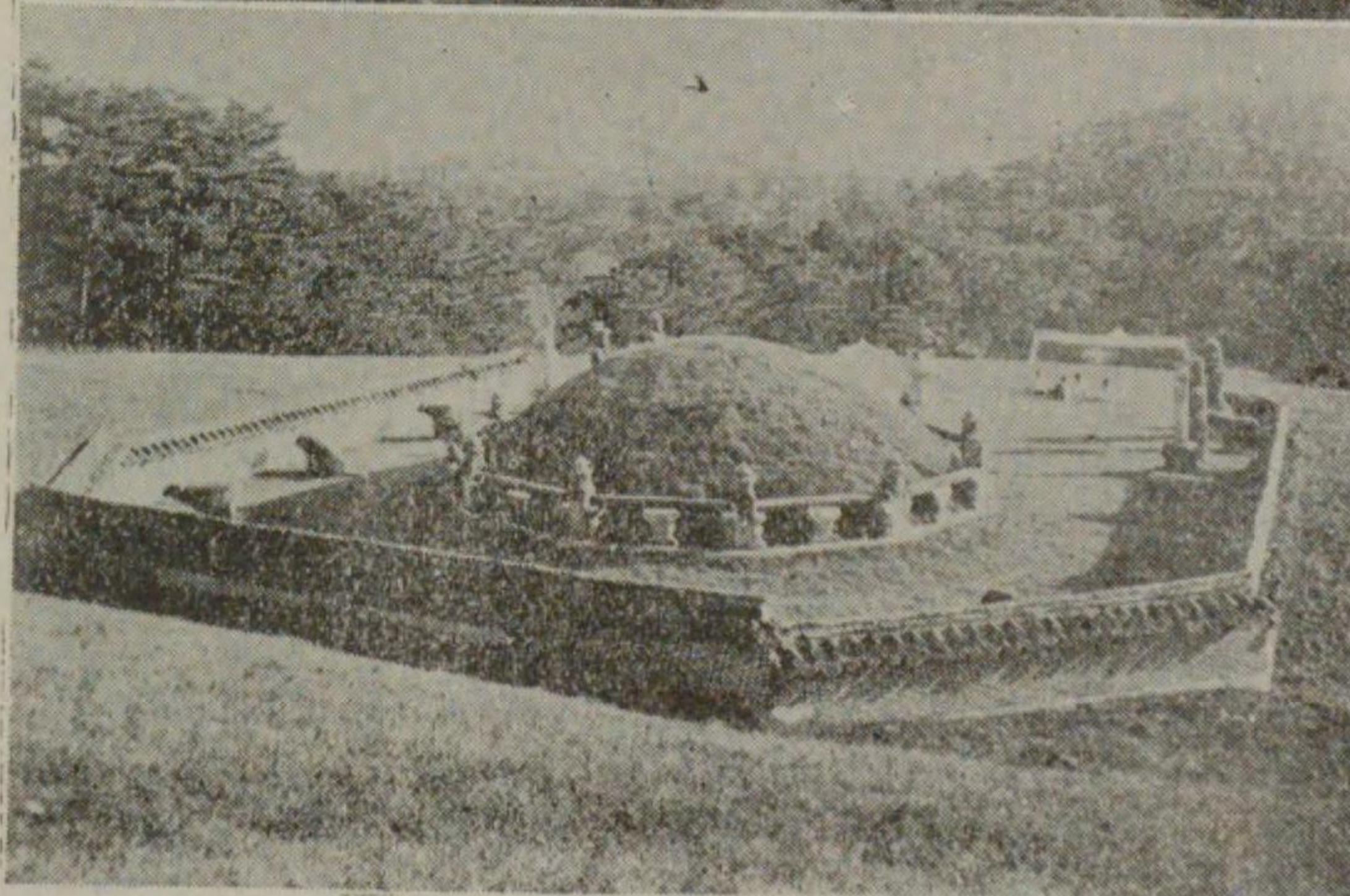
文石(右) 武石(左)

第二百二十七圖



孝宗陵全景

第二百二十八圖



純宗陵背面

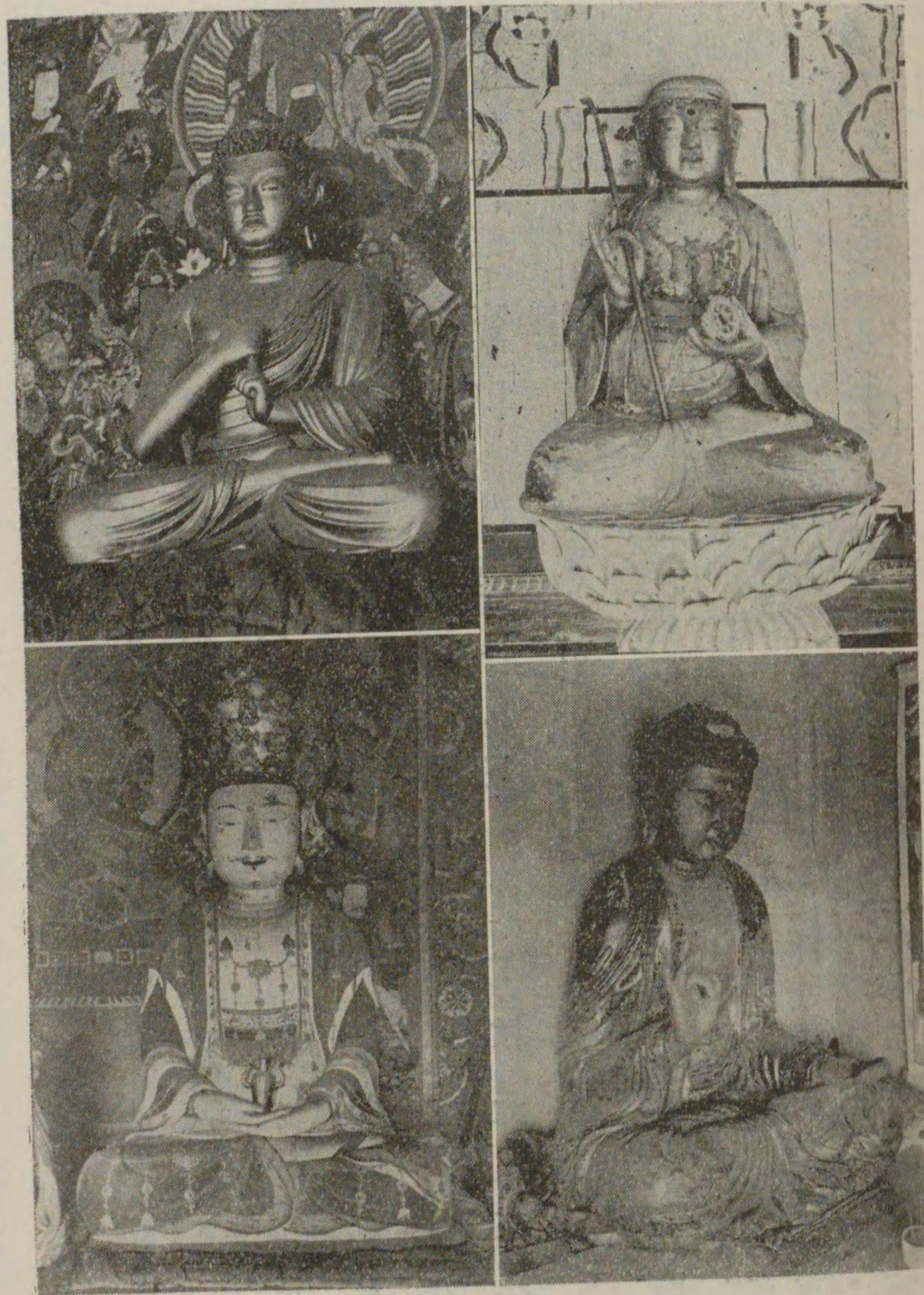
祖の健元陵・太宗の獻陵の如く恭愍王陵に準ひ彫飾を施せる護石を周圍に繞せしものもあれど世祖の

光陵・純祖の仁陵の如く之を缺いてゐるものもある。墳の周圍には石欄を繞らし其前面に石床を設け左右に望石を立て周圍に石羊石虎を交互に配置して外に向はしめ以て陵を守護するの状をなさしめ石床の前には長明燈を立て墳の東西北の三面には所謂曲牆を繞らしてゐる。墳の前方一段低く東西に文石一對若くは二對を立て更に一段低く武石一對若くは二對を立て文武石人の後には各石馬を置いてゐる。要するに李朝歴代の王陵は高麗恭愍王陵を標準として更に一層の發達を遂げ高麗時代の者よりは規模頗る大に象設亦盛んとなり彼に無き所の石馬曲牆を見るに至つたのである。

彫刻

李朝初期に於ける彫刻的遺物は甚だ少きも佛菩薩の面相姿勢共に優秀にして當時の明時代の者又は我室町時代の者に比するも當に遜色なきのみならず寧ろ之を凌駕せんとするものがある。然るに後期に入りては實例益多くして技巧益拙、佛菩薩の顔容徒らに軟弱に失し體軀の鈞合も美ならず衣文亂れて緊束を缺いてゐる。余の見し者の中比較的優秀なるものを擧ぐれば

龍岡	新德寺極樂殿銅造觀音坐像	世宗	八	明宣德	元	應永	三三	一四二六
陝川	海印寺法寶殿木造毘盧舍那佛像	成宗	一九	明弘治	元	長享	二	一四八八



圖一十三百二第
佛那舍盧毘殿寶法寺印海

圖二十三百二第
音觀寺山洛

圖九十二百二第
像佛坐卷率兜寺雲禪

圖十三百二第
迦釋寺香尋

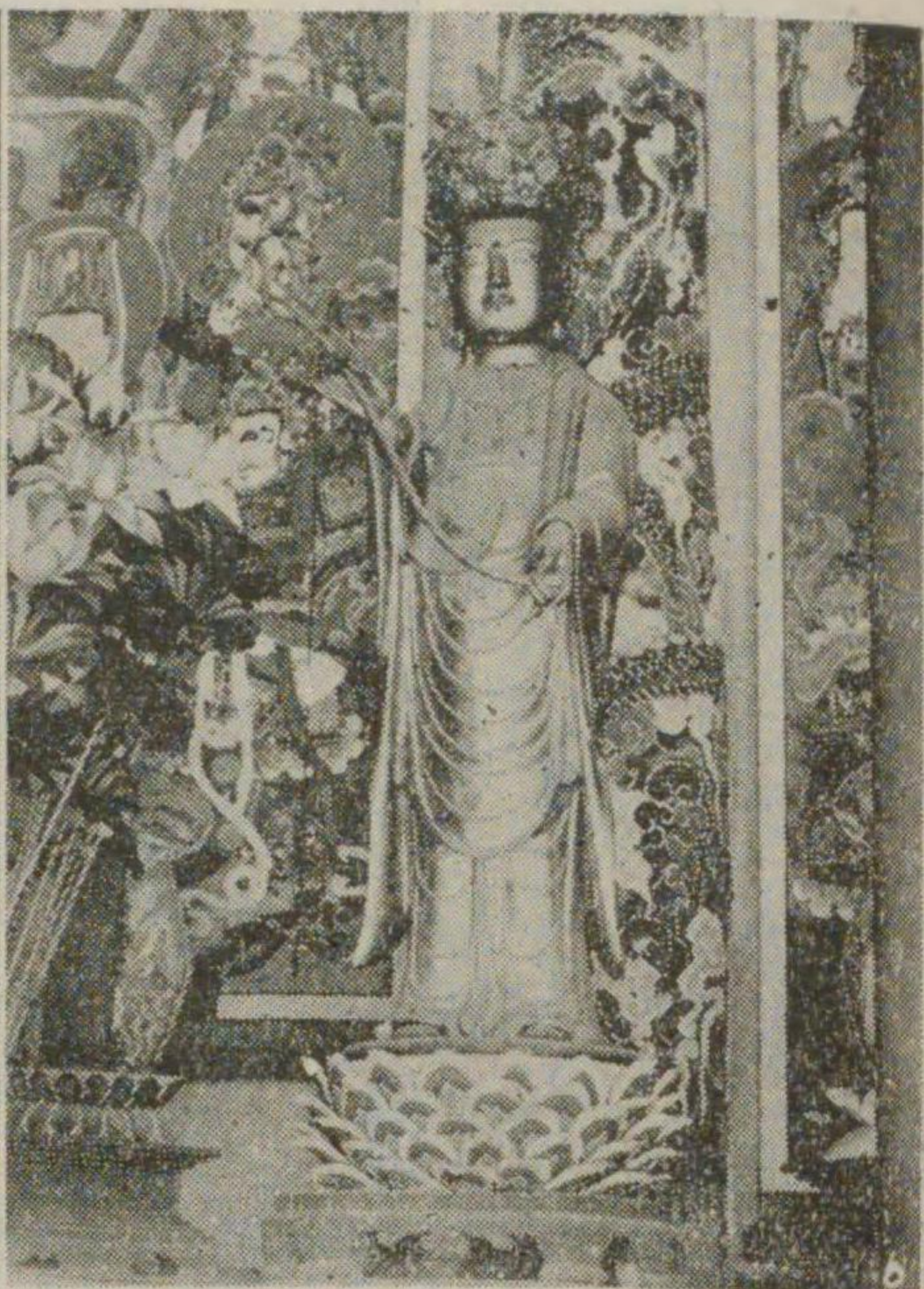
右の中・新・德・寺・の・銅・造・觀・世・音・菩・薩・像は像底に刻銘ありて宣徳元年に鑄成されたことが明かであり面相
温麗にして姿勢もよく齊ひ化佛をあらはせる寶冠を戴き胸及び腰に璣珞を懸けてゐる。實に李朝初期
に於ける小品の上乗なるものである。海印寺大寂光殿内安置の木造毘盧舍那佛坐像及同寺法寶殿木造

扶	寧	報	同	河	全	金	靈	日	靈	羅	襄	同	同	高	同
餘	邊	恩		東	州	堤	巖	本	巖	州	陽			敬	
無量寺極樂殿造彌陀三尊像	普賢寺大雄殿木造菩薩像	法住寺大雄殿三尊佛像	同 菩薩像四軀	双溪寺大雄殿佛像三軀	松廣寺大雄殿釋迦藥師彌陀三佛像	金山寺彌勒殿彌勒佛像及兩脇侍像	道岬寺大雄殿三尊佛六光菩薩像	淨明院石造釋迦文殊普賢像	道岬寺解脫門文殊普賢像	尋香寺木造釋迦坐像	洛山寺銅造着彩觀音坐像	兜率庵兜率天內院宮銅造坐佛像	同 藥師殿石造藥師坐像	同 鐵堂寺大雄殿銅造藥師(?)坐像	同 大寂光殿木造毘盧舍那佛像
後	後	後	同	仁	康	後	後	初	初	初	初	初	初	初	同
期	期	期		祖	熙	期	期	期	期	期	期	期	期	期	
				朝											
					四										同
					六										
						肅									
						宗									
							三								
							三								
								清							同
								康							
								熙							
									四						
									六						
										一					
										七					
										〇					
										七					

毘盧舍那佛坐像は形式手法全く同一なれば同時に同じ技術家の手に成つた者であらう。此等は成宗朝藏版庫(即ち法寶殿)の再建されし時新たに造られた者であらう。姿勢莊重にして温雅の裡自ら悔り難き威容を具へ衣文の線條勁健にして一絲紊れず誠に現存李朝佛像中の最傑作を以て目すべきものである。高敞禪雲山懺堂寺大雄殿銅造佛坐像は頭巾を被り佩釧を着け袈裟を纏ひたる形相他に類を見ず。何佛なるや不明なれども面相雄麗姿勢衣文の手法共に觀るべきものである。後世の補彩の爲め美質を損せしは惜むべきである。又同寺藥師殿石造佛像是藥師と稱すれども或は地藏か。圓珠を右手に捧げてゐる。姿勢もよく整ひ技工も勝れてゐる。同じ禪雲山上兜率菴内院宮にある銅造佛坐像は前記懺堂寺大雄殿内の佛像に似て亦頭巾を被り佩釧を着け袈裟を纏ひ右手釋杖の如き者左手輪寶を持つてゐる。相好端麗姿勢莊重特に衣文の線條勁健を極めてゐる。恐らくは李朝初期を飾るべき傑作であらう。洛山寺銅造着彩觀世音菩薩坐像は或は世祖朝七重石塔と共に造られし者か。前者に譲らざる傑作にして面相は後世の補彩の爲多少其美を損せしも諦視すれば慈容猶掬すべく精巧なる技工を施せる寶冠を着け兩手を膝上に重ねて寶瓶を持ちたる姿勢自ら莊嚴に衣文の曲線自由にして而も適勁細巧なる佩飾華麗なる着彩と相待ちて李朝初期に於ける彫刻術の進境を語つてゐる。羅州尋香寺の木造釋迦坐像亦初期の作にして自在無碍なる衣文の妙を示してゐる。道岬寺解脫門内安置の木造文殊普賢像亦初期を下ら

ざる者であらう。内地三重縣津市の淨明院にある石造釋迦文殊普賢の像亦初期の者なるべく何れも面相温和にして衣文は頗る穩健の手法から成つてゐる。

第百三十三圖 普賢大雄殿菩薩



第百三十四圖 金山寺彌勒



後期の者には優作を以て稱すべきは少い。金山寺彌勒殿安置の木造彌勒三尊の立像は彌勒殿の再建と同時に造られたるべく本尊高さ約三十尺脇侍佛高さ約二十五尺實に後期に於ける大作にして又優作である。法住寺大雄殿安置の釋迦三尊佛は高さ各約十五尺面相姿勢共に觀るに足るべき者である。道岬寺大雄殿・双溪寺大雄殿・松廣寺大雄殿・無量寺極樂殿安置の佛菩薩像亦當期の佳作にして特に普賢寺大雄殿木造菩薩像は恐らくは建物と同時即ち乾隆頃の作なるべく其姿勢のよく整ひたる其風采の温麗なる實に後期の優作を以て目すべき者であらう。

繪 畫

各道到る處の佛殿内には必ず大小の佛菩薩等の畫幀を掲げてゐる。其全部は李朝後期に屬し描法纖細傳彩鮮麗なれども或は輕浮纖弱に失し或は疎拙卑俗に流れ眞に賞讃に價する者はない。其中稍觀るべきは

扶餘	無量寺彌勒畫像大幅	仁祖	五	明天啓	七	寬永	四	一六二七
晉州	青谷寺釋迦畫像大幅	景宗	二	清康熙	六一	享保	七	一七二二
金泉	双溪寺盧舍那佛畫像大幅	英祖	一七	清乾隆	六	寬保	元	一七四一
寧邊	普賢寺大雄殿佛畫	英祖	四一	清乾隆	三〇	明和	二	一七六五

等に過ぎず。何れも後期を代表すべきものにして而も當時の佳作である。特に無量寺彌勒畫像は畫面の長さ四十五尺八寸廣さ二十五尺二寸五分、双溪寺盧舍那畫像は畫面の長さ四十七尺一寸五分廣さ二十三尺五寸、共に結構壯大にして描法亦觀るべく傳彩尙鮮麗現存朝鮮に於ける大作にして其大きに於ては支那にも内地にも之に比すべきものはなからう。此他李朝初期の優秀なる佛畫にして内地に來りて保存されてゐる者が少くない。其主要なるは

三重	西來寺圓覺曼荼羅	初期	明弘治	?				
香川	屋島寺觀音畫像	初期	明嘉靖	三七				一五六一
愛知	七寺地藏曼荼羅畫像	明宗	明嘉靖	四〇	永祿	四		一五六一
和歌山	高野山圓通寺絹本金泥藥師會圖	明宗	明嘉靖	四三	永祿	七		一五六四
愛媛	石手寺麻布釋迦十王等圖	宣祖	明隆慶	六	元龜	三		一五七二
和歌山	高野山常喜院藥師曼荼羅	宣祖	明隆慶	一六	元龜	三		一五七二
兵庫	藥仙寺絹本着色施餓鬼圖	宣祖	明萬曆	一七	天正	一七		一五八九

西來寺圓覺曼荼羅は釋迦彌勒を中心として多くの佛菩薩を描けるもの細巧緻密の筆意より成つてゐる。屋島寺絹本着色觀音畫像は巖頭に踞せる觀音の左右に童男童女を寫し上に天部の如き者を描き彩色を施したれども巖及び其傍に書き添えたる竹は墨畫である。約四五百年前の者であらう。七寺地藏曼荼羅は五鋪の布に畫きしものにして中央地藏寶座上にあり左右に多數の眷屬菩薩等を寫し上方にたなびき擴がりたる瑞雲をあらはし頗る纖麗なる筆を用ひてゐる。高野山圓通寺藥師會圖は聖烈仁明大妃が明宗王の爲めに茶地に金泥を以て描かじめしもの細線の上に割合に達者に揮灑したれどもあまり優作でない。石手寺着色釋迦十王等圖は麻布の上に畫きし者にして釋迦を中心として十王地藏等の圖を作る極めて粗拙の者である。高野山常喜院藥師曼荼羅は粗布の上に畫きし者細巧の描法蓋鮮初の優

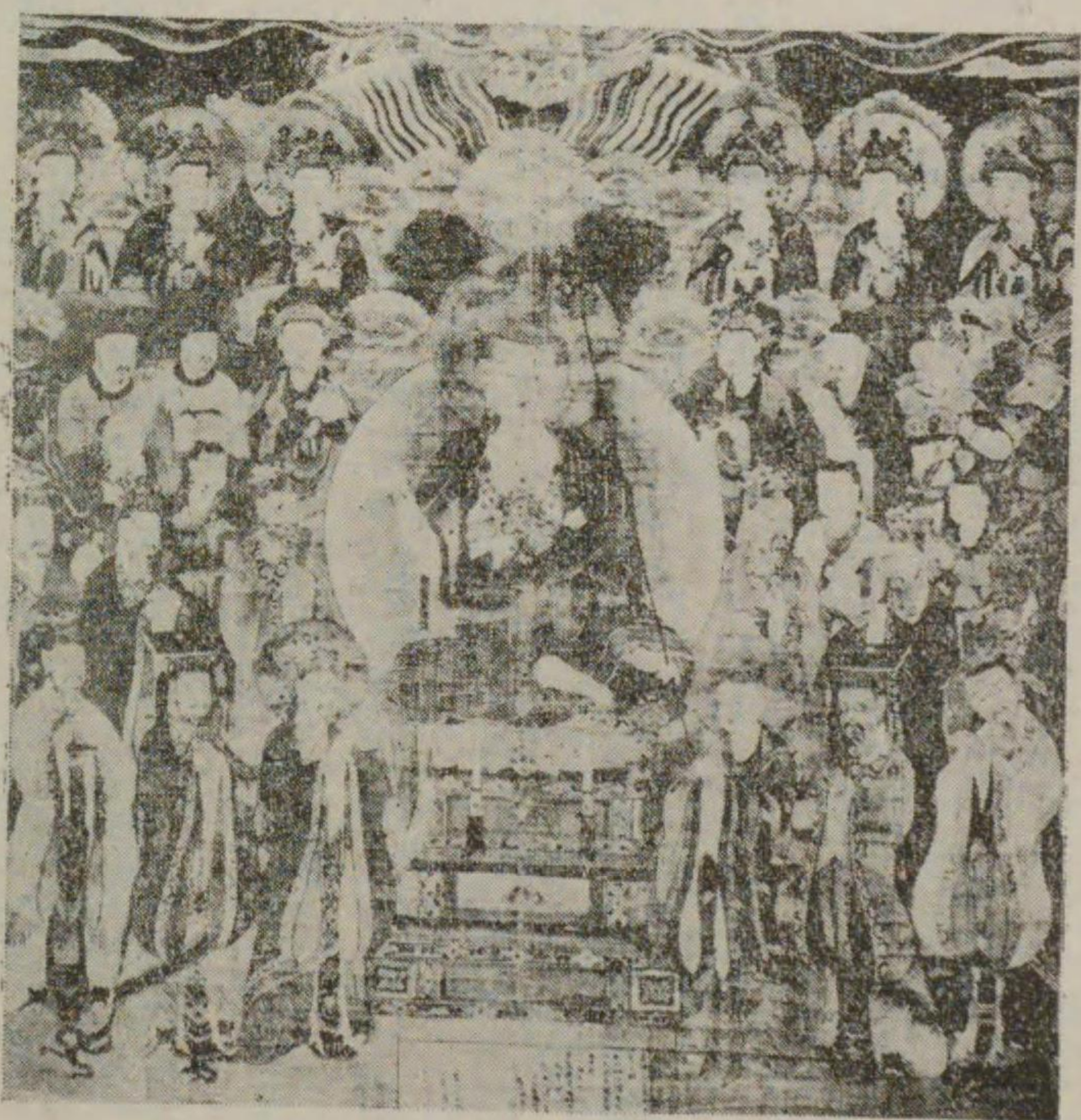
品であらう。兵庫藥仙寺施餓鬼圖は余はまだ見たことが無いから説明を省く。此他猶余の見るに及ば

第二百三十五圖



普賢寺大雄殿佛畫

第二百三十六圖



七寺地藏曼陀羅

ざる者は相當に保存されてゐるやうである。要するに鮮初の佛畫は前代の所謂張思恭風の典型を逐ひ観るに足るべきものもあつたが後期に入りては細巧餘りありて筆力之に伴はず終に衰運を挽回するこゝが出来なかつたのである。

佛畫以外の者には山水・道釋人物・花鳥の類最も多く特に肖像畫には特殊の發達を示してゐる。又風俗畫にも往々觀るべき者がある一般に初期の者は宋元の餘流を斟み又明畫の影響を受けて筆力豪宕當時の支那日本の畫に接踵せんとする者無きにあらずれども其遺存せる者少く特に筆者の明確なる者甚だ稀なるを以て當時繪畫の真相を捕捉せんこと頗る困難である。後期に入りて國勢の陵夷と政争の混亂とは復士人に趣味に活き風雅を弄ぶの餘裕を與へず繪畫は徒らに儒流の餘技に過ぎざる者となつた。それでも往々頭角を露はし李朝後期のために氣餒を吐いた者もある。

余は李朝の繪畫につきまだ充分の研究を試みて居らぬ。唯總督府博物館及び李王家博物館並び二三の蒐集家の所藏を一覽したのみである故に其論する所必しも正鴻を得て居ることは思はぬ。是れは豫め讀者に斷つて置く。今左に余の見し者の中より李朝繪畫の重要な者を表示し次ぎに多少の記述を試みようと思ふ。

朝鮮時代繪畫

初期

略符

〔總博〕朝鮮總督府博物館
〔李博〕李王家博物館

作者 號 生 歿 年 名 稱 所 藏 者

安 堅	玄洞子	世宗元一	絹本淡彩夢遊桃源圖	園田才治氏
姜希顔	仁齋		絹本墨畫雪天圖	李 在杓氏
			絹本淡彩山水圖	朴 在杓氏
			絹本墨畫寒山拾得圖 二幅	同 同
			絹本墨畫橋頭烟雨圖(傳)	同 同
			絹本着色人物山水圖斷片(傳)	同 同
			紙本墨畫龍圖	同 同
石 敬	學圃		絹本墨畫山水圖	同 同
李上佐			紙本淡彩山水圖	同 同
			絹本着色松下步月圖	同 同
			絹本墨畫觀音圖	同 同
			絹本墨畫羅漢圖	同 同
			絹本墨畫月光菩薩圖	同 同
			絹本墨畫月夜雪山山水圖	同 同
			絹本墨畫夏山暮雨圖	同 同
			紙本墨畫紫鯉圖	同 同
			紙本墨畫松下對坐圖	同 同
			紙本墨畫高士逍遙圖	同 同
			紙本着色蘆岸鳧鴨圖	同 同
			絹本墨畫曳杖逍遙圖	同 同
金 禔	養松堂	中宗七—明宗一四	絹本墨畫葡萄圖(傳)	同 同
申夫人	思任堂		絹本墨畫湖石聳翠圖	同 同
			同 湘江夜雨圖	同 同
			紙本墨畫竹圖 八幅	同 同
			紙本墨畫竹圖	同 同
			絹本墨畫竹圖	同 同
			絹本淡彩松壇步月圖	同 同
			紙本淡彩山水圖	同 同
			絹本淡彩觀瀑圖	同 同
			絹本淡彩山水人物圖	同 同

後 期

黃執中	影谷	中宗二八— 中宗三六—	絹本墨畫葡萄圖(傳)	同 同
李 霆	灘隱		絹本墨畫湖石聳翠圖	同 同
			同 湘江夜雨圖	同 同
			紙本墨畫竹圖 八幅	同 同
			紙本墨畫竹圖	同 同
			絹本墨畫竹圖	同 同
			絹本淡彩松壇步月圖	同 同
			紙本淡彩山水圖	同 同
			絹本淡彩觀瀑圖	同 同
			絹本淡彩山水人物圖	同 同

尹 毅立	月潭	明宗三一—	絹本着色山水圖(傳)	李 總博
李成吉	滄州	明宗一七—	絹本墨畫山水圖(傳)	同 同
魚夢龍	雪谷	明宗二一—	絹本着彩武夷九曲圖卷軸	同 同
			絹本墨畫梅圖	同 同
			絹本墨畫水中梅圖	同 同
李繼祐	休々堂	宣祖七一—	絹本墨畫山水圖(傳)	李 總博
李 楨	懶翁	宣祖一一—四〇		同 同

劉淑 蕙山 純祖二七一李太王二〇
趙重默 雲溪

絹本着彩樹下獨酌圖
絹本淡彩花鳥圖十幅屏風
絹本淡彩山水圖 二幅

李 李 博
李 乘 直 氏
和 田 一 郎 氏

先づ初期に出でし大家を擧ぐれば安堅、崔涇、姜希顔の三人である。安堅字は可度、玄洞子と號す。最も山水に長ず。園田才治氏藏夢遊桃源圖は安平大君が彼に命じて夢中觀る所の桃源圖を描かせしものにして千峯萬岳參差交錯し溪流飛瀑其間に隱見し桃林には特に花を朱にして金心を點するなど頗る細密の手法より成る。氣象高古郭熙の風神を得てゐる。猶安平大君の題跋の外朴彭年、金宗瑞、崔恒、申叔舟、徐居正、成三問、金守温など當時の名臣碩儒二十許人の跋を有するは錦上添花を添えしものにして彼の作として最も正確に且最も代表的の大傑作である。李王家博物館藏雪中山水圖は彼の作と傳へられ小品なれども筆力逸宕頗る觀るべきものである。

崔涇字は思清、謹齋と號す。當時安堅と名を齊くし最も人物に長じてゐた。姜希顔字は景愚、仁齋と號す。詩書畫共に妙三絶と稱せられ天機高妙山水人物共に優れ一時に獨歩した。朴在杓氏藏絹本墨畫山水圖は高然暉に似て氣象宏遠墨色淋漓實に比類希なる傑作である。同氏藏絹本墨畫寒山拾得圖は牧溪風の減筆を用ひて豪放雄拔の風格驚嘆に値する。李王家博物館藏絹本墨



第百三十七圖
仁齊筆山水圖

畫橋頭烟雨圖及び着色人物山水圖は彼の筆と傳へられ小品なれども豪勁の筆致を示してゐる。

降つて中宗朝には石敬、李上佐、李巖、申潜、李不害等が輩出した。



第百三十八圖
安堅筆雪天圖

石敬は安堅に學び最も人物及び竹を善くした。李王家博物館藏紙本墨畫龍圖は洵湧たる波濤の上巻き上がる雲の中に頭首を露はせる所頗る豪健の筆力を示してゐる。

李上佐字は公祐、學圃と號す。實に李朝初期の巨匠にして山水人物一時に冠絶した。元と士人某の奴であつたのを中宗特に命じて之を贖はしめ圖書署に

屬せしめられた。特に中宗の聖容、功臣の肖像及び劉尙の列女圖皆入神の筆と稱せられた。横田五郎氏藏絹本墨畫山水圖は小品なれども氣韻尤も高古である。總督府博物館藏山水圖は畫格之に近く頗る



圖九百三十九 龍筆敬石

細密の筆を用ひてゐる。李王家博物館藏松下歩月圖は筆力逸奇を極めてゐる。同館藏大幅墨畫觀音圖は朴在杓氏の寄贈にかゝり同氏藏羅漢圖及び月光菩薩圖と共に同手に出で豪宕勁拔の筆力驚くべきものがある。又同氏藏月夜雪中山水圖は減筆法を用ひて簡勁豪宕の風骨を發揮してゐる。絹質といひ筆致といひ前記觀音以下の諸作は同一手に成りしことは明かである。

以て有名である。

李巖字は靜仲、杜城令を授けられた。毛益を學びて花鳥猫狗を畫いて有名であつた。

李不害字は太綏、該博工緻安堅に亞ぐと稱せられた。李王家博物館藏絹本墨畫曳杖逍遙圖は小幅なれども畫格高逸彼の一面を見るべきものである。

次に明宗朝には金禔、申夫人、黃執中、李震、李慶胤等最も著はれた。金禔字は季綏、養松堂と號す。畫品絶妙人物、山水、牛馬、翎毛、草蟲、皆精妙ならざるはない。李王家博物館藏絹本墨畫夏山暮雨圖は小幅なれども其高逸の風格を髣髴することができる。

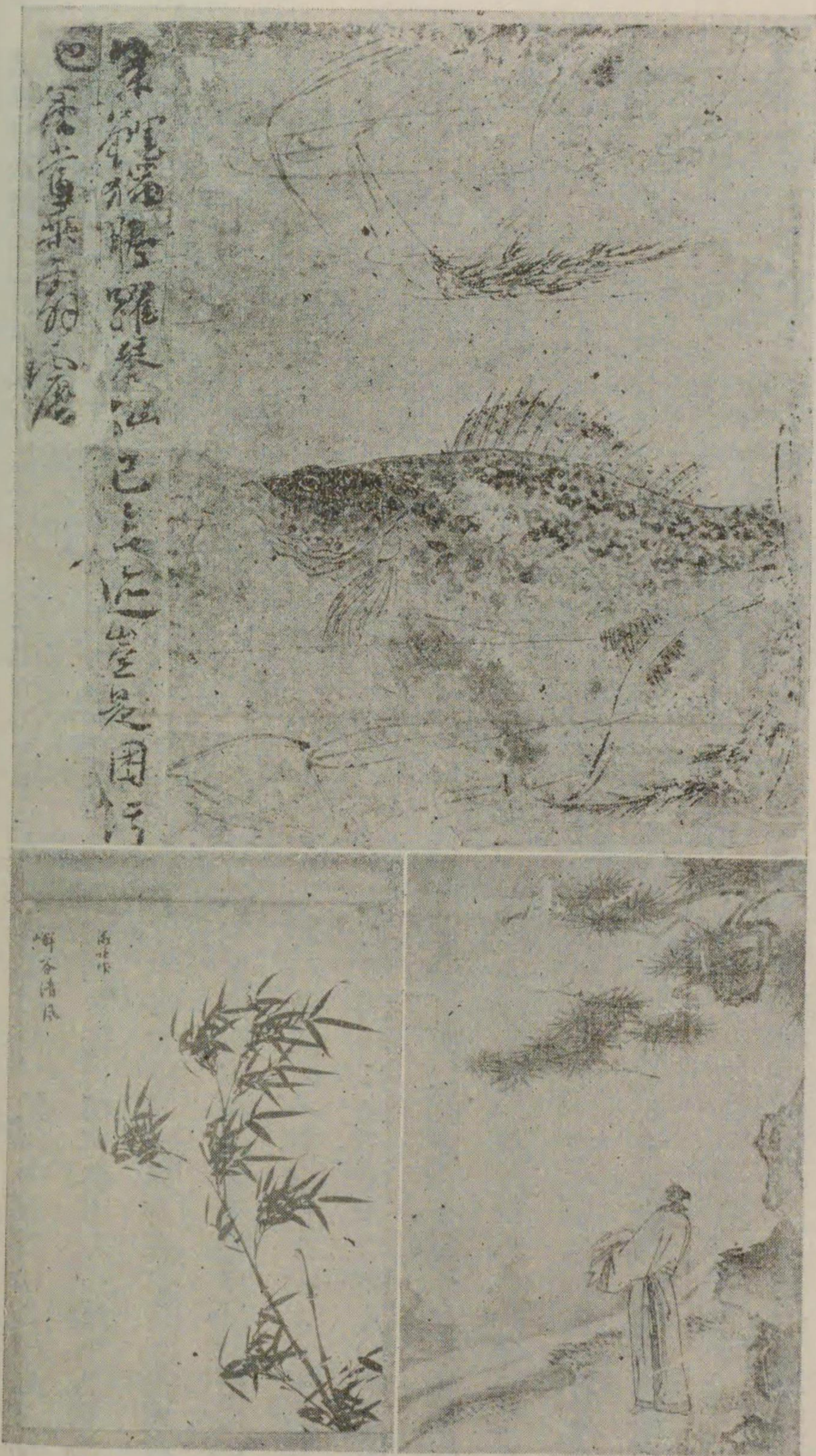
申夫人は思任堂と號す。一に媿姪堂又師姪堂とも稱した。鴻儒李珥(栗谷)の母にして博く古今に通じ、



圖四百四十四 山水筆上李



圖四百四十一 漢羅



圖三十四百二第
圖月步壇松筆胤慶李

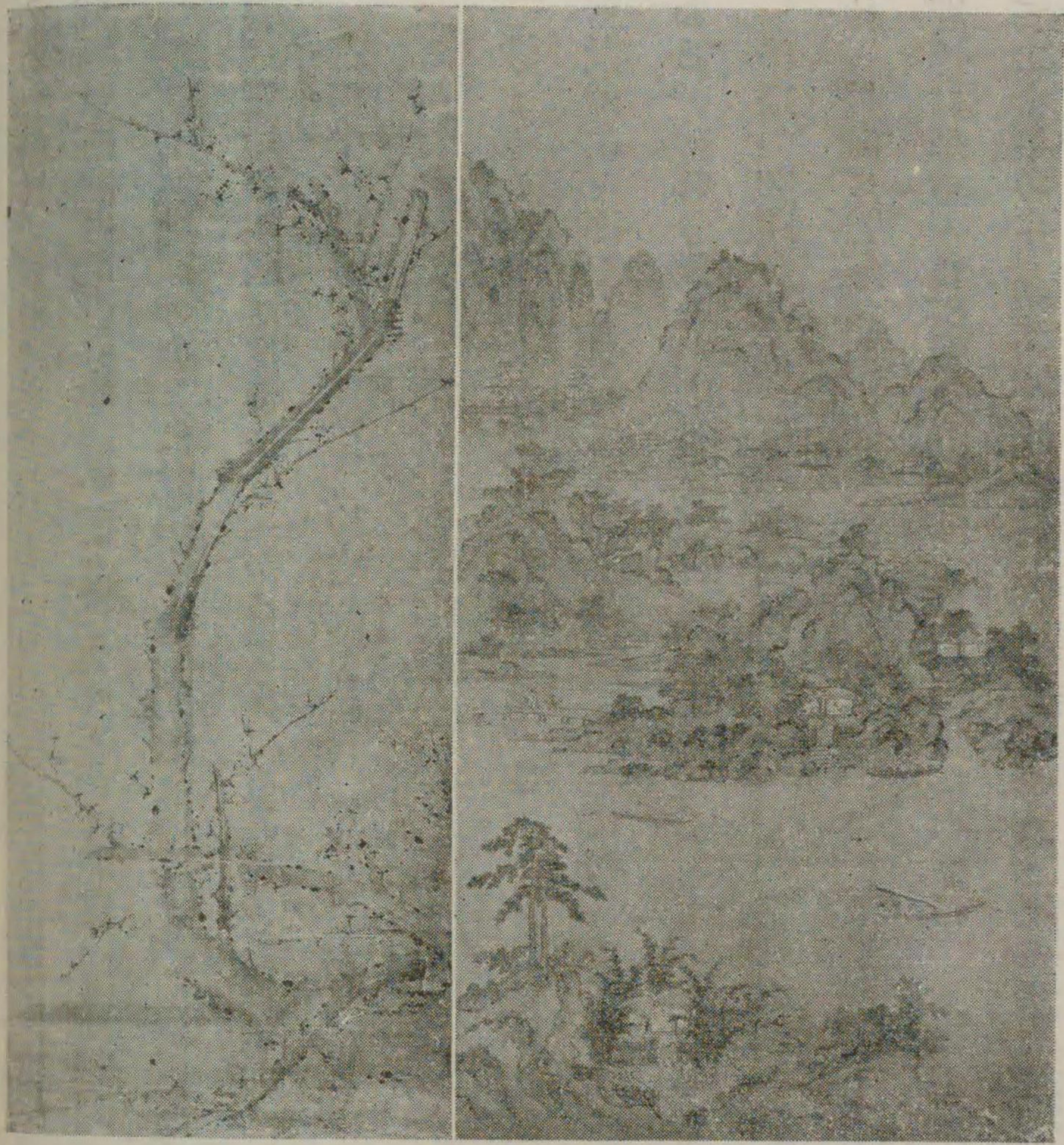
圖四十四百二第
圖竹筆霆李

山水を善くし葡萄・草蟲に巧みであつた。實に李朝閨秀畫家の第一人者である。羅重鎬氏藏紙本墨畫紫鯉圖は畫格高古其子栗谷の贊を添えて其最も正確なる代表作である。石潭書院藏紙本墨畫松下對坐圖及び高士逍遙圖の如きは雄勁高雅巾幗者流の筆としては驚嘆すべきものである。李王家博物館藏紙本着色蘆岸鳧鴨圖は眞否知るべからざれども細巧自由の筆亦凡作にあらざるを思はしめる。

黃・執・中・字は時望、影谷と號す。最も葡萄を善くす。李・霆・字は仲燮、灘隱と號す。石陽正を授けらる。最も墨竹を善くす。總督府博物館及び李王家博物館藏する所の墨竹圖は竹の各種の姿態を寫して頗る其妙を極め而も氣品に於て勝れてゐる。李・慶・胤・字は季吉、駱坡と號す。鶴林正を授けらる。畫品孤高蕭散山水を善くし兼ねて人物、牛馬、翎毛に巧みであつた。總督府李王家博物館彼の作數種を藏してゐるが何れも元人の流れを汲みて筆意高逸にして豊かなる情趣をあらはしてゐる。

後期の初頭を飾る者は先づ宣祖朝に尹毅立、李成吉、魚夢龍、李繼祐、李禎がある。尹毅立字は止仲、月潭と號す。總督府及李王家兩博物館に藏する者何れも彼の筆と傳へ筆力雄健同一手に出てゐる。所傳は恐らくは事實に近からう。李・成・吉・字は德哉、滄洲と號す。李王家博物館藏武夷九曲圖卷軸は萬曆二十年の作、構想變化に富み筆力雄勁なれども布置に慊らざる所あるを覺ゆる。

魚・夢・龍・字は見甫、雪谷と號す。墨梅を善くするを以て名を一世に擅にす。或は李霆の竹と並び稱せ



第二千四百五十四圖
李澄筆山水圖

第二千四百六十四圖
魚夢龍筆水中梅圖

られ或は黃執中の葡萄と併せて三絶と稱せられ李王家及び總督府の兩博物館藏墨梅圖は剛健逸宕其盛名に忤かざるを思はしめる。

李繼祜休々堂と號す。一に休堂又休翁と稱す。最も葡萄を善くす。總督府博物館藏月夜葡萄圖は筆力蒼潤勁健彼が古來葡萄畫家の稱首と稱せらるゝは當然であらう。李禎字は公幹、懶翁と號す。特に山水畫及び佛畫に長じてゐた。更に下つて仁祖朝に至れば

李澄、趙涑、金明國最も名を得てゐる。李澄字は子涵、虛舟と號す。李慶胤の庶子にして兼ねて各體に長じ青綠山水、金碧山水等頗る精緻の圖を作つた。李王家博物館藏遊艇訪芳圖及び雲峯江閣圖は彼の作と傳へられ雍容の趣あれども多少緊束を欠くの憾がある。總督府博物館藏絹本墨畫山水圖は小品



第二千四百七十四圖
恭齋筆人物圖

なるだけよくまとまつてゐる佳作である。同館藏竹禽圖も秀潤觀べきものである。

趙涑字は景溫、滄江と號す。梅竹、翎毛、山水を善くした。總督府博物館藏墨梅圖は筆力剛健魚夢龍に迫つてゐる。又双禽圖も頗る瀟脱高雅の風格を示してゐる。

金明國字は天汝蓮潭と號す。圖書署教授となる。其畫法前人の跡を踏まず自ら法度の外に恣にす。山水、人物を善くし筆力勁健なれども徒らに氣を尙び精到の妙を欠くといはれてゐる。李王家博物館藏絹本着色觀瀑圖及び圍碁爭鬪圖は彼の長所短所を暴露せるものである。



第百二十四圖 金明國筆觀瀑圖

孝宗朝に許穆がある。

字は和甫、眉叟と號す。

篆籀を善くし傍ら畫を描

く。李王家博物館藏墨竹

圖は其高古の風格を窺ふ

ことができる。

顯宗朝には金埴出で、

山水を善くし又好んで千

を描いた。字は仲厚、退

村と號す。總督府博物館

藏牛圖は牝牛が兒を伴ひ

水を渡る所を寫し暢氣に

して多少の稚氣を帶ぶる

所に却つて面白味があ

第百四十九圖

謙齋筆山水圖



第百五十五圖

趙榮祐筆松下箕踞圖

る。
 肅宗朝には一尹斗緒あり。當時畫壇寂寥たる間にあつて一代の大家を以て許された。尹斗緒字は孝彦、恭齋と號す。書畫共に之を善くす。特に人物動植に巧みであつた。總督府博物館藏老僧圖は筆勢稍豪放に過ぎたれども朴在杓氏藏騎馬人物圖は春風柳眼を吹く處手綱を引き締めて逸り立つ馬を御してゐる人物は頗る慎密周到の筆に成つてゐる。

英祖正祖朝は文化の復興と共に巨匠名家が輩出した。其中最も名あるは鄭欽(謙齋)・趙榮祐(觀我齋)・沈師正(玄齋)にして世に士人名畫の三齋と稱した。其他尹德熙、卞相璧、柳德章、姜世晃、崔北、鄭弘來皆錚々たる者である。

鄭欽字は元伯、謙齋と號す。最も山水に長じ朝鮮の眞景を畫きて自ら一家をなす。朴淵瀑、三釜淵瀑、金剛十二瀑等を作る。筆意蒼勁雄渾評者以て東國第一の名家と爲してゐる。總督府博物館藏瀑邊人物圖、李王家博物館藏梧陰品茗圖は以て畫格の高きを見るべく總督府博物館藏立巖圖は蒼勁なる風骨をあらはし朴在杓氏藏廬山草堂圖は結構の雄大と蒼潤の墨色を發揮してゐる。特に同氏藏關東八景畫帖は江原道の東海岸の眞景を揮灑せし優作である。

趙榮祐、觀我齋と號す。山水特に人物を善くした。而も其筆濕潤氣力に乏しく到底謙齋・玄齋に比

することができぬ。

沈師正字は頤叔、玄齋と號した。

初め謙齋に師事し後古人の畫跡を究め心境一變中歲以後融化天成工みを期せずして工みならざる所なしと稱せられ最も花卉、草蟲、翎毛に長じ特に山水に工みであつた。畫格高邁豪放縱橫揮灑皆其妙を得てゐる。實に當時第一流の大家であつた。彼の作は總督府、李王家兩博物館の外人の蒐藏中には割合に多く遺存してゐる。中に就き總督府博物館藏瀟橋尋春圖及び江上夜泊圖は彼の代表作である。同館藏墨畫牡丹圖・彩色花



第二五百一十一圖
玄齋筆山水圖



第二五百二十五圖
玄齋筆鷓鴣圖

樹草蟲圖、李王家博物館藏墨畫秋圃圖並びに朝鮮美術館藏鶻雉圖は彼の往く處として可ならざるは無き天分を示してゐる。

尹德熙字は敬伯、駱西と號す。一に蓮圃又蓮翁と稱した。恭齋尹斗緒の子にして箕裘を繼ぎ畫を善くし特に畫馬畫仙を工みにした。時人之を双絶と稱した。總督府博物館藏淡彩山水圖は結構筆致共に雄健間然する所はない。同館藏搏龍擒虎二幅對圖亦彼の代表作である。朴在杓氏藏馬圖は彼の得意の作ならんも墨色薄く筆法細密にして稍軟弱に失してゐる。

卞相璧字は完甫、和齋と稱す。畫員にして善く猫を畫く。時人之を卞怪様と稱した。又よく人物の眞を寫し國手を以て名づけられた。李王家博物館藏噪雀戲猫圖は細密精緻特によく猫の特質を寫し出してゐる。

柳德章字は子固、岫雲と號し善く竹を畫いた。姜世晃字は光之、豹菴と號す。儒流を以て墨戲をなし好んで山水四君子を畫き飄逸脫塵の風格をあらはした。崔北字は七七、毫生館と號した。山水を善くし筆意蒼鬱、玄齋に亞ぎて當時山水畫の名家である。鄭弘來、菊塢又晚香と號し特に鷹を畫くに工みであつた。

純祖朝には金厚臣、李寅文、金得臣、申潤福、金弘道、張漢宗、申緯など最も著はれた。特に金弘



圖三十五百二第
圖鷹筆來弘鄭



圖四十五百二第
圖物人筆園蕙



圖五十五百二第
圖醉扶筆齋鏡



圖六十五百二第
圖仙蕭筆道弘金

道は李朝末期の一大巨匠であつた。

金厚臣、彝齋と號す。山水、花卉、翎毛を畫き頗る細密の筆を用ひた。李寅、文字は文郁、古松流水館道人と號し山水を善くし好んで秃筆を用ひた。李王家博物館藏江山無盡圖卷軸の如きは千山萬壑市塵人馬布置錯落頗る雅健の趣を得てゐる。

金得臣字は賢輔、競齋と號す。畫員となる。玄齋、謙齋と共に三齋と稱せられた。人物、翎毛に長じ筆力悠容迫らず又仇英風の密畫を作つた。李王家博物館藏郭子儀行樂圖は即ち此種の代表作で朴在杓氏藏扶醉圖は彼の温雅鷹揚の筆致を示してゐる。

金弘道字は士能、檀園と號す。畫員となり山水、人物、花卉、翎毛を畫きて精妙の域に至り最も好んで神仙の圖を寫し又風俗畫を作つた。其畫風前人の跡を踏まず自ら一家をなし大小疏密可ならざるはなく自由自在に達者に渾灑せる妙腕は實に李朝末期の第一人者である。其李王家博物館藏蕭仙圖、朴在杓氏藏吹笙仙鹿圖は人物畫として群を抜いてゐる。朝鮮總督府博物館藏風俗畫帖は朝鮮下層社會の風俗を寫して輕妙洒脫の筆致古今を空くしてゐる。更に李王家博物館藏鬪犬圖は洋畫の影響を受けて陰影の法自ら具はり寫實の妙人をして歎賞措くこと能はざらしめる。

申潤福字は笠父、蕙園と號す。亦市井村落の風俗を寫して能く其情を得檀園に亞ぎて風俗畫一方の



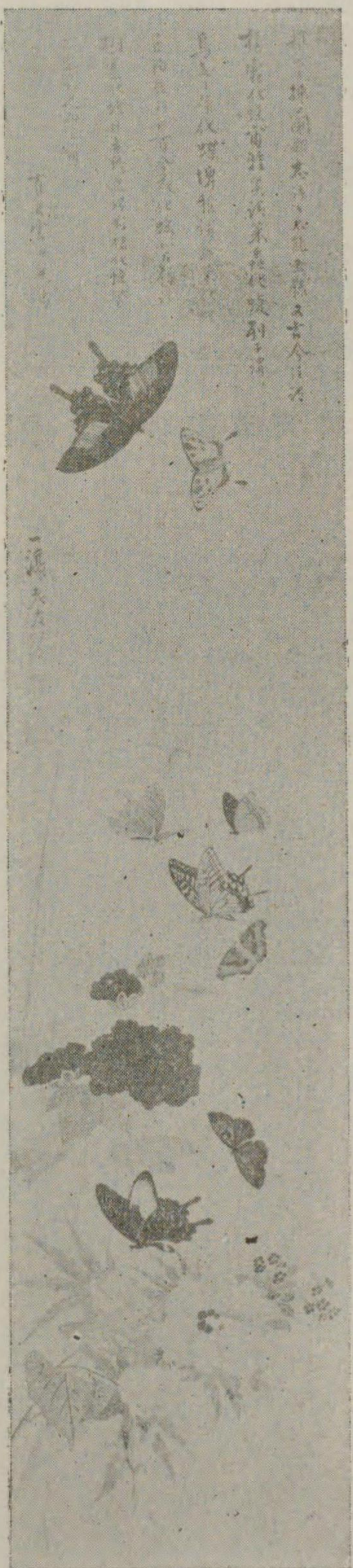
圖犬鬪筆園檀 圖七十五百二第



第二百五十八圖 檀園筆角力圖

妙手である。張漢宗字は廣叟、玉山と號す。畫員となり魚蟹を畫くに工みであつた。申緯字は漢叟、紫霞と號し詩書畫皆妙三絶と稱せられた。特に墨竹を工みにした。

第二百五十九圖 南啓字筆群蝶圖



第二百六十圖 申緯筆竹圖



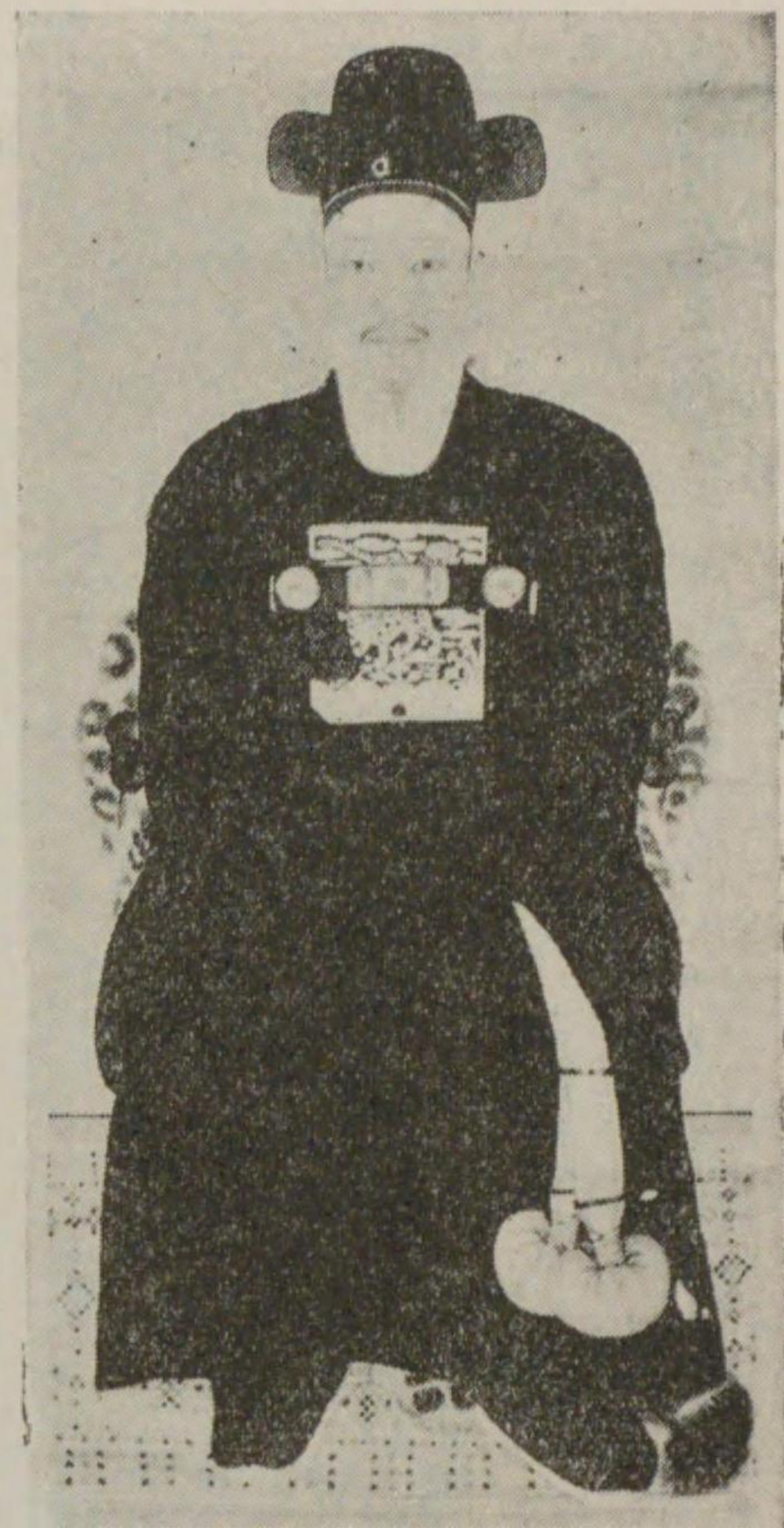
憲宗・哲宗朝は國力の陵夷に伴ひ畫壇亦多少衰頹の兆を萌した。其中著しき畫人を擧ぐれば鄭遂榮、趙廷奎、金良驥、李漢喆、許維、申命衍、南啓字、金秀哲、田琦、劉淑、趙重默等である。

鄭遂榮字は君芳、之又齋と號した。趙廷奎字は聖瑞、田琦、劉淑、趙重默等である。申命衍字は聖瑞、田琦、劉淑、趙重默等である。申命衍字は聖瑞、田琦、劉淑、趙重默等である。

と號す。檀園の子にして家風を受けて好んで神仙を畫いた。李漢喆字は子常、希園と號す。善く山水人物を畫いた。許維字は摩詰、小癡と號す。山水墨竹を善くしたが又指頭畫に工みであつた。申命衍字は實夫、靄春と號した。紫霞申緯の子にして好んで花鳥を作つたが而も氣格父に及ばなかつた。南啓字は逸少、一濠と號す。畫蝶に工みに着色濃艶頗る寫實の妙を得た。金秀哲字は士益、北山と號す。山水花卉を寫して筆致頗飄逸の趣がある。田琦字は緯公、古藍と號す。山水烟雲を作るに頗る蕭寥簡澹の筆を用ひ氣品幽情自ら具つてゐた。劉淑字は善永、蕙山と號す。畫員となつた。趙重默字は惠行、雲溪と號した。何れも山水人物を善くしたが特に趙重默は肖像に秀でゝゐた。要するに此等の畫家は何れも山水四君子の類を畫ける普通南畫家にして相當に造詣する所はあつたが特に傑出せる者はなかつた。

更に降つて李太王の時代に入れば丁學教(香壽)、洪世燮(石窓)、張承業(吾園)、趙錫晋(小琳)、金應元(小湖)、安中植(心田)等があり特に張承業、趙錫晋は優れてゐたが是等は煩を厭ひて略することとする。

李朝畫家中には肖像を善くするものが相當にあつた。是等は多くは圖畫署員に列し特に國王や王族の眞を寫すの業に従事した。其優秀なる者は丹念に繊細なる線を重ねて面貌を寫し高低凹凸自ら見は



第百六十一圖 人物像



第百二十六圖 人物像

れ氣品性格自ら具はつた。其寫美の點に於ては遠く日本畫家や支那畫家の及ばざる所であつた。余の見たる重なる肖像畫の中永興本宮なる太祖畫像・榮州紹修書院藏文忠公梧里先生畫像及び文成公安珣畫像・妙香山普賢寺酬忠祠並びに海印寺弘濟菴表忠祠なる西山松雲兩大師の畫像等は何れもよく個性をあらはせる佳作である。特に李王家博物館藏絹本着色李文忠公像及び筆者不詳の一肖像畫並びに元京城富田氏經營の陳列館藏筆者不詳の一肖像畫は眞を寫して微細遺すことなくよく其人の性格を練外に躍如たらしむるの妙味がある。

李朝畫家の手に成れる者にして早く内地

に傳來せる者頗る多く中には初期の優秀なる者もある。實際李朝初期の逸品は朝鮮に於けるよりは寧ろ内地に於て多く保存されてゐる様である。余は其一部分を知れるのみにして充分の研究を経ざれば今姑く之を省くこととする。

工 藝

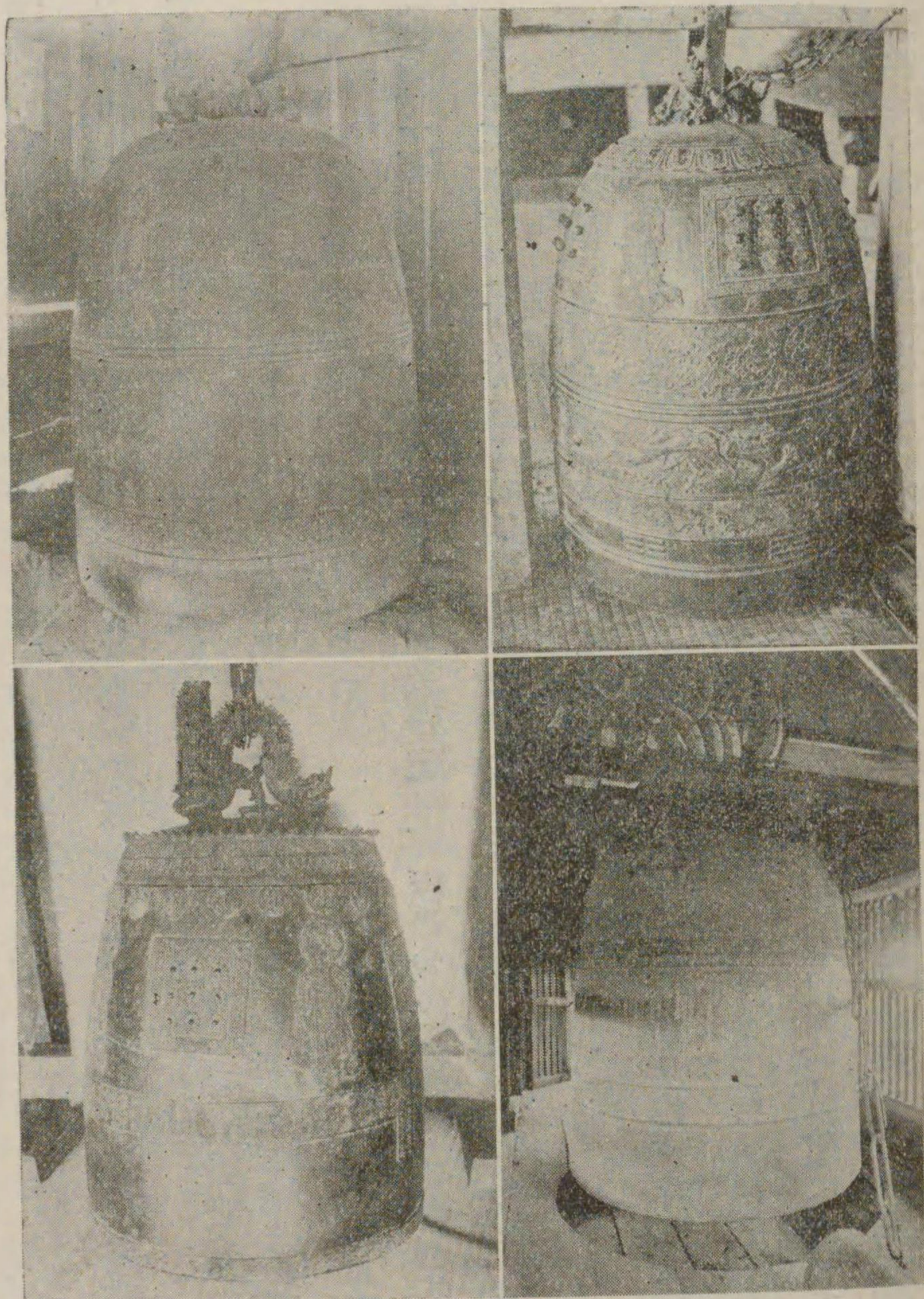
工藝品は初期に屬する者割合に少く今日遺存せる者の殆全部は後期の者といつてもよいほど初期の優品は却て内地に保存されてゐる方が多いやうである。通じて初期の者頗る優秀にして後期に入りて遽に衰頹せしこと他の建築、繪畫、彫刻と同様である。其種類を擧ぐれば金工・陶工・瓦工・木工・漆工・華角工・竹細工・染織工等である。

金工 金工の中最も重要なるは銅鐘である。銅鐘は前期を承けて初期に屬する者比較的技工優秀にして後期に至るに隨ひ次第に粗拙となつた。今其最も代表的の者を左に列擧する。

襄陽	同	京城	興天	世祖	明天順	六	寬正	三	一四六二
洛山	普信	天	寺	世祖	明成化	四	應仁	二	一四六八
鐘閣	鐘閣	鐘	鐘	元	明成化	五	文明	元	一四六九

柘木	高城	平壤	求禮	梁山	杆城	陝川
日光東照宮鐘	楡岾寺鐘	鐘閣鐘	華嚴寺雲興寺大鐘	通度寺鐘	乾鳳寺鐘閣鐘	海印寺大寂光殿鐘
仁祖	英祖	英祖	肅宗	肅宗	顯宗	成宗
二〇	五	二	三七	一二	一四	二二
明崇禎	清雍正	清雍正	清康熙	清康熙	清康熙	明弘治
一五	七	四	五〇	二五	一二	四
寬永	享保	享保	正徳	貞享	延寶	延徳
一九	一四	一一	元	三	元	三
一六四二	一七二九	一七二六	一七一	一六八六	一六七三	一四九一

李朝銅鐘の様式を見るに新羅・高麗以來の固有の手法を繼承せるものと麗時元の鑄工の手に成りし開城演福寺の鐘の影響を受けしものがある。前者に屬する者最も多くして一般に乳郭は肩帶より離れて胸部に下り乳郭間に菩薩の立像を陽刻し下方に銘字をあらはしてゐる。其旗挿を有せる龍頭も肩帶口帯に施せる草花の文様も麗時の者に比すれば技巧稚拙觀るに足らざる者となつた。通度寺鐘・乾鳳寺鐘閣鐘・華嚴寺雲興寺鐘・平壤鐘閣鐘及び日光東照宮鐘は何れも固有式をあらはせる者にして平壤鐘閣の鐘は技工粗なれども大作である。日光東照宮の鐘は仁祖が特に東照宮に寄進せし者で當時の者としては頗る優秀の方である。又後者に屬する者には割合に勝れたる者が多い。京城興天寺鐘は元景福宮光化門樓上に在つたが今移されて李王家博物館の所藏に歸した。其龍頭の様式と胸部に波文を有せる帶を繞らせるとは元式に出で乳郭と立菩薩像とを有せるは固有式の名残である。京城普信閣大鐘



圖五十六百二第
鐘寺山洛
圖六十六百二第
鐘寺鳳乾

圖三十六百二第
鐘寺印海
圖四十六百二第
鐘寺天興

は口徑七尺五寸三分全高十二尺五寸慶州奉德寺鐘と共に朝鮮に於ける銅鐘の兩大關である。而も龍頭外何等の裝飾もなく形態も美でない。洛山寺鐘は様式殆ど興天寺鐘に同じく技巧も伯仲の間にある。海印寺大寂光殿の鐘は形態小なれども富麗の裝飾洗練の技工實に李朝梵鐘中の雄である。胸部には乳郭間に立菩薩をあらはし胴部に見事な草花文様雲龍波濤文八卦圖を層々浮彫にしてゐる。楡岾寺鐘は更に小なれども體の上部に梵字を散らし下部に雲龍を繞らせる技工は殆ど前者に接踵するに足つてゐる。

其他の金工は銅器には水盤・火鉢・燭臺・香爐・鏡などがあつて往々毛彫・透彫・浮彫等を施して裝飾としてゐる。又鐵製品には花瓶・尊・筆筒・書鎮・藥盒・灰落盤などがあり何れも其表面に銀の鍍象嵌にて紗綾形・七寶つなぎ等の文様を作り又瑞鹿・蝙蝠・草花をあらはしてゐる。

瓦工 初期の瓦當文様は巴瓦には蓮花・鬼面・梵字・鳳凰などを用ひ唐草瓦には一種の草花文や蟠龍文などを用ひた。稀れには稍觀るべき者ありしも一般には技工粗漫に流れ遠く麗時の者に及ばなかつた。特に後期に入りては一層墮落し瓦工は最早彼等の興味を以つて製作に従事するものなく益拙惡の者となつた。巴瓦は後期に入りて圓形より卵形となり唐草瓦は前時代元式の繼續によりすべて瓦面が三ヶ月様に下に垂れ下る様になつた。又好んで製作の來由年號などを記入することゝなつた。

大棟の兩端には宮殿城門等には鸞頭を上げ下棟には雜像を並べ頗る屋蓋の輪廓を賑かならしめた。是は全く支那の影響であるが一體に手法粗放にして頗る滑稽味を帯びてゐる。又宮殿内には稀れに碧料瓦を葺く者もあつた。

陶工 陶磁器は高麗時代に於て異常の進歩を見たが當代に入りて其形狀に於ても其手法に於ても一轉化を示すことゝなつた。大體に於て青瓷・白磁・染付の三種類に分けることが出来る。青瓷は麗時の者に比すれば其鮮かなる碧色を失ひて灰黄色又は灰青色の者となり象嵌は所謂三島手と稱する者に變つて往つた。三島手には曆手及び花三島の別あり色々の文様を滿遍なく型押しして之れに白土を嵌入し釉藥を施した者で麗時の洗練を缺きしも自ら温雅の心持をあらはすことゝなつた。又彫三島と稱して表面に大様に文様を陰刻するものもあり刷毛目と稱して白繪を刷毛で大膽に塗布したものもあり更に繪三島と稱し繪高麗の名殘で鉄釉を以て粗大な文様を畫いたものもあつた。是等各種の三島手は主として初期に多く行はれた。白磁には帶青色・帶灰白色最多く乳白色のものもある。素文・浮彫・透彫の別があり浮彫には草花・魚蝦等を透彫には往々蓮花・卍字等を應用してゐる。又特に注意すべきは鉄釉・眞砂釉を用ひて極めて大膽に龍や草花などを揮灑せるものである。此等の白磁器は特に初期より後期の初めにかけて盛に行はれたやうである。又染付の法は既に初期に明から傳へられたが吳須の原料

圖七十六百二第



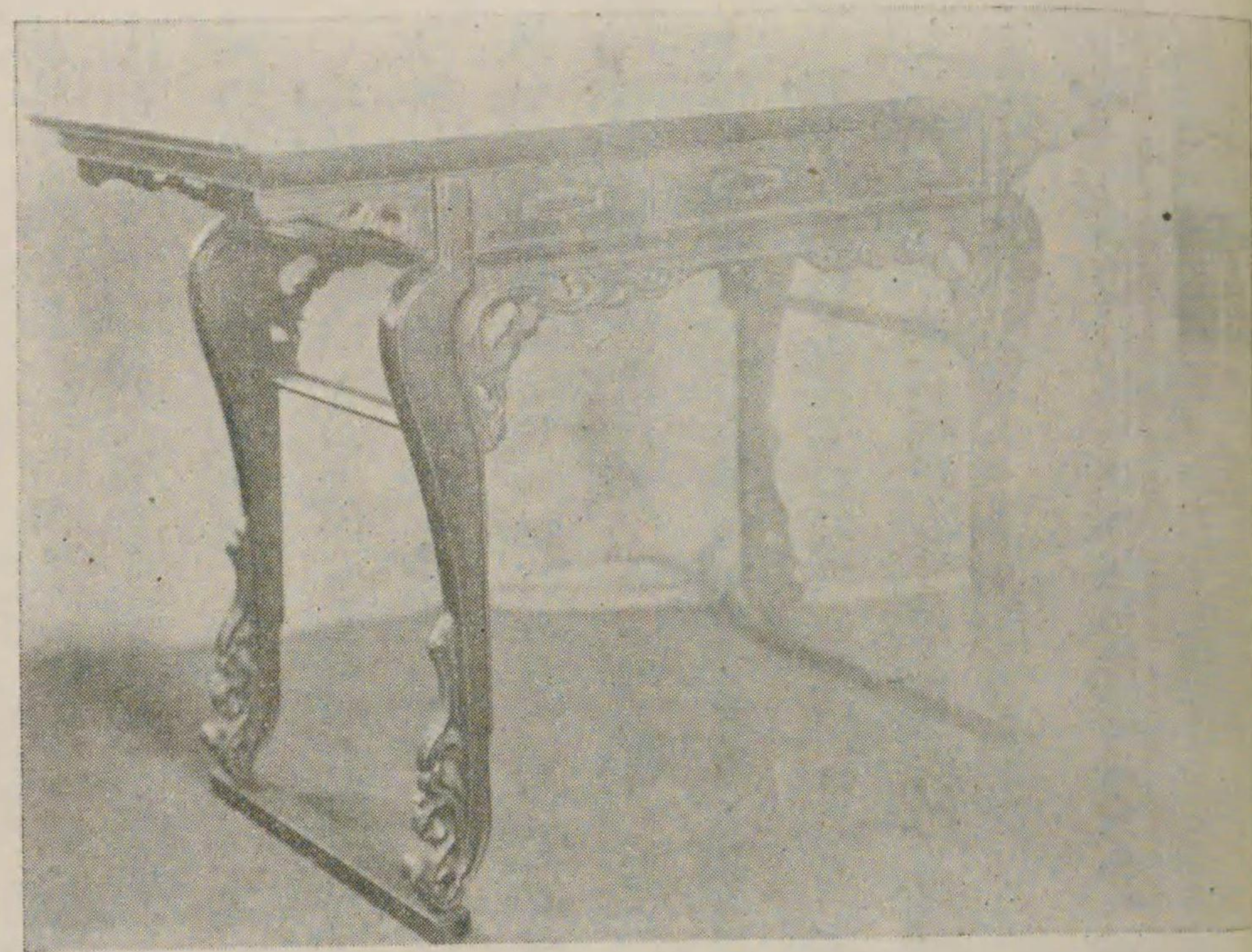
一 彫白
三 鉄
鳥 釉

三 三
三 繪
鳥 手
鳥

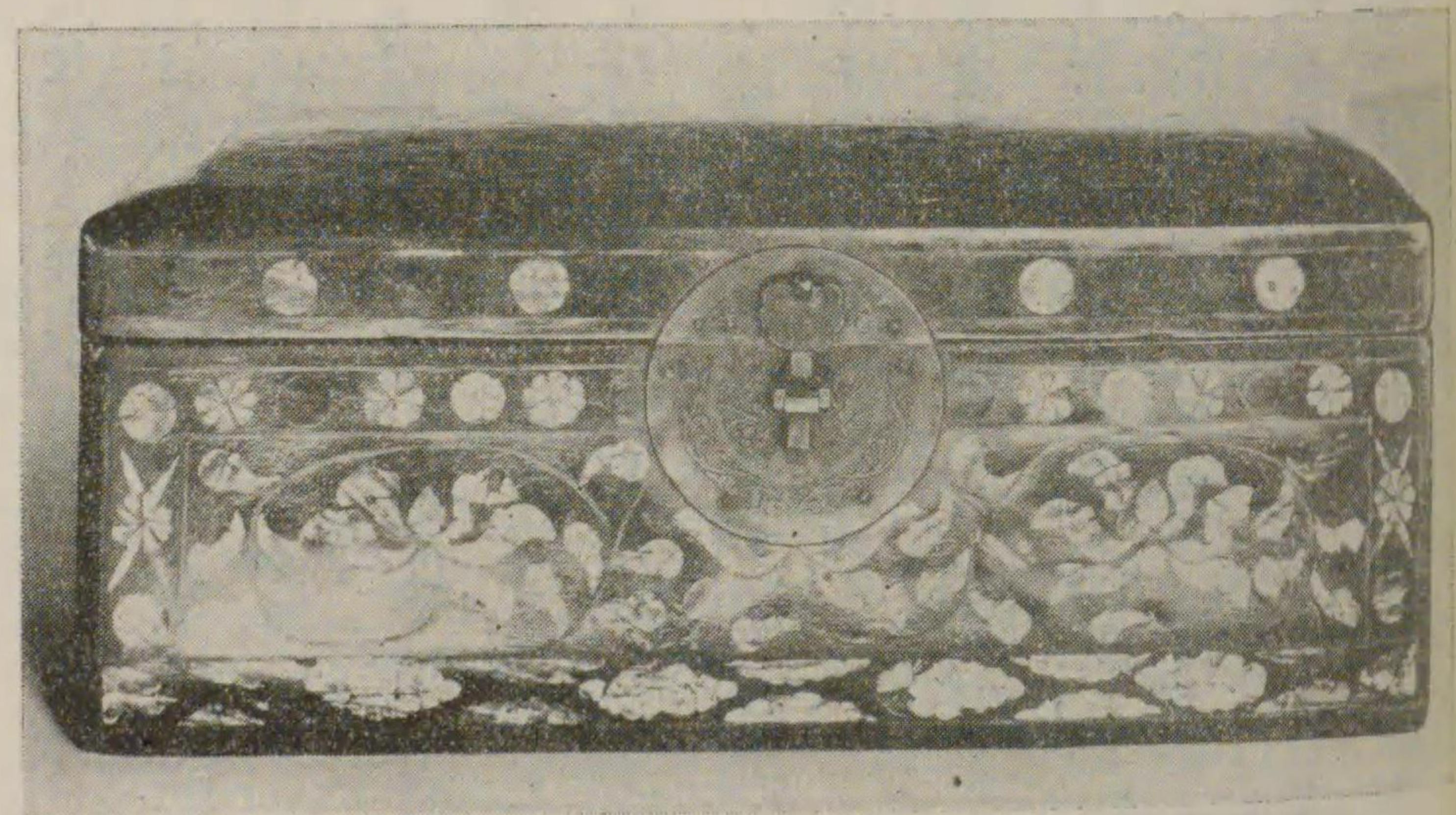
の乏しかつたため長く發達するに至らず後期に入りて始めて盛んに作らるゝ様になつた。其色はイン
ジゴ―色最も多くコバルト色もブルシアンブルー色もある。此等の色を以て山水・草花・龍・魚・禽・鹿
などの繪を極めて暢氣に達者に施し粗雑ながら一種の雅味をあらはしてゐる。

器物の種類は壺・瓶・鉢・鉢・水注・香爐・盆栽臺其他筆筒・硯滴・筆洗等の文房具にして一般に麗時の者
に比すれば厚手にして麗時の精練を欠けごも粗大豪放の風を帯び又鷹揚にのんびりとした所がある。
陶磁器に施された文様は動物には好んで龍・鳳を用ひ虎・獅子・鹿・栗鼠・兔なども屢々見うけられる。
鷹・雁・鯉などは特に多く應用せられてゐる。植物には牡丹・蓮・葡萄・蘭・菊・松・竹・梅・桃・石榴其他名
も知れぬ草花があり山水の繪もある。一體に此等の繪文様は其形態と相待ちて粗大雄健にして且一種
稚拙の趣を有してゐる。其初期の者は形狀手工共に固有の特質をあらはし頗る觀るべき者多かつたが
壬辰役後國家の疲弊につれ窯業も一頓挫を來すことゝなつた。特に其最も盛なりし南鮮の地は多く戰
禍を被りし上日本軍の爲職工の精練なる者を多數伴ひ去られたれば一層の打撃を受け終に長く衰運を
輓回することが出来なかつた。

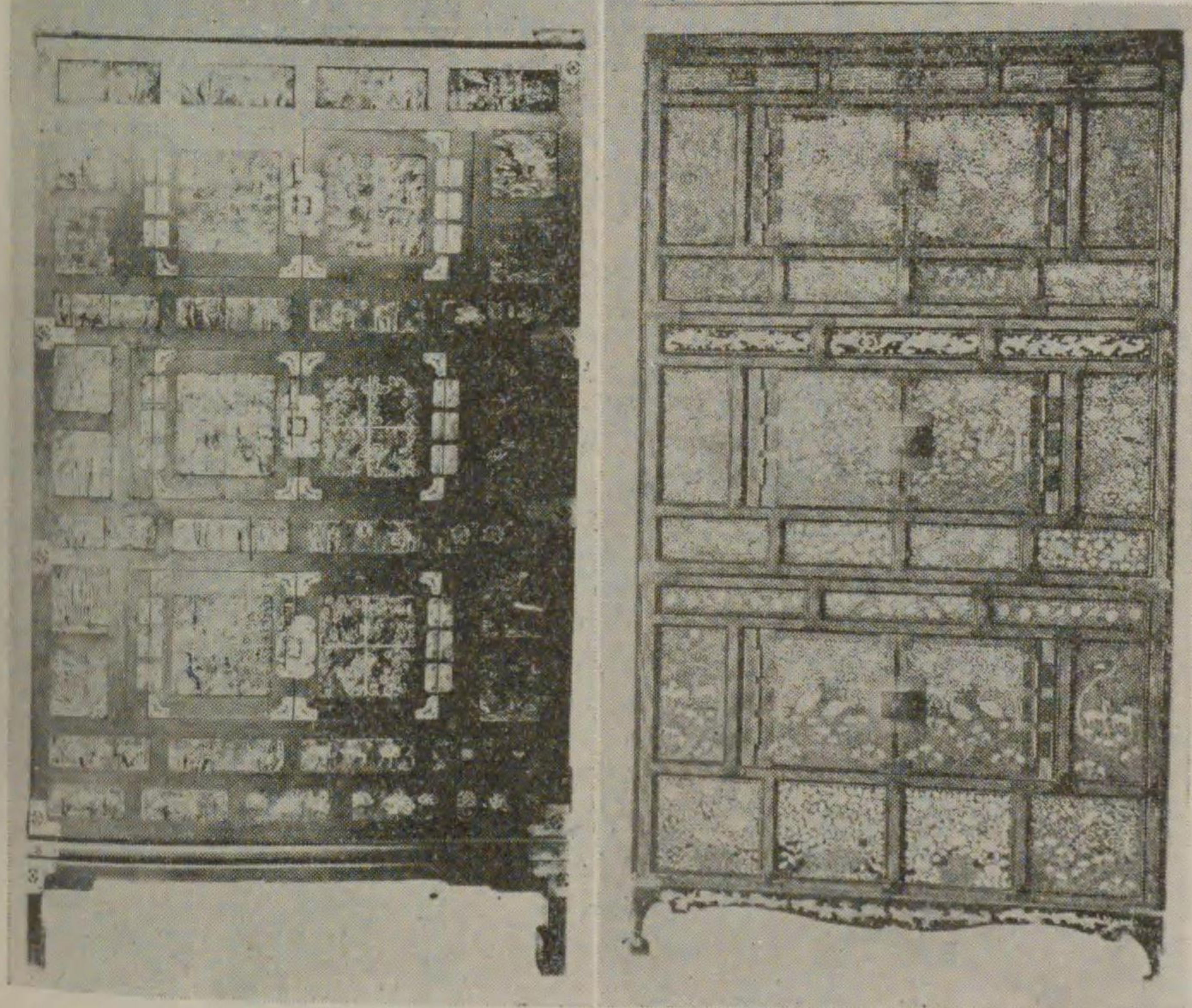
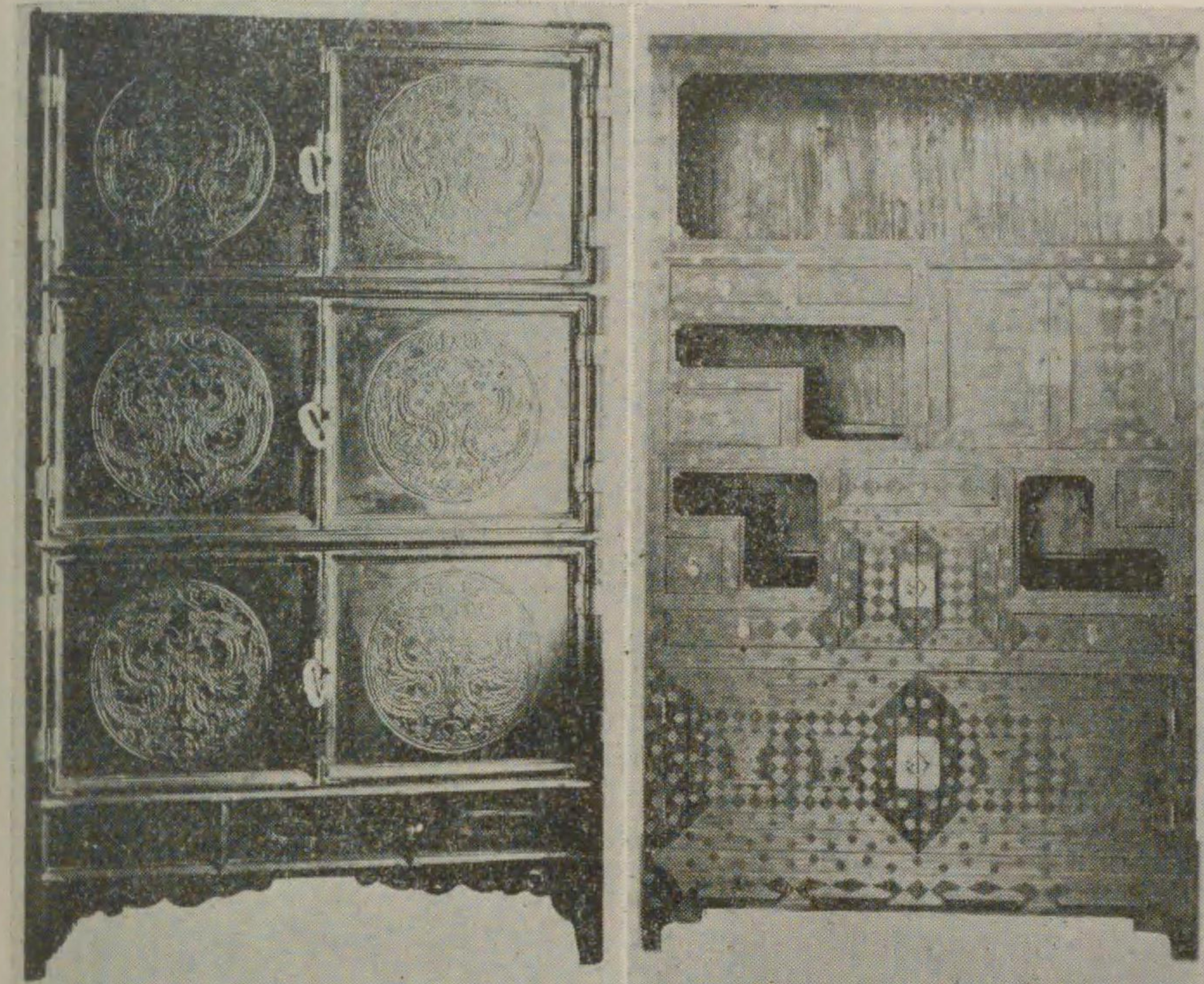
内地には室町桃山時代には茶の湯の盛行に隨ひ朝鮮より輸入せられたる茶盃・水こぼし等特に愛翫
せられたれば當時征韓の諸將士は争うて陶工の優れたる者を伴ひ歸へり各藩に於て新たに窯を開きそ



卓 圖二十七百二第



箱手銅螺 圖三十七百二第



棚飾刻彫 圖十七百二第
棚飾角華 圖一十七百二第

棚飾付張竹 圖八十六百二第
棚飾銅螺 圖九十六百二第

れ、特色ある陶磁器を作り出さしめ内地の窯業は爲めに急激の發展を見ることとなつた。島津氏の帖佐窯・鍋島氏の有田窯・毛利氏の萩窯・細川氏の八代窯・上野窯・黒田氏の高取窯・松浦氏の平戸窯などはそれである。文祿役は結局失敗に終りしも爲めに近世窯業發達の基を築いたのは朝鮮陶工の賜で意外の拾ひ物と謂はねばならぬ。

木工 二層櫛・三層櫛・櫃・婚函・文匣等の家具には往々唐木又は木理の美はしき材を用ひ多少の線形を施し或は扉面に文字・花鳥等を浮彫にあらはせるものや朱漆・黒漆を塗り華角を張り盛んに鍍金の金具を打ちて裝飾させる者がある。又筆筒・硯床・杖・刀子鞘等には屢々巧緻の彫刻を試みし者もある。

竹工 竹工は筆筒・矢筒等の小なる者には浮彫・透彫などを用ひ家具等の表面には往々薄き竹を張り付けて諸種の幾何學的文様を巧妙にあらはせる者がある。

石工 黒色・白色・黄斑色の大理石などを用ひて香爐・石火鉢・石鍋等を作れる者あれども其藝術品として見るべきは石硯にして是には雲龍・葡萄・梅竹・蓮華・龜・鶏・魚介等を浮彫にし頗る興味をそゝる様な者がある。

漆工 高麗時代には漆工の技術は意外に進歩してゐたらしい。墓中より發見せられし者には往々華麗なる螺鈿金描などを施した者もある。然るに此等の遺物は極めて少く爲めに其真相を知ることは頗る困難である。李朝に入り前期には相當の發達を見しならんも是れ亦遺物極めて乏しく今遺存せるは大抵後期の者である。漆工は衣装箱・手箱・硯箱・卓子・机などに應用され朱漆・黒漆・浮彫・螺鈿・瑋瑁張などの手法を用ひたが特に螺鈿は李朝漆器の著しき特色である。割合に大なる貝片を以て文様を大様にあらはせる者最も雅趣に富んでゐる。又頗る細小な貝片を萬遍なく置きて繊巧な文様を作つた者もある。一種の稚氣を帯ぶる所却つて吾人の感興を惹くに足つてゐる。其文様は多く山水・花鳥・魚龍・麋鹿等の題材を選めども往々紗綾形・龜甲繫・雷文等の幾何學的文様を施せしものもある。

華角工 櫛・櫃・手箱・尺・絲卷・刀子の鞘などの表面に彩色を以つて種々の文様や繪を描き其上に牛角を紙の如く薄く剥ぎたる者を貼つて裝飾させるを華角工と稱する。是れは朝鮮固有の裝飾法にして透明なる牛角を透して下繪の見ゆるは一種優雅の情趣を示してゐる。

染織工 朝鮮人は儀禮用の冠服等特殊の者の外は一般に白衣を着るの慣習あるを以つて染織術は支那や内地に比すれば割合に發達しなかつた。尤も錦・綾・羅・刺繡等には相應の進歩を示せしも意匠の變化に乏しく徒らに舊様を墨守せるのみにして斬新なる手法を示すことはなかつたやうである。

朝鮮の美術工藝 終

昭和六年一月廿五日印刷
昭和六年二月一日發行

東洋史講座第拾卷

朝鮮の美術工藝

版權所有

發行所

雄山閣

振替東京二四二二七番
電話九段二三一四番

東京市麴町區飯田町六丁目廿三番地

著作者

關野貞

發行者

東京市麴町區飯田町六丁目廿三番地
長坂金雄

印刷者

東京府戶塚町下戶塚十三、十四番地
上田榮吉

印刷所

東京府戶塚町下戶塚十三、十四番地
泰文堂印刷所

纂編會士義央中
訂校修編任責祐世邊渡

東史文 京料學 帝編學 國博學 大纂士 學官士

赤穂義士史料

呈進代無【卷三全】本見容内

赤穂浪士の名は餘りにも通俗である。事件の細部に眩惑されて、餘りに通俗に喧傳せられるが故に、その根本的史實の正當な認識を見失なひがちである。中央義士會はその名稱の如く、當時の事件に關係ある文書・記録を蒐集・撰定することを目的とした最も權威ある團體である。今や漸くその業を完成して上梓のはこびに至つた。編修及び校訂には斯の方面の權威者渡邊世祐博士が専らその任に當られた。以てこの「史料」三卷が如何に權威ある典據であり得るかはこれ以上の贅言を要せぬであらう。

本書には、義士の正確なる事實の認識に必要欠くべからざる文書が細大洩らすことなく收載されてゐる。古くより巷間に流布するものものは勿論のこと、例へば、堀部彌兵衛金丸私記の如きは、極めて最近の採訪にかゝるものにして、その公表は本「史料」を以て最初とするものにしてしかも極めて重要な資料である。

今や興味中心のために捏造された「赤穂義士」を以て満足する必要がない。吾々は本書によつて、吾々に最も親しい事件の眞に接するよろこびを味ふことが出来る。赤穂義士の事件は再び新しい意味を以て吾々に呼びかけて居るのである。

●一卷約五百頁内外。總布裝、背金文字入美本。本文の各項には校訂者の懇切なる頭註を附す。

●豫約價一冊四圓 定價壹冊四圓五十錢であるが、三月末日迄の豫約申込者に限り豫約價にて頒つ。(但し申込金は不要)。(送料各冊市内六錢、地方十八錢)。

發行所 東京市東區飯田町六番三十五番 雄山閣

編輯後記

◇第十三回配本として、本巻を御届けします。

◇本巻は一月早々配本の豫定でありましたが、御覽の通り挿畫が非常に澤山あつたので製版及び印刷に思はざる時間を要し、今漸く御届け出来る譯であります。

◇この巻の原稿は既に昨年末に脱稿されてゐたものであります。著者は年末の多忙に加へて御旅行等のため殆ど寸暇なき中に御執筆下され、その他挿畫の撰定等、一々御懇切なる御指導を賜はれたものであります。深甚の感謝を捧げます。

◇朝鮮の美術について、古代より現代までの發展の状況を詳述せられたものであつて、この方面に關する好文獻が餘り多く出て居ない現在に在つては、誠に有意義な出版であると思つて居ます。この種の叙述としては誠に手頃なものであります。

◇この前に配本してから今回まで、その間暫く間隔があつたので、會員の方で色々御心配して、わざわざ御問合せを寄越して下さられた方も少なくありませんでした。

又御懇切なる御鞭撻を寄せられた方も澤山ありました。これらに對して當方としては一々御返事を差上ることにしてゐましたが、或は洩れた方が無いとも限りません。こゝに記して深く感謝します。

◇今回も配本が遅れて申し譯けありませんでした。しかし、いつも配本遅延の御詫ばかりしてゐても濟まないこととありますから、今度はもつと間隔をつめて御届け出来るやうに一層努力をする積りで居ます。因みに、次回の配本は、伊藤忠太博士著「支那建築史」の豫定であります。最後の第十五回配本は、常盤大定博士著「支那佛教史」、宇野哲人博士著「支那哲學史」他二篇の大冊となる豫定であります。讀史地圖はこの最後の巻と殆ど同時に御届けすることにならうと思ひます。

◇春の讀書期を前にして、出版界も大いに動いて來ました。弊閣に於ても種々計畫する所ありますが、未だ案が熟せず發表を見合せてゐるものもあります。その内にあつて、「異説日本史」及び「赤穂義士史料」の二つは、共に近く諸君の前に詳細を發表することが出来ると思ひます。發表の曉は壓倒的な御後援を希望します。

